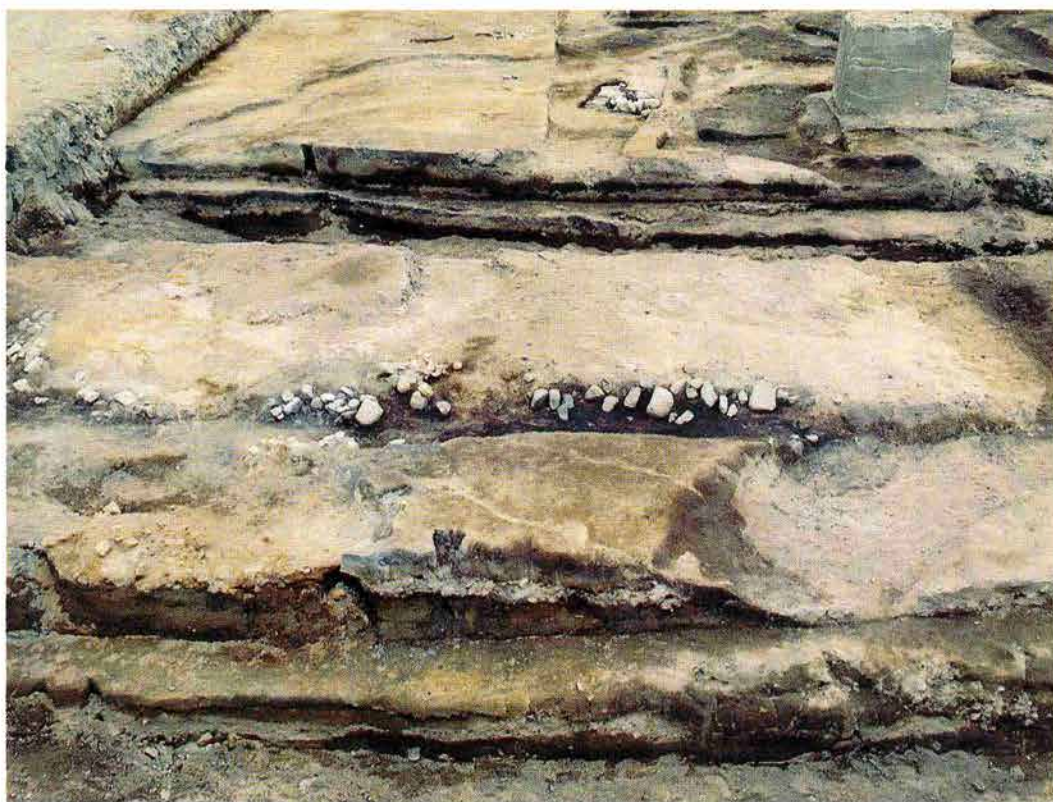


坊ヶ塚遺跡

1990. 3

兵庫縣教育委員會



S X II と地震の痕跡



調査風景

例 言

1. 本書は、神戸市東灘区住吉本町に所在する『住吉宮町遺跡群－坊ヶ塚遺跡』の埋蔵文化財調査報告書です。
2. 住吉宮町遺跡群では、数次にわたって調査が行われており、同名の報告書が予想されることから、『住吉宮町遺跡群II』としました。
3. 発掘調査は、昭和61年度は神戸ステーション開発株式会社の、昭和62年度は西日本旅客鉄道株式会社大阪工事事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり実施しました。
4. 本報告にかかる遺跡については、当初『坊ヶ塚遺跡』として報告する予定でした。周知の遺跡である『住吉宮町遺跡』とは調査の結果立地する微高地が異なり、遺跡単位として別遺跡と考えたからです。しかし、両遺跡が谷を隔てて向かいあっており、強い関係にあることは事実です。それゆえに『住吉宮町遺跡群－坊ヶ塚遺跡』と呼称します。現地説明会や展示会資料の『坊ヶ塚遺跡』とは同一の遺跡であることを明示、混同のないように注意戴くようお願いします。
5. 本書で示す標高値は、神戸市設定のB. M. を使用した値で、方位は磁北です。
6. 調査は、兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 技術職員 岡田章一・渡辺 昇・高瀬一嘉が担当しました。
7. 地理的分野の調査は、高橋 学氏に参加して戴きました。調査に際して有形無形の御教示を得ましたことを感謝致します。また、地震の痕跡が確認されたことについて、多数の方々に御教示を得ましたことも感謝致します。
8. 遺構写真ならびに遺物写真は調査員が撮影しました。空中写真は国土地理院ならびに㈱パスコ撮影のものです。また、気球写真は㈱国際航業および㈱ワールド航測撮影のものです。
9. 整理作業は、昭和63・平成元年度に神戸ステーション開発株式会



図1 神戸市の位置

社の委託を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施しました。

10. 土師器の胎土分析と赤色顔料の分析を武庫川女子大学 安田博幸教授・森 眞由美助手にお願いし、玉稿を戴きました。お礼申し上げます。
11. 報告は出来る限り、平易にするように努めたつもりです。そのために、調査参加者によって検討しました。執筆で無記名のところは、発掘調査参加者である井川佳子・渡辺裕子・和田マユミ、整理調査参加者である伴 悦子・八木和子との検討を元に渡辺 昇・高瀬一嘉が執筆しました。
12. 実測図は断面で器種を分けています。白抜きは弥生土器・土師器、黒塗りは須恵器、斜線は瓦器、網目のトーンは陶磁器を表しています。
13. 本報告にかかる出土遺物およびスライドなどの資料は、現在兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）で保管しています。



図2 住吉宮町遺跡群の位置

本文目次

例言

I. はじめに

1. 調査に至る経緯と経過…………… 1
2. 調査の組織…………… 3
3. 昭和63年度確認調査の結果…………… 4
4. 今までの住吉宮町遺跡群の調査…………… 6

II. 歴史的環境…………… 9

III. 調査結果

1. 遺構の概観……………17

2. 周溝墓・古墳

- ① SX01 ……………21
- ② SX02 ……………30
- ③ SX03 ……………38
- ④ SX04 ……………41
- ⑤ SX05 ……………46
- ⑥ SX06 ……………48
- ⑦ SX07 ……………49
- ⑧ SX08 ……………59
- ⑨ SX09 ……………60
- ⑩ SX10 ……………64
- ⑪ SX11 ……………66
- ⑫ SX12 ……………69
- ⑬ SX13 ……………72
- ⑭ SX14 ……………74

3. 建物跡

- ① SB01 ……………78
- ② SB02 ……………79
- ③ SB03 ……………80

4. 墓(石棺墓・土器棺墓・木棺墓・土壙墓 ・石蓋土壙墓)

- ① ST01 ……………82
- ② ST02 ……………85
- ③ ST03 ……………87
- ④ ST04 ……………89
- ⑤ ST05 ……………90
- ⑥ ST06 ……………93

5. 水田跡

- 上層水田……………94
- 中層水田……………95
- 下層水田……………96

6. その他の遺構

- ① 地震に伴う遺構(痕跡) ……………98
- ② SK01……………100
- ③ SK02……………101
- ④ SK03……………102
- ⑤ その他の遺構 ……………103
- ⑥ 遺構外の遺物 ……………103

IV. 土層転写覚書……………108

V. 土器の胎土分析および土器に付着の赤色 顔料物質の微量化学分析……………115

VI. 地形環境分析……………121

VII. おわりに……………135



図3 住吉宮町遺跡群 空中写真(パスコ撮影)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

調査に至る経緯 坊ヶ塚遺跡は、神戸市東灘区住吉本町に所在する遺跡です。昭和61年度の確認調査によって初めて確認された遺跡です。昭和60年度に刊行された『神戸市文化財分布図』では記載されていない遺跡でした。しかし、国鉄（現、西日本旅客鉄道株式会社）住吉駅周辺の再開発事業の計画が策定され、文化財の有無についても照会があり、協議が行われ始めました。

調査地北側に以前『坊ヶ塚古墳』と呼ばれる前方後円墳があり、字名として残っていました。調査地域も昭和60年度の住所表示変更までは住吉町字坊ヶ塚と言われていました。そのことから、坊ヶ塚古墳そのもの以外にも古墳の存在の可能性がないか期待されていました。そして、昭和60年に調査地点から西へ約500m離れた本住吉神社西側で、古墳が確認されました。住宅建設に伴う調査で、古墳14基が確認され、東灘区の古墳時代を考える上で貴重な発見例となりました。住吉宮町遺跡と命名され、昭和60年度『神戸市文化財分布図』にも「東灘区No.39住吉宮町遺跡」として挙げられています。それによって、住吉神社周辺でも調査が行われるようになりました。そのような状態でしたので、今回調査する部分につきましても確認調査が必要であろうと考えられるようになり、協議が行われました。

立会調査 事業を担当する神戸ステーション開発株式会社と兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会で協議を行った結果、昭和61年11月に神戸市教育委員会によって確認調査が実施され、遺跡として知られるようになりました。その結果、住吉宮町遺跡が北側まで広がっているだろうと考えられました。しかし、遺跡としては認められたものの、遺跡の広がりや性格など不明な点が多いことから、さらに細かい調査の必要性が求められました。

確認調査 調査計画などの問題から、昭和62年3月に範囲確認を主目的とする調査を兵庫県教育委員会によって実施しました。ほぼ全面にわたって遺構が検出されたので、西側の遺構がす

全面調査 すでに残っていないところを除いて、全面調査を実施することとなりました。今回調査した部分は第5回めの調査となりますので、住吉宮町遺跡群としては、第5次調査と呼ばれます。それ以降13次までの調査が行われています。

住吉駅再開発事業の全体計画などから、早急な調査の必要に迫られました。そのため、引き続き全面調査に着手することになりました。年度は跨がったものの、昭和62



図4 坊ヶ塚遺跡遠景

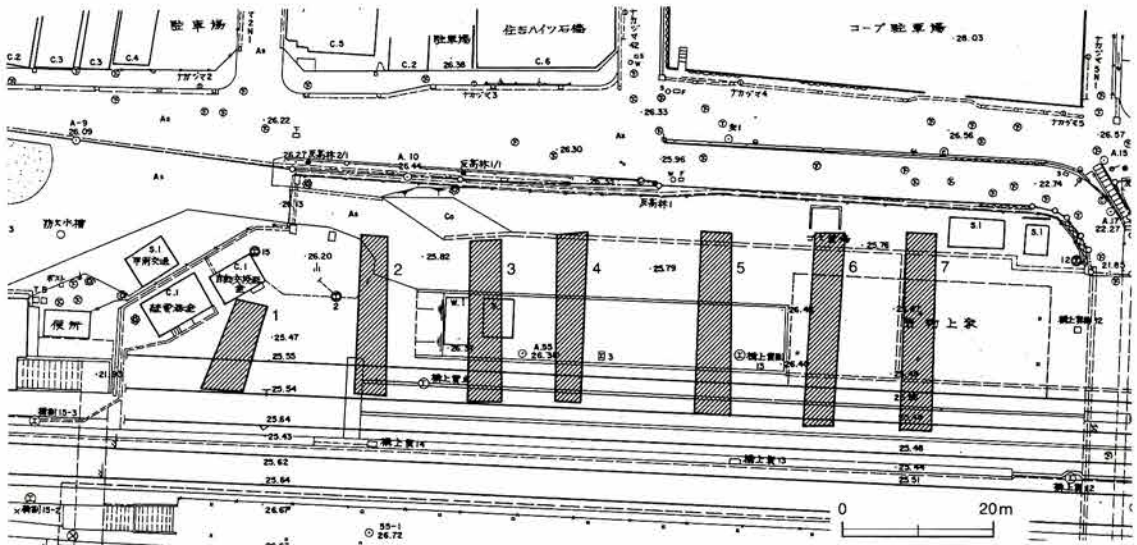


図5 確認調査の位置

年3月2日から調査を開始し、年度当初の4日間は休んだものの、継続し5月29日にはすべての調査を終了しました。線路軌道敷横ということから安全対策の必要性があり、調査期間内にゴールデンウィークを挟んだことから、軌道敷から10mは立ち入れない時期もありました。その中で、ある意味で無理な調査を遂行し、何とか調査を終了することができました。行政の調査としては珍しくゴールデンウィーク期間以外は土、日曜日でも調査を行って、間に合わすことが出来ました。調査期間は、確認調査は16日間・全面調査は52日間の合計68日間を費やしました。

現地説明会 市街地での調査であり、排土置き場がないことから、東西2分割して調査を行いました。そのため、全貌を撮影することができず、現地を一般公開することもできないので、2回に分けて全景写真（気球使用—業者委託）ならびに現地説明会を行いました。最初に東半を4月18日（土）に行い、次に5月23日（土）に西半の現地説明会を行いました。写真撮影は各々1日前に実施しました。調査は予想以上の成果を挙げることができました。下層での水田の検出は時間的な制約から断面観察が主となったことが惜しまれますが、最小限の成果は挙げられたものと思います。当初は市街地でこれほど遺構が残っているとは思いませんでした。今後の調査の一指針ともなった調査成果といえます。

整理調査 調査終了後、整理作業を行いました。ただ、調査担当者の整理作業の計画などから、報告書刊行はやや遅れてしまいました。実測までの作業を昭和63年度に、報告書刊行までを平成元年度に兵庫県埋蔵文化財調査



図6 展示風景

事務所において行いました。

遺物の展示 整理事業期間中にも、随時遺物を主に市民の方々に見て戴きました。住吉駅北側の兵庫相互銀行住吉支店では調査終了の翌月である6月22日(月)~27日(土)までの6日間『坊ヶ塚遺跡展』を行い、現地説明会に参集戴いた方をはじめ多数の方々に見学して戴きました。また、昭和63年11月から現在に至るまで、兵庫県民会館2階の『ふるさと資料室』の1コーナーで常設展示しています。それらによって、文化財への理解が深まれば幸いです。

2. 調査の組織

①立会調査(昭和61年度)

神戸市教育委員会 文化財課

課長 増川修三

埋蔵文化財係長 奥田哲通

(調査担当)

学芸員 口野博史

②確認調査(昭和61年度)

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

課長 北村幸久

文化財担当参事 森崎理一

埋蔵文化財調査係長 大村敬通

(調査担当)

主任 岡田章一

技術職員 高瀬一嘉



図7 調査風景



図8 現地説明会

③全面調査（昭和62年度）

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

課長 北村幸久

文化財担当参事 森崎理一

埋蔵文化財調査係長 大村敬通

(調査担当)

主任 渡辺昇

技術職員 高瀬一嘉

(調査参加者)

地理の調査 高橋学

(立命館大学)

調査補助員

田中 騰・中西 信・井川佳子

渡辺裕子・和田マユミ

④整理調査（昭和63年度）

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

課長 中根孝司

文化財担当参事 日野和広

課長補佐 松下 勝

(調査担当)

主任 渡辺昇

技術職員 高瀬一嘉

(調査参加者)

地理の調査 高橋学

(立命館大学)

調査補助員

石澤(岡村)真理子・伴悦子



⑤整理調査（平成元年度）

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

所長 大江 剛

副所長 村上紘揚

整理普及課長 松下 勝

(調査担当)

主任 渡辺昇

技術職員 高瀬一嘉

(調査参加者)

嘱託員

石澤真理子・伴悦子・八木和子



図9 整理調査風景

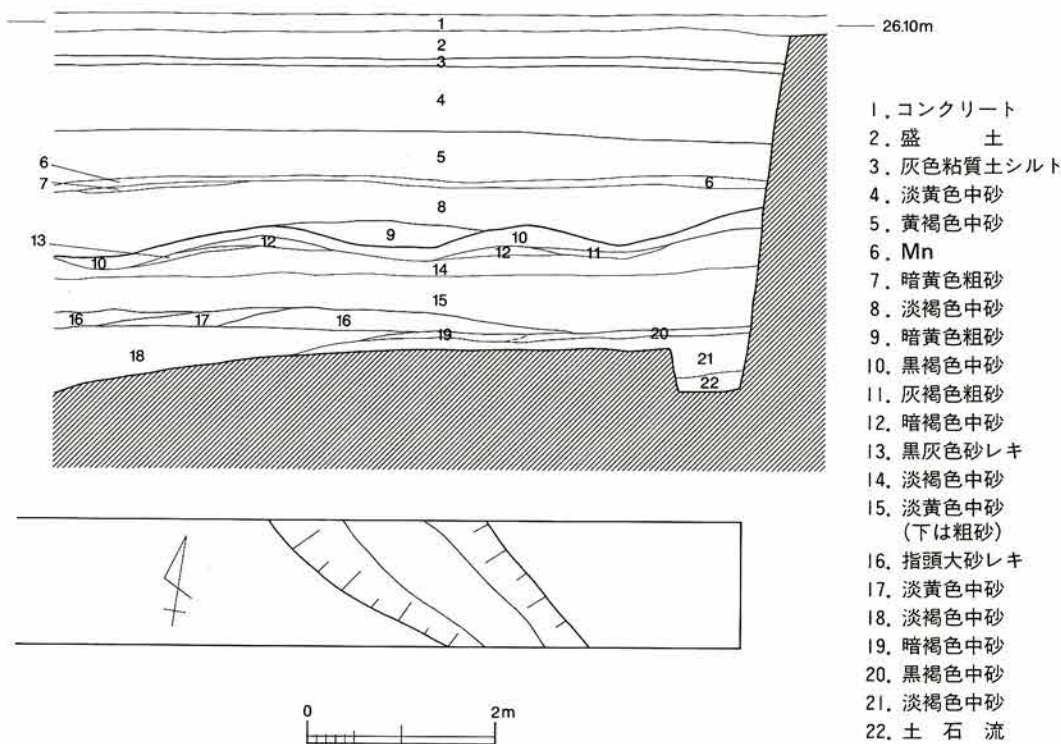


図10 昭和63年度確認調査実測図

3. 昭和63年度確認調査の結果

昭和62年度は住吉駅が機能している都合から、全てを対象とした調査を実施することは困難でした。そのため、一部については翌年の昭和63年度に確認調査を行いました。

調査対象地は昭和62年度調査区の西側に相当します。調査の結果、一部を除いて駅舎などによって遺構面は破壊されていることが明らかになりました。

調査区内で溝を確認しています。幅1.8mで深さは0.2mですが、埋土の状態などから古墳（方形周溝墓）の一部の可能性が十分に予想されます。ただ、南側は遺構面は残っておらず、調査区内でもごく狭い範囲だけ遺構が残存していたものと思われます。

調査区の西端の有馬道に近いところでは旧河道そのものを検出しており、遺構面の西端を確認したものと思われます。



図11 確認調査風景



図12 確認調査トレンチ

4. 今までの住吉宮町遺跡群の調査

昭和60年度に住吉宮町遺跡群が発見されて以来、今までに13回の調査が行われています。毎年調査が行われており、初めは遺跡の存在に疑問が持たれていましたが、今では遺跡の存在を肯定した調査になっています。しかし、常に洪水の危険に晒されていた地帯なので地形(遺構)の変化はとても激しいところです。13次の調査を実施したことによって、少なからず遺跡群の中の小単位が明らかになっています。今回報告します第5次調査区の西側に有馬道沿いに旧河道が流れ、東西に遺跡を分けています。この事実によって『坊ヶ塚遺跡』という別名称を付ける原因となりました。しかし、古墳の時代は近い時期で埋葬を行った集団そのものが別集団とも断定出来ませんので、同一の遺跡群として呼ぶことにしました。第9次調査では盟主墳と思われる住吉東古墳や同時期の竪穴住居跡が確認されるなど、多くの事実がわかってきました。今後、調査が進むと新しい事実がわかるでしょう。



図13 第1次調査 古墳(神戸市教育委員会提供)



図14 第7次調査 土器棺の復原



図15 第9次調査 住吉東古墳(神戸市教育委員会提供)

表1 住吉宮町遺跡群調査一覧表

次数	年度	所在地	調査主体	主な遺構
1	60	住吉宮町7丁目	神戸市教委	古墳3基
2	60	住吉宮町7丁目	神戸市教委	古墳8基
3	60	住吉宮町3丁目	神戸市教委	旧河道、土壌
4	61	住吉宮町7丁目	神戸市教委	箱式石棺3基
5	61・62	住吉本町1丁目	兵庫県教委	古墳14基、方形周溝墓3基、竪穴住居跡1棟 他
6	62	住吉宮町6丁目	兵庫県教委	溝、土壌
7	62	住吉宮町4丁目	兵庫県教委	古墳1基、土器棺、水田跡 他
8	62	住吉宮町7丁目	神戸市教委	中世ピット
9	63	住吉宮町4丁目	神戸市教委	古墳4基(住吉東古墳含)、竪穴住居跡、建物 他
10	63	住吉宮町4丁目	兵庫県教委	古墳1基
11	63	住吉宮町6丁目	神戸市教委	掘立柱建物(鎮壇具)、土壌、噴砂 他
12	元	住吉宮町4丁目	兵庫県教委	古墳2基
13	元	住吉宮町4丁目	神戸市教委	古墳2基、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物2棟 他

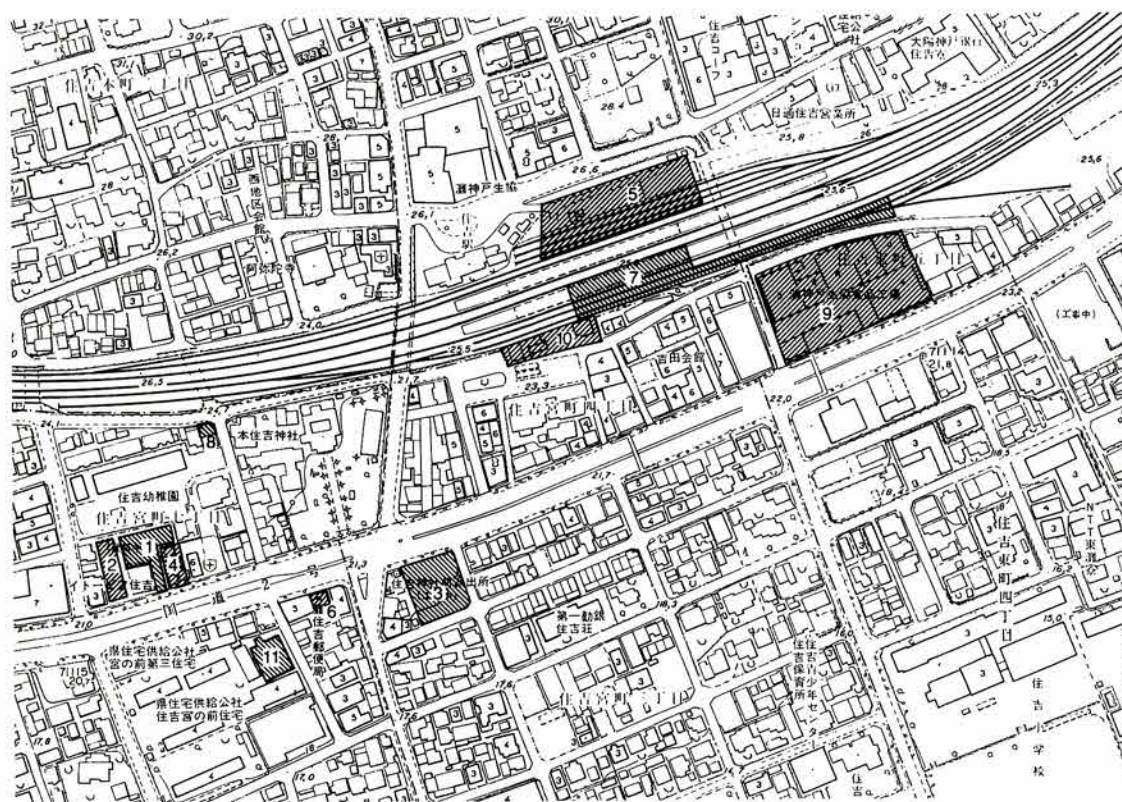


図16 住吉宮町遺跡群調査地点



図17 第10次調査 古墳



図18 第7次調査 噴砂



図19 第11次調査・鎮壇具
(神戸市教育委員会提供)

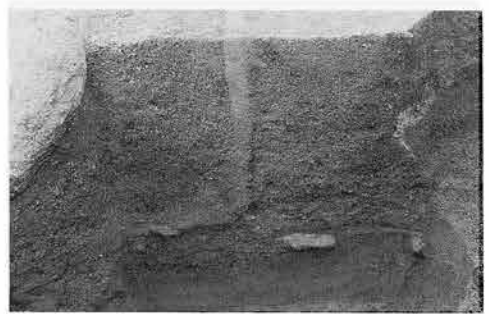


図20 第11次調査 噴砂
(神戸市教育委員会提供)

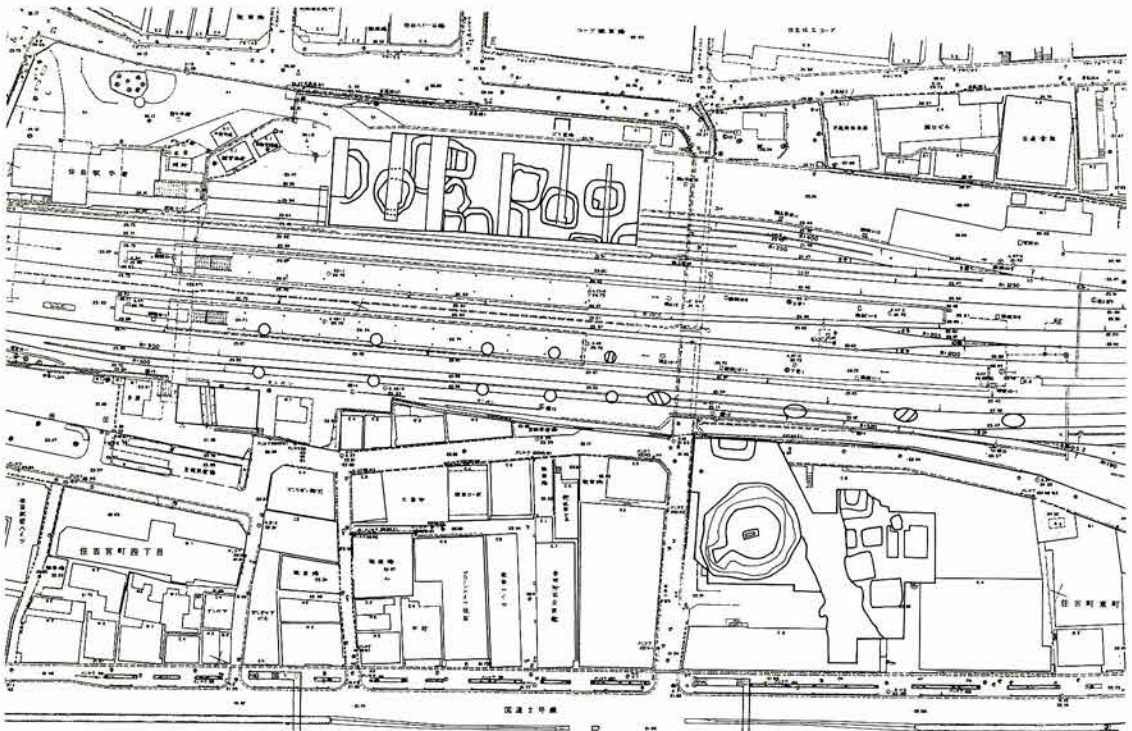


図21 住吉宮町遺跡群・坊ヶ塚遺跡 遺構配置図

II. 歴史的環境

坊ヶ塚遺跡の名称 坊ヶ塚遺跡は、現在は神戸市東灘区住吉本町4丁目1-2ですが、昭和60年の新番変更によって生まれた表示です。それ以前は、住吉町字坊ヶ塚と呼ばれていました。その字名を遺跡名にしたわけですが、江戸時代の古絵図を見ますと（図22など）調査地点の北側に『坊ヶ塚』と呼ばれる南向きの前方後円墳があります。今は破壊されて残されていませんが、この古墳が字名の元になったことは明らかです。

遺跡の広がり 今回調査を行うまで、遺跡の存在は知られていませんでしたが、南西側一帯には住吉宮町遺跡が広がっており、その関連が考えられます。当初は同一の遺跡の可能性も考えましたが、調査が進みますと現在の有馬道といわれる調査地点の西側に旧河道があることが判明しました。前回までに調査が行われていた住吉宮町遺跡とは間に旧河道が走り、立地している微高地が異なっていることが判りました。

坊ヶ塚遺跡の西の端は把握しましたが、東の広がりには明らかではありません。ただ、駅南で調査された住吉宮町遺跡とは同じ丘陵上に立地した遺跡と考えられます。それゆえに遺跡名が異なることは混同を招く恐れがあります。将来、住吉周辺の遺跡全体を住吉（宮町）遺跡群とし、その坊ヶ塚遺跡（支群）とでもするのが正しいものと思われまます。

坊ヶ塚遺跡の規模は、東西120m、南北300m程度と想定されますが、自然に形成された微高地ですから、不定形で複雑に入り組んだ形をしていたでしょう。同じような微高地が幾つか並んで、その上に遺跡が営まれています。西側の遺跡とは立地する微高地は異なっていますが、遺跡の性格

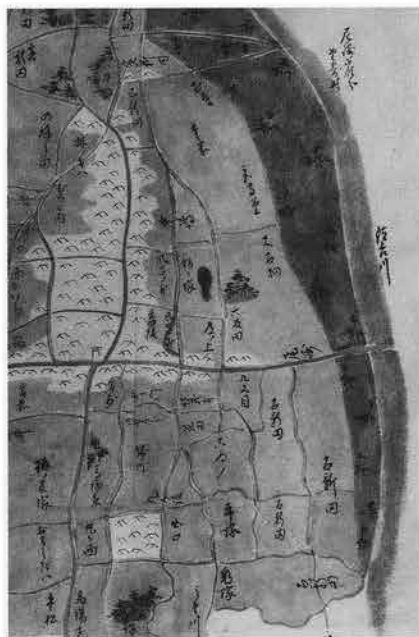


図22 住吉神社に残された古絵図



図23 坊ヶ塚遺跡からの北側遠景

は類似しています。今後、細かい調査が進んでいくと、さらに明らかになっていくでしょう。

東灘区をはじめ、神戸市街地には遺跡は余り残っていないと思われていましたが、最近の調査で現在の町の下に埋もれていることが明らかになってきました。坊ヶ塚遺跡もその一つですが、それ以外にも多くの遺跡が確認されています。それらの成果を踏まえて周辺の歴史を概述してみます。

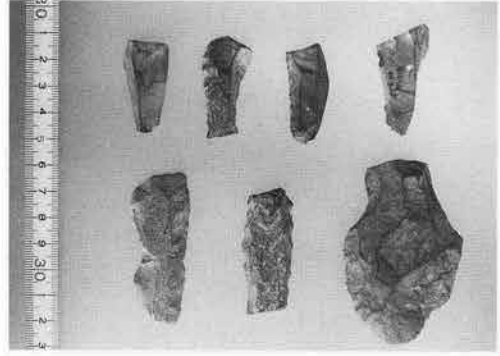


図24 朝日ヶ丘遺跡出土石器

(芦屋市教育委員会提供)

旧石器時代 周辺で最初に祖先の痕跡を残すのは、芦屋市の朝日ヶ丘遺跡です。ナイフ形石器と台形石器などが出土しています。ナイフ形石器は小型のものがほとんどです。井島型ナイフと呼ばれるもので、井島I文化期(約1万～1万2千年前)の石器と考えられています。旧石器時代も終わり頃の遺跡で、引き続いて縄文時代へと引き継がれています。それよりも古い時期の国府型ナイフやその文化期の特徴である翼状剥片も出土しており、この時期(約1万5千年前)から生活していたことが明らかです。朝日ヶ丘遺跡周辺では岩ヶ平遺跡(芦屋市)、老松遺跡(老松1号墳下層・西宮市)、会下山遺跡(芦屋市)、桜ヶ丘B地点遺跡(灘区)でも国府型のナイフ形石器が出土しており、六甲山麓で生活していたことがわかります。

縄文時代 旧石器時代の遺跡では、継続して生活しています。早創期になると、朝日ヶ丘遺跡では尖頭器を代表とする文化期になります。小型の尖頭器を使っています。坊ヶ塚遺跡北西方向の滝ヶ奥遺跡(灘区)では大型の有舌尖頭器が出土しています。単独出土で詳しいことはわかっていません。早創期の土器としては境川遺跡(須磨区)で神宮寺式の押型文土器が出土しています。朝日ヶ丘遺跡では、引き続き古いタイプの石鏃が出土していますが、土器は前期初め(約6千年前)の条痕文土器から出土しています。早期の遺跡としては、同じく芦屋市の山芦屋遺跡で山形の押型文土器があります。また、高山寺式と呼ばれる次



図25 西岡本遺跡縄文時代住居跡

(六甲山麓遺跡調査会提供)

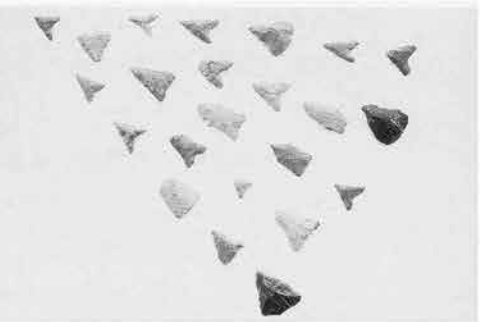


図26 西岡本遺跡出土石鏃

(六甲山麓遺跡調査会提供)



- | | | | |
|-----------|------------|-----------|-------------|
| 1. 坊ヶ塚遺跡 | 2. 坊ヶ塚古墳 | 3. 住吉宮町遺跡 | 4. 郡家遺跡 |
| 5. 処女塚古墳 | 6. 東求女塚古墳 | 7. 本山遺跡 | 8. 扁保曾塚古墳 |
| 9. 岡本遺跡 | 10. 岡本梅林古墳 | 11. 保久良神社 | 12. 金烏山遺跡 |
| 13. 荒神山遺跡 | 14. 赤塚山遺跡 | 15. 渦ヶ森遺跡 | 16. 鴨子ヶ原古墳群 |

図27 坊ヶ塚遺跡の位置と周辺の遺跡

の段階の土器やさらに新しい早期末から前期はじめの条痕文土器も出土しています。特殊なものとして綾杉文があり、注目されています。山芦屋遺跡周辺および岩ヶ平遺跡周辺では古くから地元研究者（紅野芳雄氏・吉岡 昭氏など）によって表面採集を主とした活動が行われ、多くの石器が残されています。なかには黒曜石も含まれており、貴重な資料です。最近調査された西岡

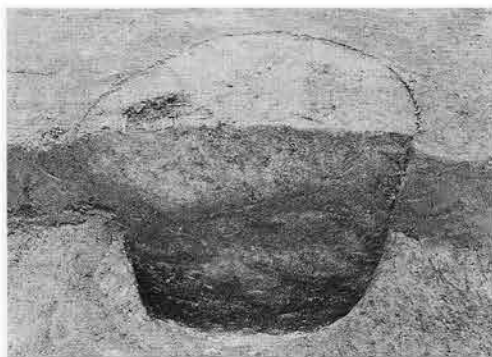


図28 本庄町遺跡 ドングリピット

本遺跡では早期の住居跡（図25）が確認されています。1棟だけですが、西日本では数少ない調査例です。壁沿いに小ピットが巡るもので、この時期に類例の多いタイプです。この頃は、縄文海進と呼ばれる気候の温暖な時で、海が現在の国道2号線付近まで広がっていました。そのため、今の扇状地上には遺跡は存在しません。

中期前半の遺跡はほとんど知られていません。中期以降徐々に寒冷化し、海岸線は南に後退していきます。そのため後期になると、本庄町遺跡・井戸田遺跡（東灘区）などの国道2号線付近にも遺跡が営まれるようになります。本庄町遺跡ではドングリを入れた貯蔵穴が確認されています。篠原遺跡（灘区）は興味深い遺跡で、後期の土偶や注口土器という特殊な遺物が出土しています。山芦屋遺跡でも後期の磨消縄文を施した土器が出土しています。丘陵部と平野部いずれでも生活していたことがわかります。



図29 北青木遺跡 鋏出土状態

晩期になると、いままでの遺跡に加えて本山遺跡・森北町遺跡・北青木遺跡（以上東灘区）など遺跡数は増加していきますが、遺跡の実態などは不明なところが多いようです。雲井遺跡（中央区）では土器を棺として使った土器棺墓が調査されています。

弥生時代

弥生時代になると、縄文晩期の土器を出土している本庄町遺跡・北青木遺跡で、弥生時代前期の土器が見られます。特に、北青木遺跡では前期でも古い段階の土器を多数持っています。そして、前期の中で生活を放棄している特徴あるムラです。同様の遺跡は尼崎市の上の島遺跡、神戸市西区の吉田遺跡があり、弥生文化の開拓者のムラではないかとも考えられています。最近の調査で、現在の市街地の下から続々と遺跡が確認されており（戎町遺跡・楠荒田町遺跡など）、さらに調査研究が進むとこの時期の六甲山麓の地域の状況も明らかになっていくことでしょう。また、本庄町遺跡・戎町遺跡では前期の水田跡が調査されています。

中期(約1800～2100年前)になると、さらに遺跡数は増加します。この時期は高地性集落と呼ばれる丘陵上の遺跡が現れます。全国的にも高地性集落の多い地域です。西から布引丸山遺跡(中央区)、赤塚山遺跡・伯母野山遺跡・荒神山遺跡・保久良山遺跡・金鳥山遺跡(以上東灘区)、会下山遺跡・城山遺跡(以上芦屋市)、五ヶ山遺跡(西宮市)と遺跡が築かれています。瀬戸内海を望む高地性集落は中期で終わるのが大半ですが、阪神間の高地性集落は、ほとんどが後期までで継続する集落です。特に会下山遺跡・荒神山遺跡は後期に中心を持つ特徴的なムラです。伯母野山遺跡は丘陵上の遺跡であるにもかかわらず、イイダコ壺を多数出土した興味深い遺跡です。また、森北町遺跡では溝から前漢鏡が出土しています。また、この時期を代表するものとして銅鐸があります。桜ヶ丘遺跡(灘区)の一括出土品は国の重要文化財にも指定されており、広く知れわたっています。銅鐸14口のほか銅戈も7本出土しています。銅鐸がまとめられて埋納されていたことから、ムラからクニへの移行を示す資料ではないかとも考えられています。六甲山南麓は銅鐸の出土遺跡数が多いことも特徴です。桜ヶ丘遺跡から東へ渦ヶ森遺跡・生駒

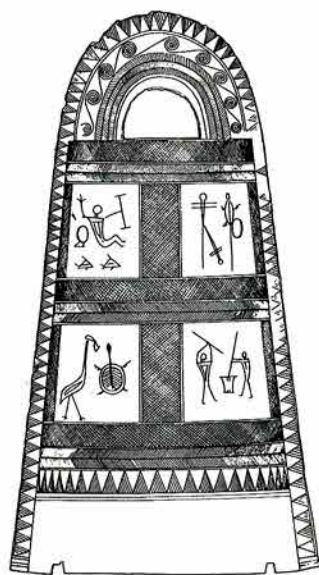


図30 桜ヶ丘遺跡銅鐸(報告書から)



図31 深江北町遺跡円形周溝墓

遺跡・森遺跡(以上東灘区)、堂の上遺跡(芦屋市)、津門遺跡(西宮市)とあります。最近、坊ヶ塚遺跡東方1.5kmの本山遺跡でも銅鐸が出土しています。

後期になると、さらに遺跡数は増加します。丘陵上・扇状地上に加えて、大阪湾に突き出した砂州上に営ま



図32 会下山遺跡復原住居



図33 会下山遺跡復原倉庫

れた西宮神社社頭遺跡のような立地条件の遺跡もあります。よく知られた遺跡としては、高地性集落の代表の一つに挙げられる会下山遺跡が北北東約4.1kmのところに位置します。集落内の状況が理解される好例で、高地性集落の特徴を考えさせる『狼煙跡』や、柵列も確認されています。また、坊ヶ塚遺跡の北西1.5kmのところに立地する郡家遺跡では竪穴住居跡と円形周溝墓が



図34 求女塚(摂津名所図会から)

調査されています。後期末になると、坊ヶ塚遺跡でも遺構が確認され始めます。方形周溝墓が確認されています。周辺の地域ではこの時期周囲に溝を巡らす墓は円形が多いようですが、坊ヶ塚遺跡では方形と変わっています。円形周溝墓を調査した遺跡は、郡家遺跡以外に深江北町遺跡（東灘区）があります。

古墳時代

古墳時代になると、点々と前期古墳が構築されています。旧海岸線付近の古墳は、万葉集や伊勢物語・謡曲で有名な悲恋伝説である菟原処女の伝承の元となった古墳です。中央に南向きの前方後方墳である処女塚古墳を挟んで、東西に各々処女塚古墳の方を向く東西求女塚古墳が位置しています。3基とも早くから遺物が出土しており、その重要性は広く知られていましたが、最近の調査でさらに新たな事実が加わりました。処女塚古墳は全長66mを測り、3段築成の前方後方墳です。埋葬施設は明らかではありませんが、前方部と後方部のつなぎ目（くびれ部と言います）で小規模（幅0.26m、長さ0.92m）の箱式石棺が調査されています。勾玉が1点副葬されていました。他に丹後地方（京都府北部）に分布する特殊器台も出土しています。現在遺跡公園として整備され、市民の方々に活用されています。菟原処女の碑も墳頂に立っています。東求女塚古墳（呉田求女塚古墳）は坊ヶ塚遺跡の南南西0.8kmの阪神電鉄の住吉駅北東方向に位置します。前方部はすでに削られて残っていませんが、その土取りの際に鏡などの遺物が出土しています。西求女塚古墳（味泥求女塚古墳）は、灘区都通に所在しており、処女塚古墳から西へ2.1km離れています。現状は公園ですが、古墳公園として整備保存するため、昭和60年度に確認調査が実施されました。その結果、埋葬施設は竪穴式石室と考えられ銅鏡片も出土しています。石室には朱が塗られているようです。また、多数の土師器が出土し、今まで考えていた時期より古く（約1600～1650年前）なりそうです。多数の土器は埋葬施設の上面から出土しており、埋葬後に行われた祭祀を示すものと思われます。これら土器群が山陰地方の土器であることも興味深い点です。旧海岸線付近以外にも前期の古墳は造られています。現在のJRの線路に近い部分です。ここは、丘陵から平野部へと地形の変化するところです。坊ヶ塚遺跡の遺跡名の元となった坊ヶ塚古墳もこの部分に相当します。約30m前後の南に向く前方後円墳と考えられていますが、絵図に描かれていたり伝承に残っているだけで、残念ながら

詳しいことはわかっていません。同種の古墳は、扁保曾塚古墳（東灘区）、親王塚古墳（芦屋市）があります。

古墳時代

前期の集落

次に前期の集落は、坊ヶ塚遺跡で住居跡が1棟検出されています。古墳の下層から見つかったため、ほとんど古墳によって壊されていました。その時期の墓も確認されています。土器棺墓と土壙墓で、ある程度生活を営んでいたことがわかります。北西の郡家遺跡でもこの時期の住居跡が調査されています。

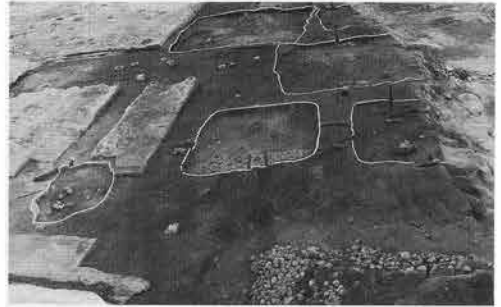


図35 住吉宮町遺跡 竪穴住居跡
(神戸市教育委員会提供)

中期古墳

前期末から中期の古墳も前期と同じような立地条件のところにあります。旧海岸線付近には金津山古墳・打出小槌古墳（以上芦屋市）があります。そして、兵庫県最大の古墳である五色塚古墳（垂水区）が明石海峡を望む摂津との境界に近い播磨国東端に立地しています。西宮市には津門稲荷山古墳がありました。坊ヶ塚古墳もこの時期かもしれません。



図36 生駒(神戸薬大構内)古墳

後期古墳

坊ヶ塚遺跡をはじめとする住吉宮町遺跡群の中心は次の時代に相当します。それまでは中期の古墳から後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳までの資料がありませんでしたが、住吉宮町遺跡群はその間隙を埋める資料です。後期の古墳も、現存する古墳は神戸薬科大学の構内にある生駒（神戸薬科大学構内）古墳1基だけでした。岡本梅林や八幡谷や鴨子ヶ原に古墳があることは知られていますが、現在見られる古墳は唯一生駒古墳だけで、市街地化されていることから新たな発見もないだろうとも考えられていました。しかし、住吉宮町遺跡群の確認によって考え方も大きく変化してきました。今のところ住吉東古墳という盟主墳をはじめ40基余り確認されています。住吉東古墳は、全長24mの帆立貝式古墳で埴輪列を巡らせています。人形や馬形の形象埴輪も出土しています。僅かに6世紀後半の古墳もありますが、大半は6世紀初頭から前半の古墳です。ただ、外観は弥生時代の方形周溝墓に近いものです。普通のイメージの方墳とは異なり

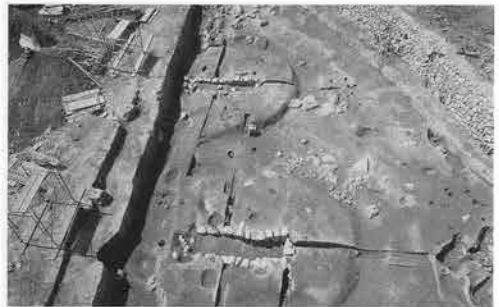


図37 野寄群集墳
(六甲山麓遺跡調査会提供)

ます。非常に密集して築かれている点など、後期の群集墳よりも方形周溝墓群に近い印象を受けます。

後期の群集墳を築造するまでの古墳は、芦屋市から西宮市にかけての岩ヶ平台地や西宮市の上ヶ原台地縁辺部に築かれた古墳です。

駒塚古墳（芦屋市）と王子ヶ丘古墳・具足塚古墳・岡田山古墳・門戸天神裏古墳・上ヶ原車塚古墳（以上西宮市）がこの時期の古墳です。上ヶ原車塚古墳だけが前方後円墳です。現在見学できるのは、具足塚古墳だけです。神戸市内では灘区の十善寺古墳が相当します。



図38 本住吉神社

主に横穴式石室を主体部とする群集墳は、前述した芦屋市・西宮市に顕著です。八十塚古墳群が代表的な古墳群です。今でも林や庭で旧状を残しています。岩ヶ平支群1～3号墳はいつでも見学できます。芦屋神社境内の古墳や生駒古墳は墳丘も良く残っており、元の状況が窺える貴重な資料です。鴨子ヶ原は住宅地になっていますが、以前にはこの時期の古墳が4基以上築かれていました。最近の調査で、住吉川対岸の西岡本で2基の横穴式石室が確認されました（野寄古墳群）。坊ヶ塚遺跡でもこの時期の古墳が2基存在します。

この時期の集落は、住吉宮町遺跡群第9次調査で17棟の竪穴住居跡が確認されています。郡家遺跡でも竪穴住居跡が調査されています。郡家遺跡の竪穴住居跡には竈が付属している住居跡があり、中には竈からの煙道が造られた特殊な形態の住居跡もあります。

奈良時代

奈良時代になっても住吉宮町遺跡群では遺構が検出されています。第11次調査で奈良時代の掘立柱建物とともに、その建物に伴う鎮壇具が出土しています。北西方向に立地している郡家遺跡は、菟原郡衙に推定されている遺跡ですが、明確な遺構は検出されていません。坊ヶ塚遺跡南側付近を山陽道が東西に通っていたはずですが、その関連の遺跡も認められていません。芦屋廃寺が芦屋駅家に推定する意見がある程度です。東灘区・灘区では、廃寺はもちろん古瓦出土地も知られていません。それ以降も文献などでは周辺地域は登場しますが、考古学資料で良好なものはありません。住吉宮町遺跡群や郡家遺跡など発掘調査が実施された遺跡では、平安時代から現代に至るまで連続と遺構は認められているものの、まだまだ不明な点の多い時代です。平安時代になると、遺跡名や町名にもなっている本住吉神社（茨住吉神社）が祀られるようになります。『和名抄』では摂津国菟原郡住吉郷と記されています。今後、新たな成果が得られると、徐々に新しい事実がわかっていくことでしょう。

III. 調査結果

1. 遺構の概観

発掘調査の結果、周囲に溝を巡らした墓（方形周溝墓・古墳）14基と建物跡（竪穴住居跡・掘立柱建物）3棟、溝を持たない墓（石棺墓・土器棺墓・木棺墓・土壙墓）6基と水田跡、性格不明の土壙・ピット（小穴）などを確認しています。人工のものではありませんが、興味あるものとして地震の痕跡があります。

時代順に分けますと、弥生時代末の方形周溝墓、古墳時代初頭の墓と建物、古墳時代後期の墓、そして中世（鎌倉時代）の建物が調査で検出されました。地震の痕跡は、鎌倉時代の遺構（建物・土壙）に地震の痕跡が入っていることから、鎌倉時代以降のものであることがわかります。

遺跡は、大きくは六甲山麓の扇状地に立地しています。細かく見ると、北西から南東方向に延びる高い部分（両端に小さな谷がある）に立地しています。調査区の北東部分にはその谷が調査で明らかになっています。その高まりに弥生時代から古墳時代にかけては墓や住居を築いています。それ以前には谷部も合わせて水田に利用しています。中世になると、谷部は埋まったようで、谷部の上にも住居（SB01）が築かれています。遺構は整然と築かれているようにも見えますが、明確な企画性はありません。重複している箇所も幾つかあります。

また、遺構としては調査していませんが、中世以降の水田や昭和13年の阪神大水害の爪跡や旧住吉駅の一部なども確認しています。弥生時代以降連綿と活用された土地であることが如実に表されていました。

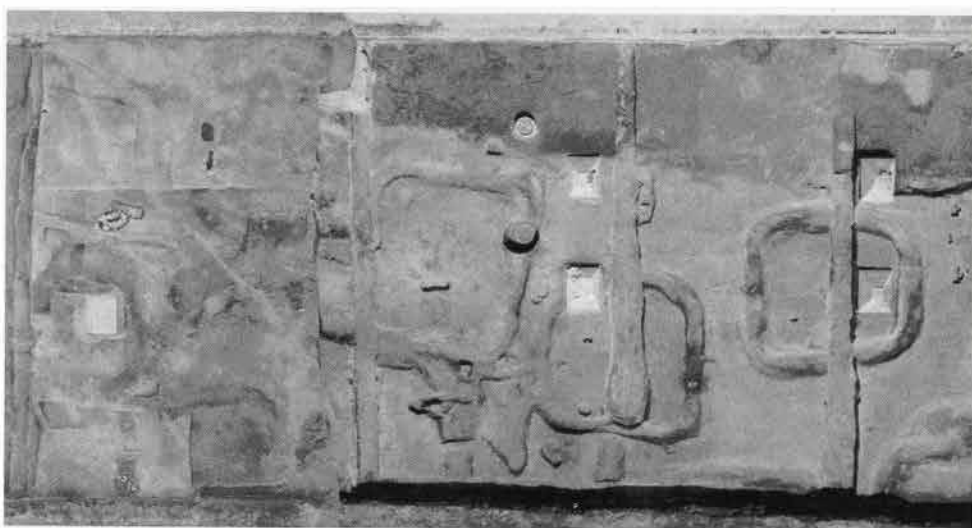


図39 調査区 全景

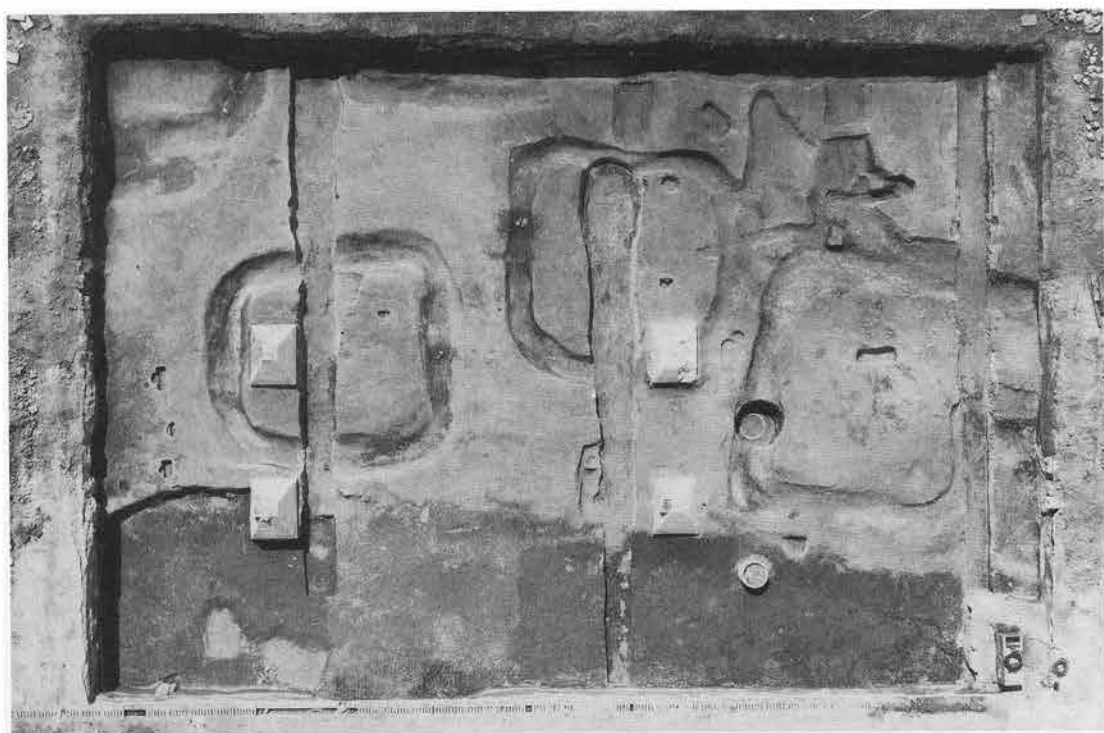


图40 调查区东半全景



图41 调查区西半全景

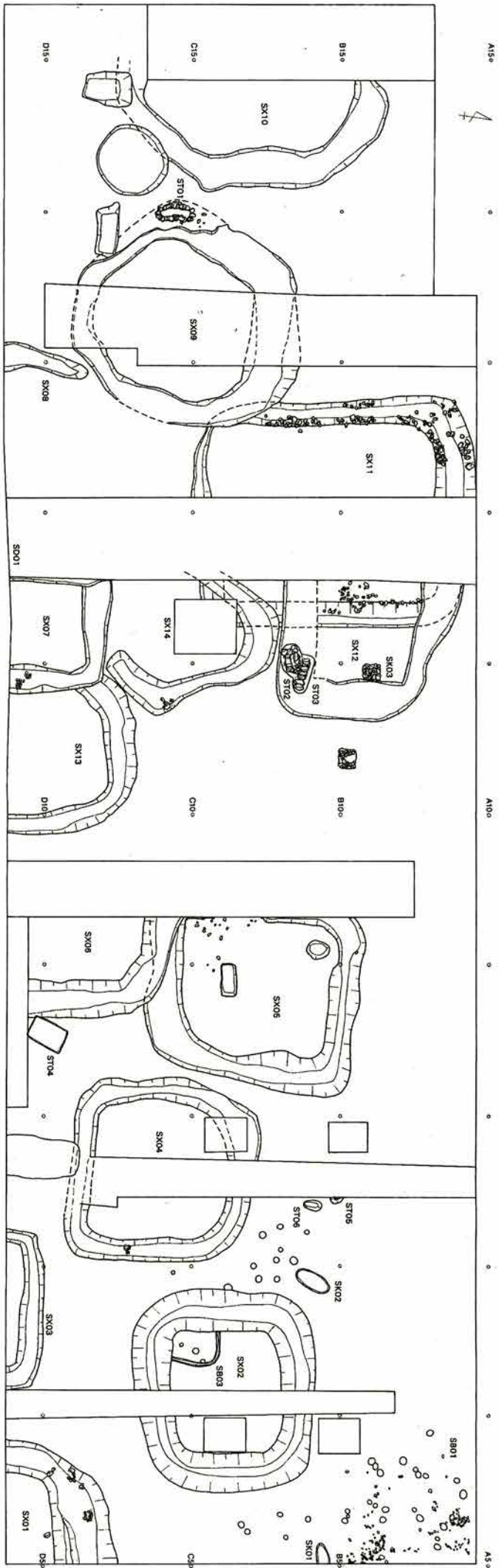


图42 考古学遗址——遗址平面图

2. 周溝墓・古墳

① SX01

位置 調査区の南東隅（C05・D05）に位置しています。溝は東と南へそれぞれ延びていると考えられますが、調査区外のため検出することはできませんでした。SX02の南東、SX03の東にあり、他の遺構との切り合い（重なり合い）はありません。

遺構 検出された遺構は北西部の2辺で、全体の5分の1以下であると考えられます。したがってSX01の規模は明らかではありませんが、正方形か長方形と思われます。検出できた墳丘の規模は、周溝の底から墳丘への変換点を起点として南北方向に4.2m、東西方向に5.5mを測ります。墳丘は後の時代に削平されたらしく、ほとんど平坦な状態になっていましたが、それでも中央部に近い南側では約10cm程度高くなっています。周溝は北西部をコーナーとして東と南に延びています。幅は東側が最も広く3.4m、コーナー部分が最も狭く1.6m、南側は1.8mを測ります。深さは東へ延



図43 SX01 全景

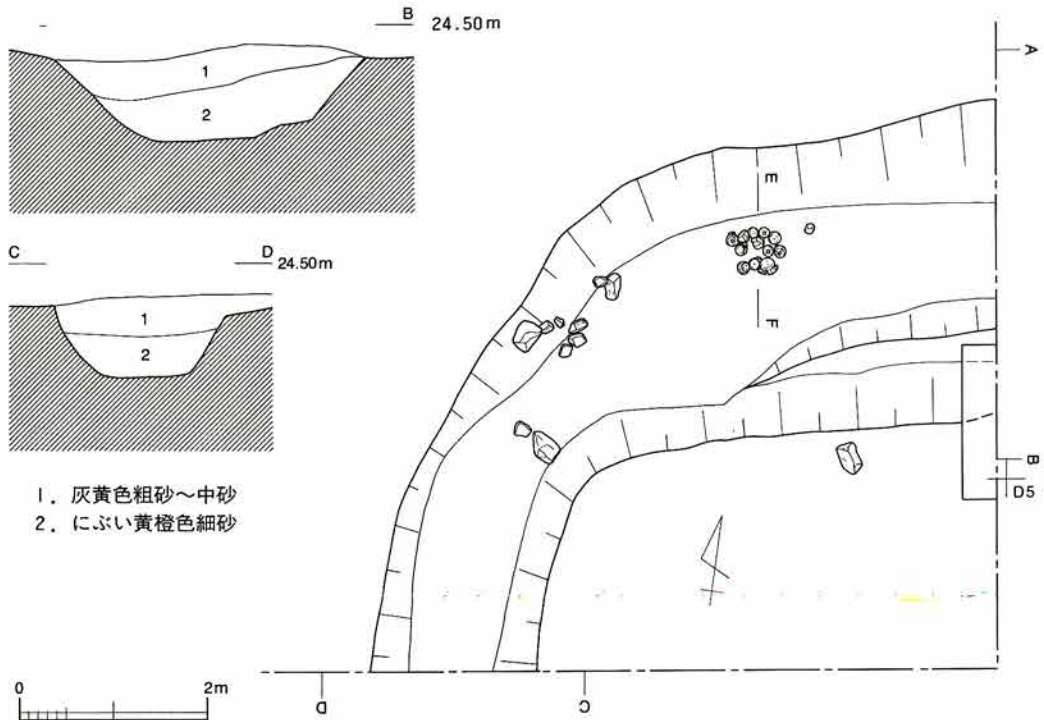


図44 SX01 実測図

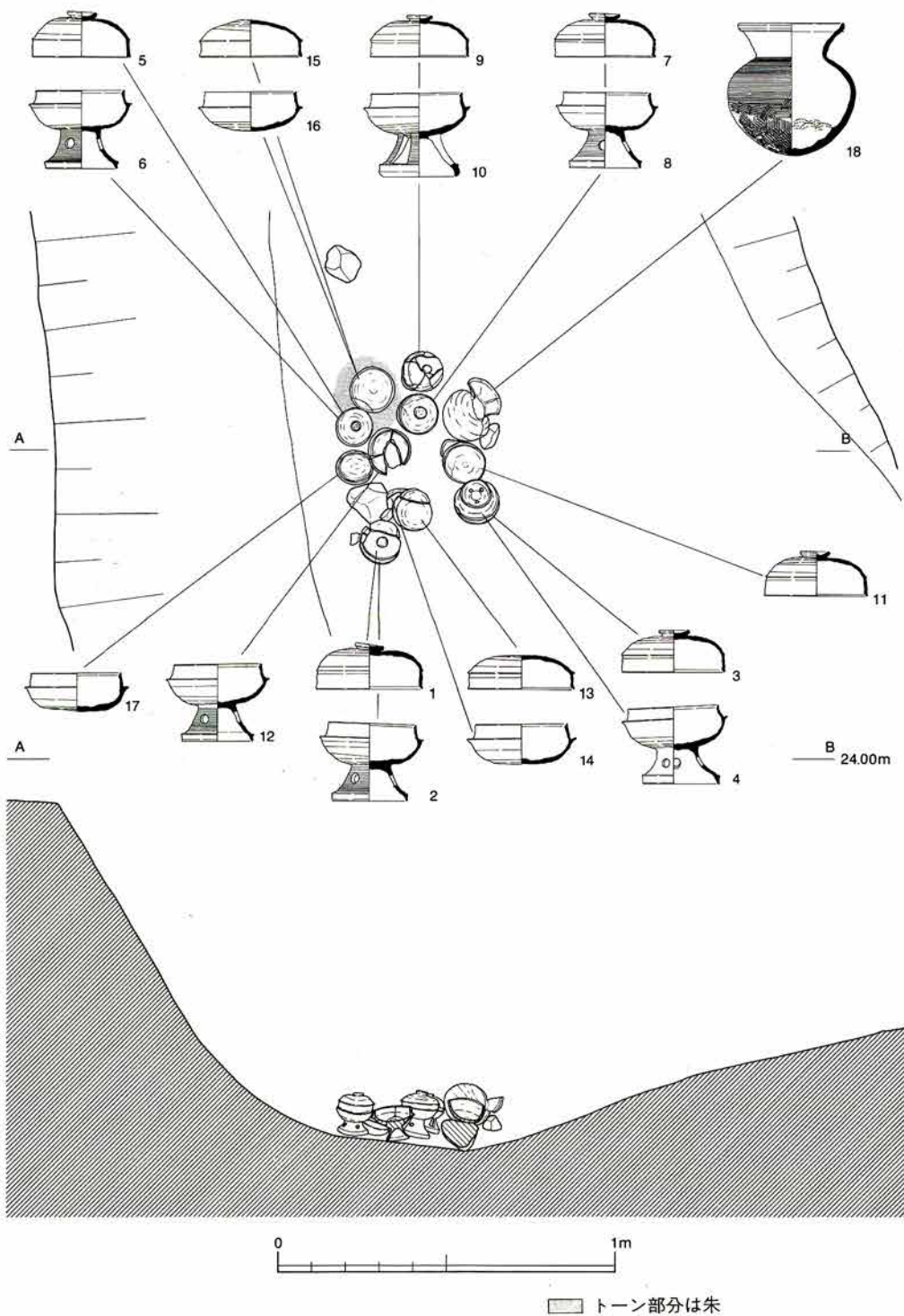


図45 SX01 遺物出土状態

びる北溝が約90cm、南へ延びる西溝が約70cm、コーナー部分が約55cmを測り、溝はコーナー部分で狭く、そして浅くなっています。北溝は墳丘側（南側）に一段やや平坦な面を持った二段掘りになっています。溝内の埋土（埋まった土）は、上層が灰黄色の粗粒砂（粒径1~1/2mm）~中粒砂（粒径1/2~1/4mm）、中層がにぶい黄橙色の細粒砂（粒径1/4~1/8mm）、下層が土壌化した黒褐色の粗粒砂~細粒砂となっています。埋土の大部分は洪水で流れてきた上層と中層で占められ、それが土壌層を覆っているという状況です。このことは、古墳が築造されてから一定期間そのままの状態におかれ、土壌層が形成された後に洪水によって一気に埋没していったことを示しています。



図46 SX01 遺物出土状態



図47 SX01 遺物出土状態

主体部は、古墳の全体を調査していないためか検出することはできませんでした。おそらくJR神戸線の下にあるものと思われますが、墳丘が削平されていることや他の古墳からも主体部が見つからないことを考えあわせると、この古墳の主体部も削り取られていることも考えられます。

先に述べたように墳丘の規模は明らかではありませんが、他の古墳からみて10m内外に収まるものと思われます。

遺物

北溝で、北西コーナーから東へ約3m、溝の真ん中よりやや北側の位置に須恵器が一括して出土しました。意図的に集めて並べてあったようで、有蓋高杯、蓋杯のほとんどが身と蓋がセットになって、立った状態で出土しています。また、土器群の北東部では僅かですが朱の痕跡が認められました。土器の器種と個数は広口壺が1、有蓋高杯のセットが5、有蓋高杯の杯部が1、有蓋高杯の蓋が1、蓋杯のセットが1、蓋杯の杯身の合計18個の土器が出土しています。広口壺は石で蓋をされていました。石は地元で採取される黒雲母花崗岩（俗に言う御影石）が使われていました。

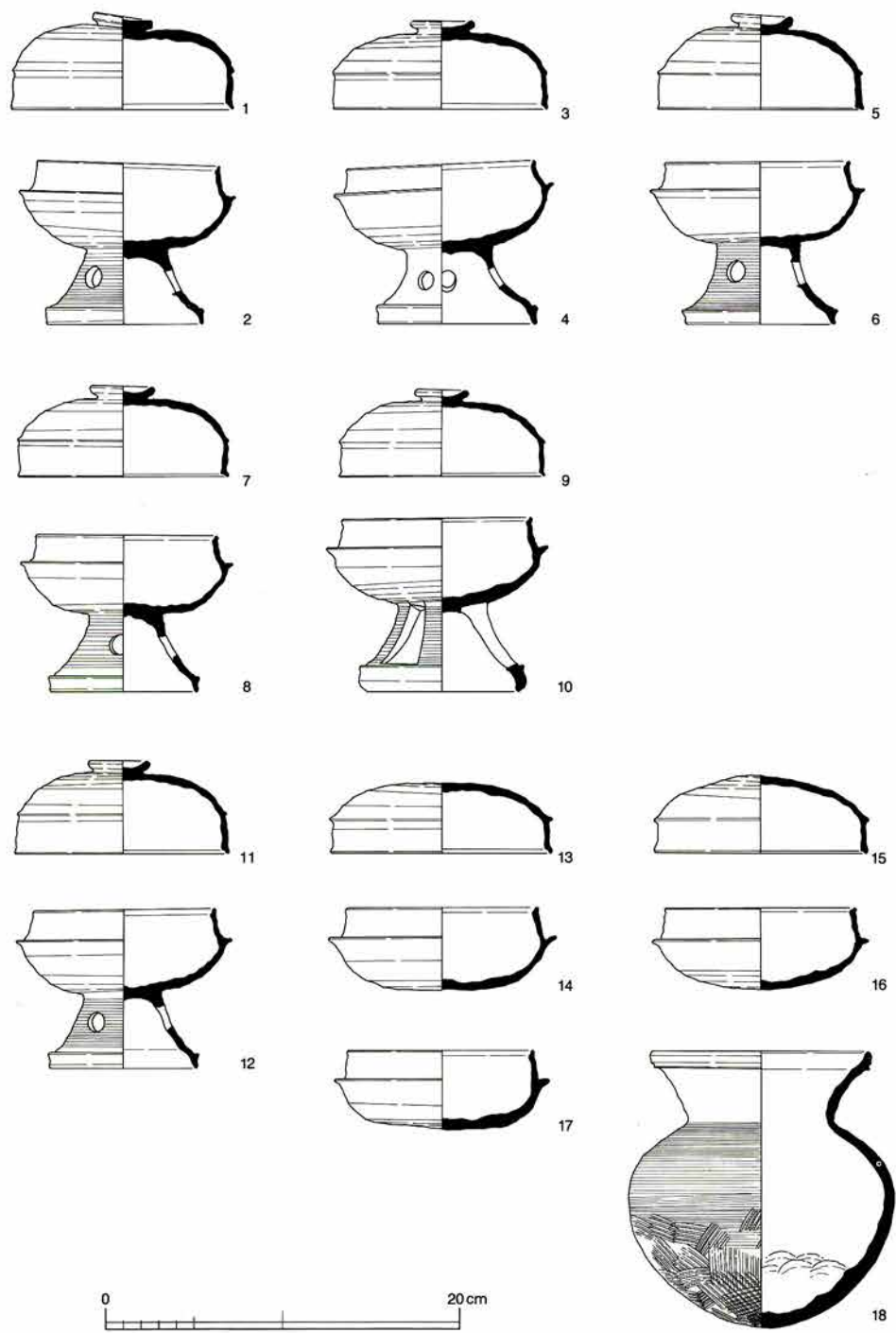


图48 SX01 出土土器 实测图



图49 SX01 出土土器(1)



图51 SX01 出土土器(2)



图52 SX01 出土土器(3)



13·14



17



15



18



16



15·16

图53 SX01 出土土器(4)

表2 SX01 出土遺物観察表

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯 蓋	12.4	5.45	—	天井部中央につまみが付く、つまみは扁平。天井部と口縁部をわける稜は短い。	天井部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり。
2	有蓋高杯	10.2	9.2	8.7	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平につまみ出されている。短く大きく広がる脚部が付き、中ほどに円形の透しを三方にあける。脚部端部は下方に拡張。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部の外面はカキメ調整を施す。穿孔部の内面は粘土のはみ出しが付着。	(1)の蓋とセット関係。
3	杯 蓋	12.1	4.9	—	扁平なつまみが付く。天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面はロクロケズリ。他はロクロナデ調整。	外面灰かぶり(重ね焼痕)。
4	有蓋高杯	10.5	9.2	8.9	たちあがりは内傾する。受部はやや上方につまみ出される。短い脚部が付き、中ほどに円形透しを三方にあける。脚部端部は上下に拡張。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	(3)の蓋とセット関係。
5	杯 蓋	11.5	5.3	—	天井部中央につまみが付く。つまみは扁平で中央はやや凹む。天井部と口縁部をわける稜は短い。	天井部外面約1/2はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり。
6	有蓋高杯	10.3	9.15	8.25	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短く広がる脚部をもち、その中ほどに円形透しを三方にあける。	杯部の底部外面はロクロケズリ、他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部外面はカキメを施す。穿孔部の内面には粘土のはみ出しが付着。	(5)の蓋とセット関係。
7	杯 蓋	11.8	5.1	—	天井部中央に扁平なつまみが付く、天井部はやや丸味を帯びる。脚部は内傾気味。	天井部外面ロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
8	有蓋高杯	10.1	8.8	8.1	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短く広がる脚部が付き、中ほどに円形透しを三方にあける。脚部端部は下方に拡張。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部外面にカキメを施す。	(7)の蓋とセット関係。外面灰かぶり(焼成時は(9)の蓋とセット関係)。円形透しを作った際に出たと思われる粘土片も共に出土。
9	杯 蓋	11.5	4.9	—	天井部中央に扁平なつまみが付く、天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面ロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり。
10	有蓋高杯	10.6	9.8	8.5	たちあがりはやや内傾する。受部は上方へつまみ出される。短く太い脚部をもつ。脚部端面に稜をもつ。脚部部に長方形の透しを三方にあける。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部外面はカキメを施す。	(9)の蓋とセット関係。
11	杯 蓋	11.9	5.2	—	天井部中央に扁平なつまみが付く。天井部と口縁部をわける稜は短い。	天井部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
12	有蓋高杯	10.2	8.95	8.2	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平につまみ出される。短い脚部が付き、中ほどに円形透しを三方にあげる。脚部端部は上下に拡張。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部の外面はカキメを施す。	焼成時のセット関係は(5)の蓋。(受部に蓋の口縁端部の一部が癒着)。
13	杯 蓋	12.3	3.95	—	やや扁平な器体でつまみをもたない。天井部と口縁部をわける稜は短く鋭い。	天井部外面 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり。
14	杯 身	10.7	4.6	—	たちあがりはやや内傾する。受部はやや上方につまみ出される。底部は扁平気味。	底部外面約 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	(13)の蓋とセット関係。受部に灰かぶり。
15	杯 蓋	11.8	4.35	—	天井部に丸味をもつ。天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面約 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。内面天井部に一方方向の仕上げナデを施す。	
16	杯 身	10.6	4.6	—	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのびる。底部は丸味をもつ。	底部外面約 $\frac{1}{2}$ ロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	(15)の蓋とセット関係。底部外面灰かぶり。
17	杯 身	10.4	4.4	—	たちあがりはほぼ垂直にたつ。受部は水平にのびる。底部は扁平。	底部外面約 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ。他はロクロナデ調整。	
18	壺	12.1	15.4	—	口頸部は比較的短く、大きく外反する。体部の最大径は $\frac{1}{2}$ 以上にある。口縁部下端に凹線を巡らす。	体部外面はカキメ調整を施し、その下半以下に平行叩きを施す。内面には、外面の叩きに伴うあて具痕がのこる。	



図53 S X 0 1 出土遺物

②SX02

位置

調査区の東端に近いところに位置しています。北側周溝から1.8m北に谷部への落ち込みの肩があります。坊ヶ塚遺跡では、北には古墳が存在しないことになります。谷は西北西50~60mでなくなり、その谷を隔てた北側に前方後円墳である坊

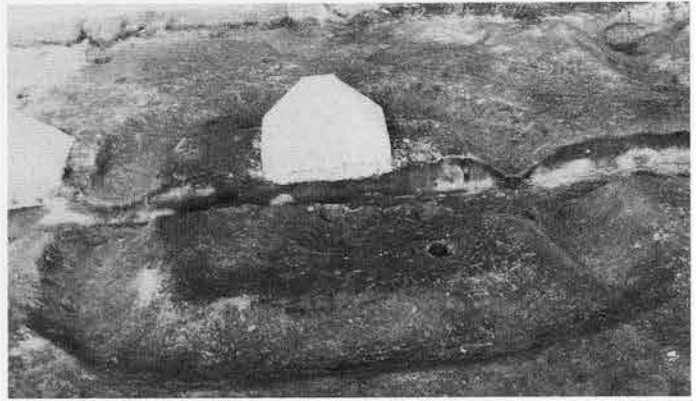


図54 SX02

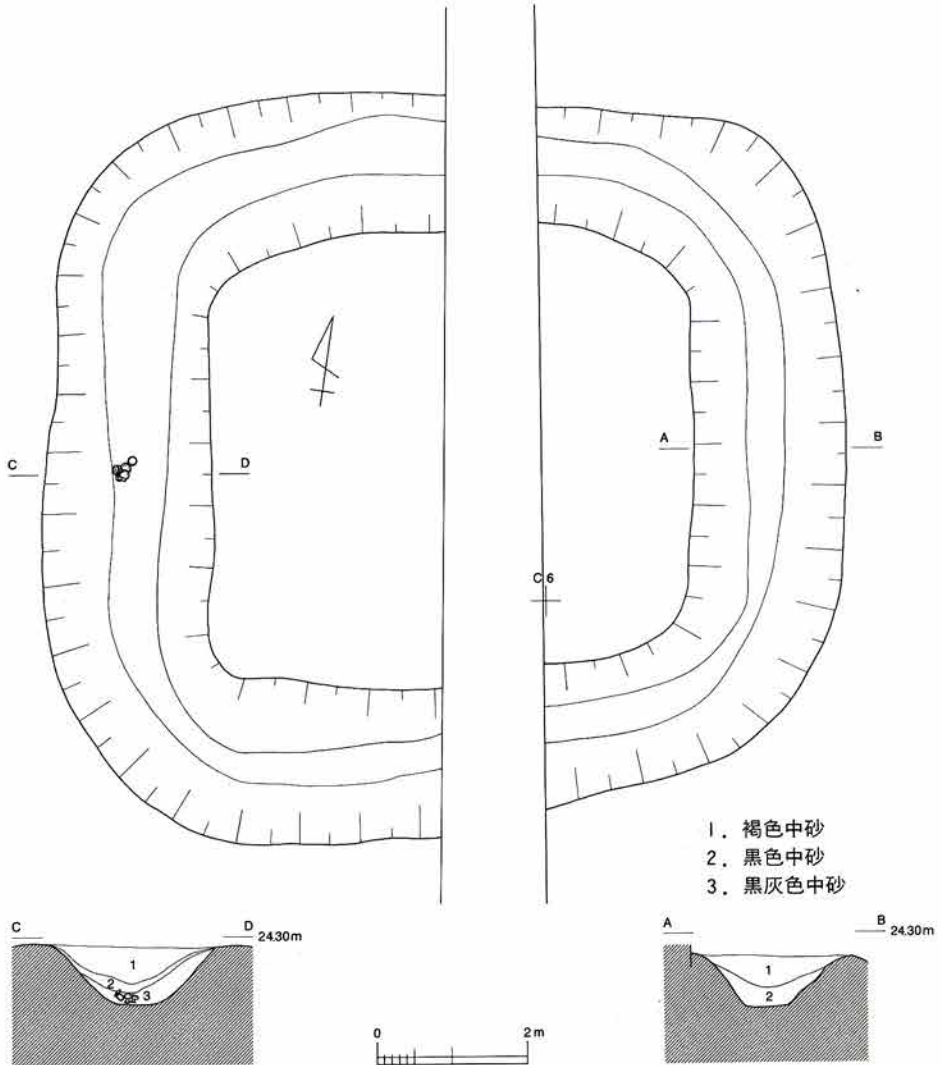


図55 SX02 実測図

ケ塚古墳が存在していることとなります。南東にSX01が南にSX03が位置しています。ともに約6.5m離れています。西側には1.6m離れて弥生時代の方形周溝墓であるSX04が主軸を同じくして位置しています。

遺構

他の古墳と同様、埋葬施設は確認出来ませんでした。後世の削平によって残存していないものと思われる。遺構としては周溝を調査しており、外部施設は認められませんでした。墳丘上に旧駅舎のコンクリート基礎があり、一部周溝の肩を損傷しています。また、確認調査のトレンチによ

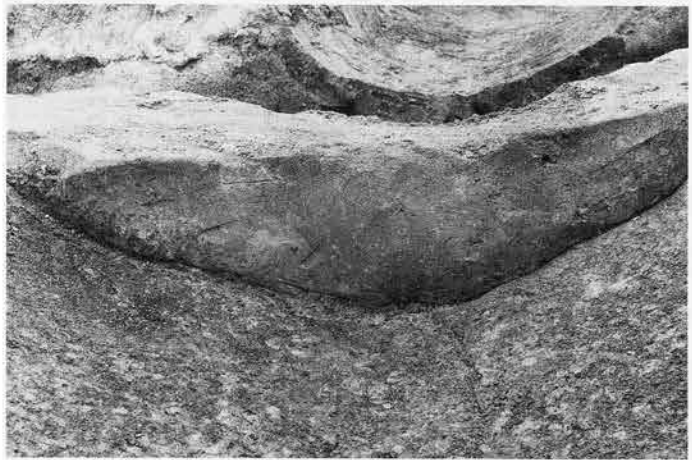


図56 SX02 溝 堆積状況

て墳丘を縦断していますが、全体像を想像することは可能です。周溝の幅は一定ではなく、西側が最も広く2.2mを、北側が最も狭く1.5mを、他はだいたい2m前後を測ります。溝の断面は逆台形をしています。底の平坦部の幅は0.5~0.75mを測ります。深さは、西側で0.8m、北側で0.65mあります。断面の形状は墳丘側が急で、外側が緩やかになっています。平面プランは隅円の方形です。東西は10.6m、南北は10.2mで、方形の直線部分は各辺とも8m前後です。周溝内の規模は、西辺4.8m、北辺6.0m、東辺4.6m、南辺5.8mを測ります。周溝を確認した段階では僅かに周溝内側の方が高い数値が得られました。周溝内南西部の下層から竪穴住居跡(SB03)などの遺構が確認されていることから後世の削平を受けていないことは確実です。埋葬施設は遺構調査時の面より上層に存在していたことが想定されます。

遺物出土 状態

西側周溝のほぼ中央から一括して遺物が出土しています。須恵器などが集中して出土しており、意図的に置いたものと思われる。7点の土器と4点の鉄器が出土しています。溝の底に接して鉄製のヤス4点が出土しています。溝の底の平坦部の中央に先を北東方向へ向けています。2本ずつ錆びて固着していました。高さはやや上の高さで北側から土器

の一群が置かれていました。須恵器5点・土師器1点・製塩土器1点の7点です。まず、須恵器高杯（4）を鉄器切先に接するように置き、その上に杯蓋（1）を逆にして高杯の上に重ねています。高杯に接するように溝の軸方向よりやや東へ振って2点の有蓋高杯（2・5）を並べています。ただし、蓋はしていませんでした。南側の2点の高杯に接して土師器壺（6）が置かれ、その上に製塩土器（7）を中に入れた杯蓋（3）が出土しています。杯蓋はもう1点の杯蓋同様につまみを下にした逆位置で土師器の上に置かれていました。

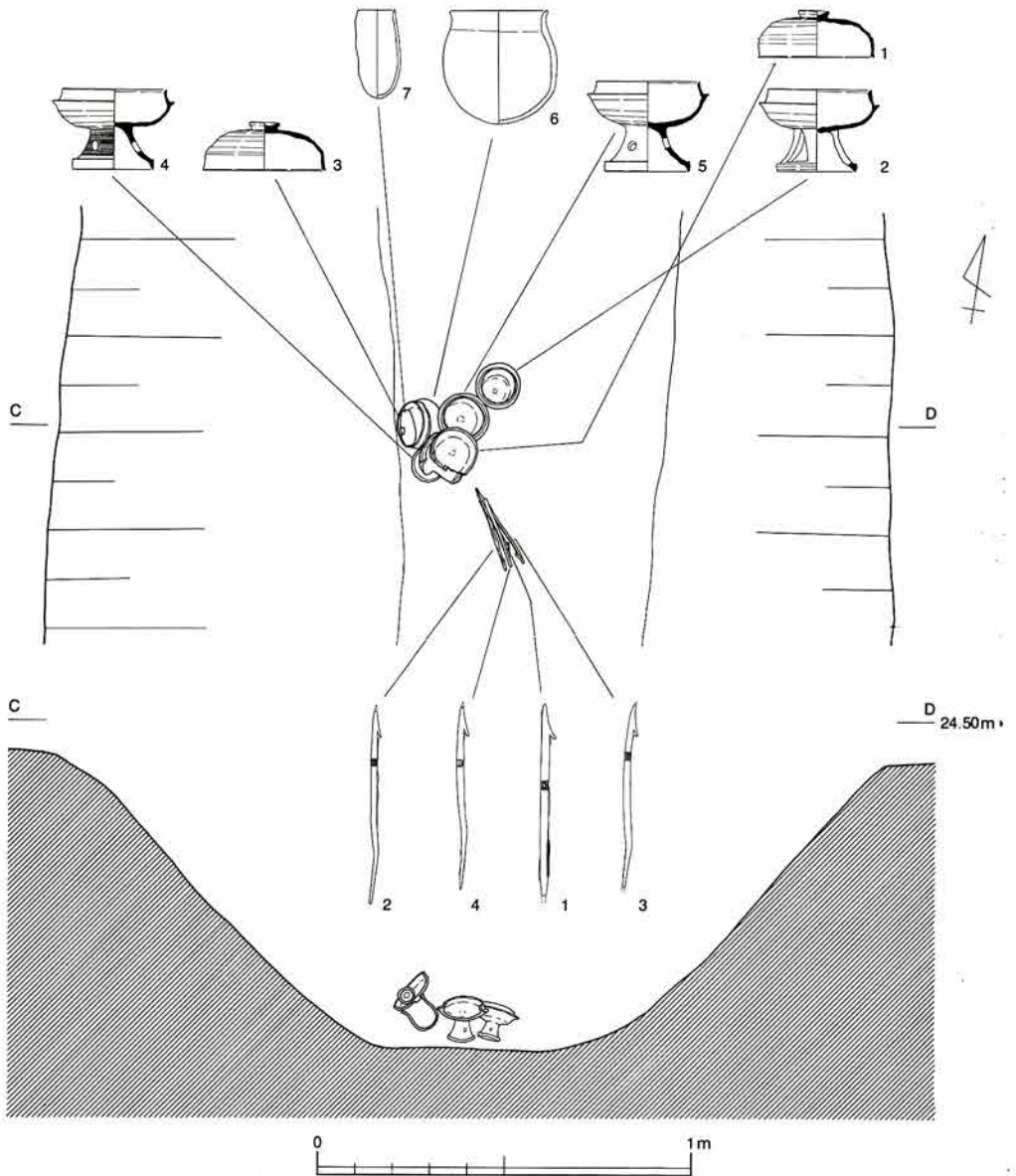


図57 SX 02 遺物出土状態



図58 SX 0 2 遺物出土状態

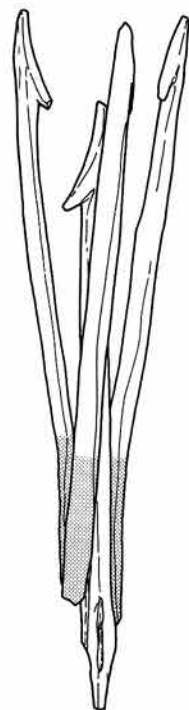


図59 ヤス復原図

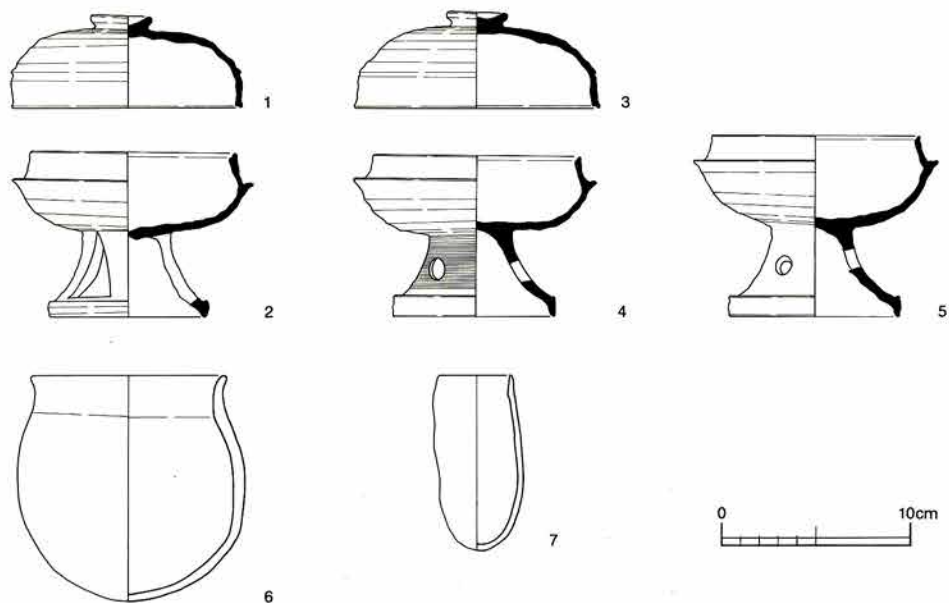


図60 SX 0 2 出土土器実測図

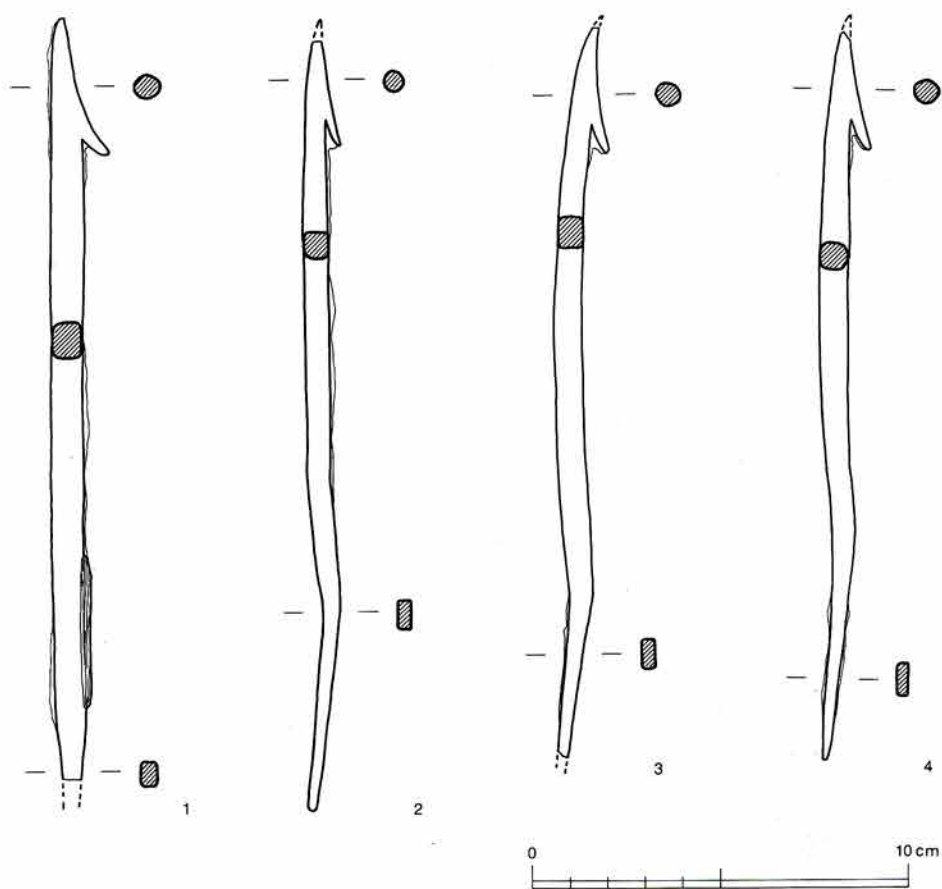


图61 SX02 铁器 实测图



图62 SX02 全景

遺物 出土遺物は、須恵器・土師器・製塩土器・鉄器が出土しています。須恵器は杯蓋（有蓋高杯の蓋）2点と有蓋高杯3点が出土しています。

表3 SX02 出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)			形態の特徴	技法	備考
		口径	器高	底径			
1	杯蓋	12.1	4.9	—	天井部中央に扁平のつまみが付く。天井部と口縁部をわける稜はあまい。口縁部はやや内彎する。	天井部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり(重ね焼痕)。
2	有蓋高杯	10.7	8.8	8.15	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短く太い脚部をもつ。脚体部には三角形の透しを三方にあげる。脚裾部端面に稜をなす。	杯部外面下半にロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
3	杯蓋	12.9	5.1	—	天井部中央に扁平のつまみが付く。天井部と口縁部にわける稜は短い。	天井部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり(重ね焼痕)。
4	有蓋高杯	10.9	8.5	8.4	やや扁平な杯部をもつ。たちあがりは内傾する。短い脚部をもち、その中ほどに円形透しを三方にあげる。脚端部は下方に拡張。	杯部底部外面ロクロケズリ。他は内・外面ともにロクロナデ調整。脚部外面にカキメを施す。	
5	有蓋高杯	10.9	9.5	8.9	たちあがりは内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短く広がる脚部をもち、その中ほどに円形透しを三方にあげる。脚端部は上下に拡張。	杯部底部外面ロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面灰かぶり。
6	小形壺	10.0	11.9	—	球形の体部に、わずかに折り曲げた短い口縁部が付く。	ユビ成形で体部を作り、口縁部のみヨコナデで仕上げる。	
7	製塩土器	4.0	9.2	—	いびつな外形で細長く筒状になる。口縁端部は細く尖りぎみになる。	全体にユビ成形を行い、ユビ調整を加える。口縁部のみナデに近い粗雑なヨコナデ調整を行う。	



図63 SX02 出土遺物



图64 SX02 出土遺物

③SX03

位置 調査区の南端(D06・D07)に位置しており、SX01の西、SX02の南、SX04の南東にあってこれらの遺構との切り合いがないことから、周囲の古墳や方形周溝墓を意識して築造されたものと思われます。

遺構 調査では墳丘の一部と北溝、そして東溝と西溝の一部を検出することができました。東溝と西溝を検出したため、墳丘の東西辺の規模は確認することができました。長さは溝の変換点を起点として約7.1mを測ります。墳丘面は南側へ溝の肩（高くなった所）から、最大でも80cm程度しか検出できませんでした。SX01の場合と同じように、後の時代の削平を受けているようです。周溝は、北溝が長さ8.4m、幅0.9~1.3m、深



図65 SX03 土層堆積状況



図66 SX03 全景

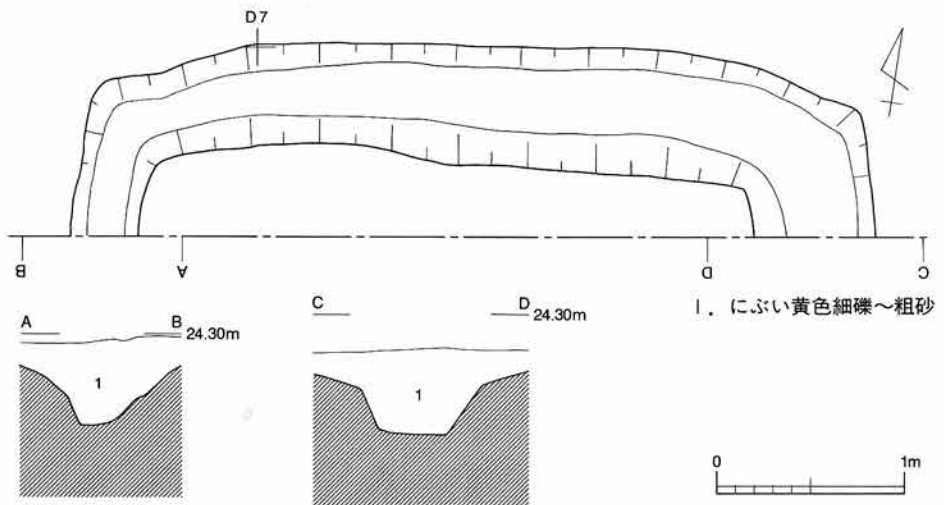


図67 SX03 実測図

さ1.1~0.7mで東へいくにしたがって深くなっています。東溝は幅1.3m、深さ1mを測り、長さは北溝と共通の部分を含めて1.8m検出しました。西溝は幅0.7m、深さ0.7m、検出した長さは1.6mとなっています。埋土は、大部分が細礫（粒径4~2mm）～粗粒砂のにぶい黄色土で占められ、溝の底には土壌化した黒褐色の粗粒砂～細粒砂が堆積しています。堆積の状況から、これらも一気に埋没していったようです。

主体部は、墳丘の大部分が調査区外のため検出することはできませんでした。

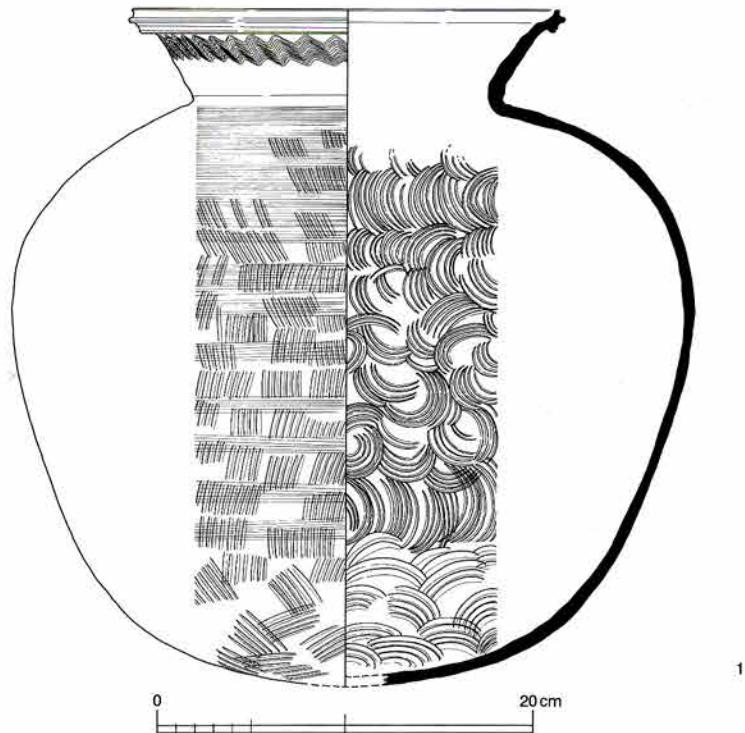


図68 SX03 出土土器実測図

表4 SX03 出土遺物観察表

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	甕	22.5	(35.5)	—	やや短めの頸部は斜め上方に立ち上がる。口縁部は上方につまみ上げられ、肥厚気味の端面上部はほぼ水平につまみ出されている。体部はやや扁平気味。	頸部外面はヨコナデのち14条の波状文を施す。体部外面は平行叩きのちカキメ調整、内面は同心円叩きであるが、底部のみ異なるあて具を使用したとみられる。	口頸部から肩部にかけて自然釉がかかる。

遺 物 北溝の中央やや西から須恵器片がまとまって出土しました。これらは1個体の甕に復原されます。



図69 SX03 出土土器

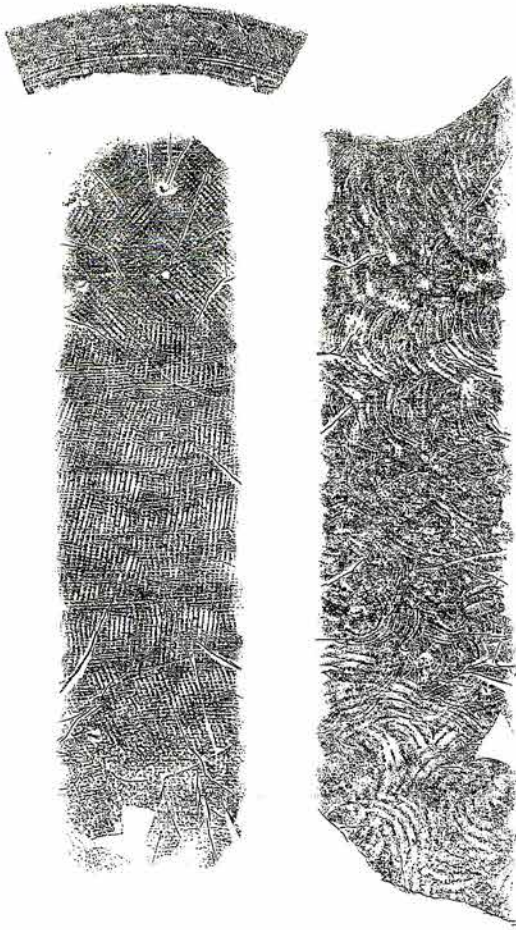


図70 SX03 出土土器 拓本

④SX04

位置 調査区東側の中央に位置しています。東側のSX02、南東側のSX03と時期は異なるものの整然と構築されています。西側には同時期の墓と考えられるSX05が主軸を同じくして位置しています。北側は約8m離れて谷地形となっていることから、北には墓は存在しません。

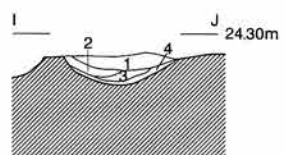
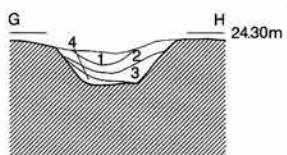
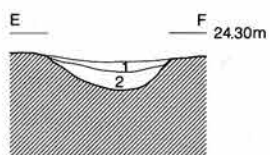
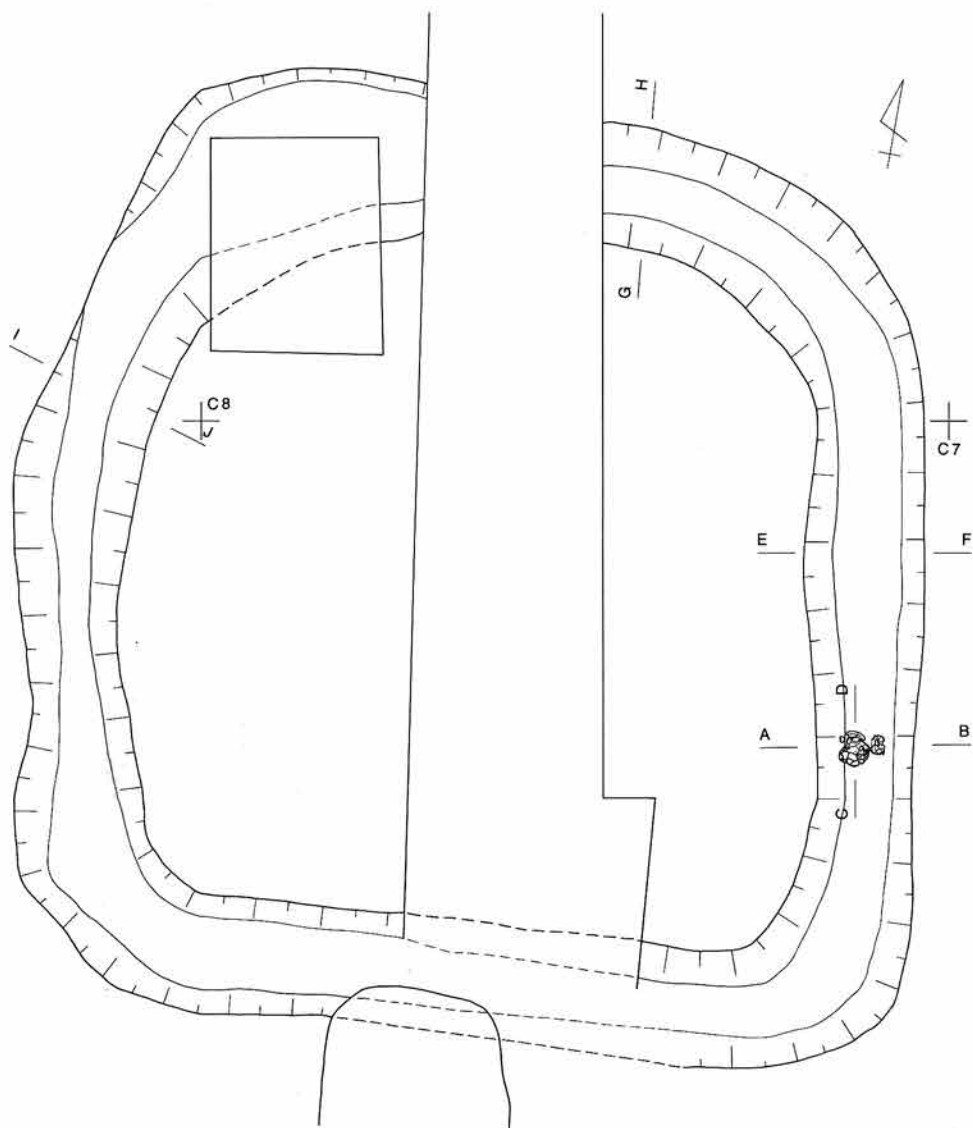
遺構 平面規模は、現状では僅かに北辺が短い台形となっています。他の墓と同じく溝によって墓の規模を定めています。北辺は7.9m、東辺は8.6m、



図71 SX04 土層堆積状況



図72 SX04



1. 浅黄中砂~粗砂
2. 黄灰中砂~粗砂
3. 黄灰中礫
4. 黑褐中砂



图73 SX04 实测图

南辺は9.4m、西辺は9.0mで、溝の幅は狭いところで1.0m、広いところで1.6mを測ります。南側2つのコーナーは隅円ながら角ばっていますが、北側のコーナーは方形が崩れて弧状になっています。そのために平面プランがより台形に見えます。溝の内側の平坦面の大きさは東西辺・南北辺ともに約7.2mを測ります。溝の深さは0.2~0.45mで平均0.2mの深さです。溝の埋土は、黒色ないしは黒色に近い土壌化している砂層です。大きくは上下2層に分けられます。下層は数層に分かれ、部分によって堆積状態が異なっています。上層埋土には弥生土器片が認められます。

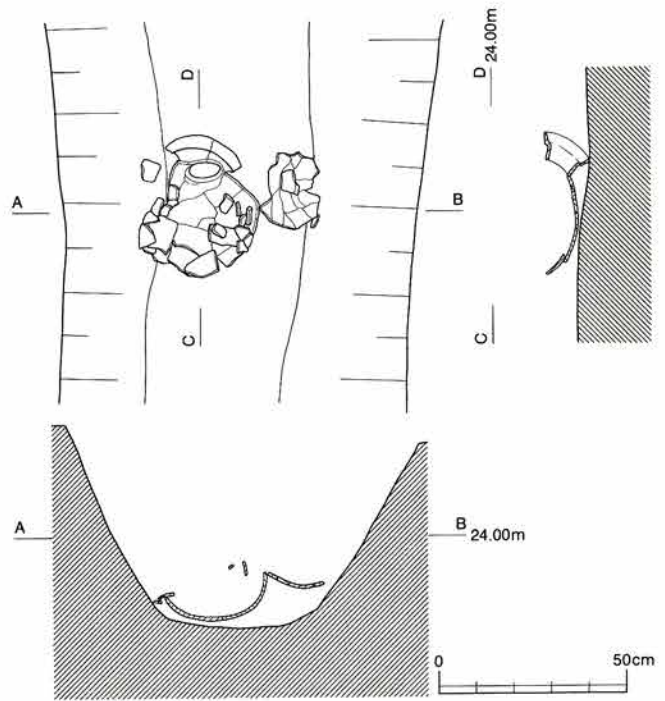
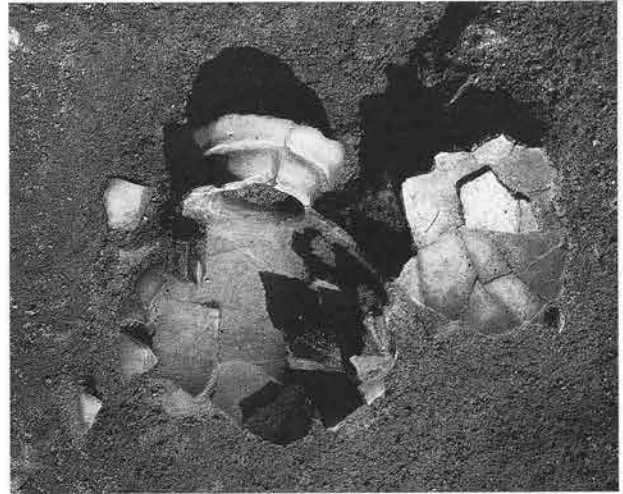


図74 SX04 遺物出土状態

遺物出土状態 溝埋土にも土器は見られます〔(1)~(3)〕が、築造後に混入したものと思われます。原位置を保っているのは、東側溝の1個体の弥生土器だけです。東側溝のほぼ中央から出土しています。壺で口縁部を北側に向けて横位置で出土しています。土器は、



ほぼ溝の主軸方向と一致して置かれています。底面に接しておらず、僅かに上に位置しています。ただ、溝の下の土が有機質によって変化した可能性もあります。土器は溝の底中央よりやや内側から出土していますが、当初から置いたものか、上から落ち込んだものかは明らかではありません。偶然かもしれませんが、主軸方向と土器の方向が同じであるこ



図75 SX04 遺物出土状態

とから故意に置いたものと考えています。他の土器は、溝埋土と遺構面上部の堆積土から出土しています。小片が多く図化可能な土器は僅かです。

遺物

図化したものは6点ですが、他に同じ時期と思われる土器片が出土しています。甕・高杯の破片が見られますが、大半は壺の破片です。(1)は、底部を欠いていますが、全体像を想像出来ます。二重口縁の壺で、球形の胴部を持っています。底部は残っていませんが、胴部が球形であることから僅かに小さな平底が残るか、丸底であろうと考えられます。口縁部は二重口

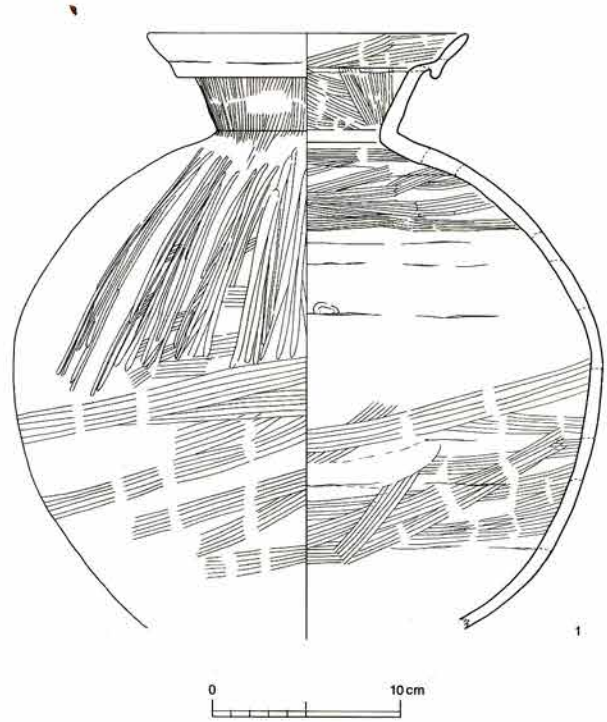


図76 SX04 出土土器実測図(1)

縁ですが、短く丁寧なものとは言えません。口縁部はハケ整形ののち、上部のみヨコナデを施していますが丁寧ではなく、特に内面はハケメがほとんど残っています。口縁部下半はハケ整形のままですが、外面は部分的に消しています。胴部外面は、粗いハケ整形をし

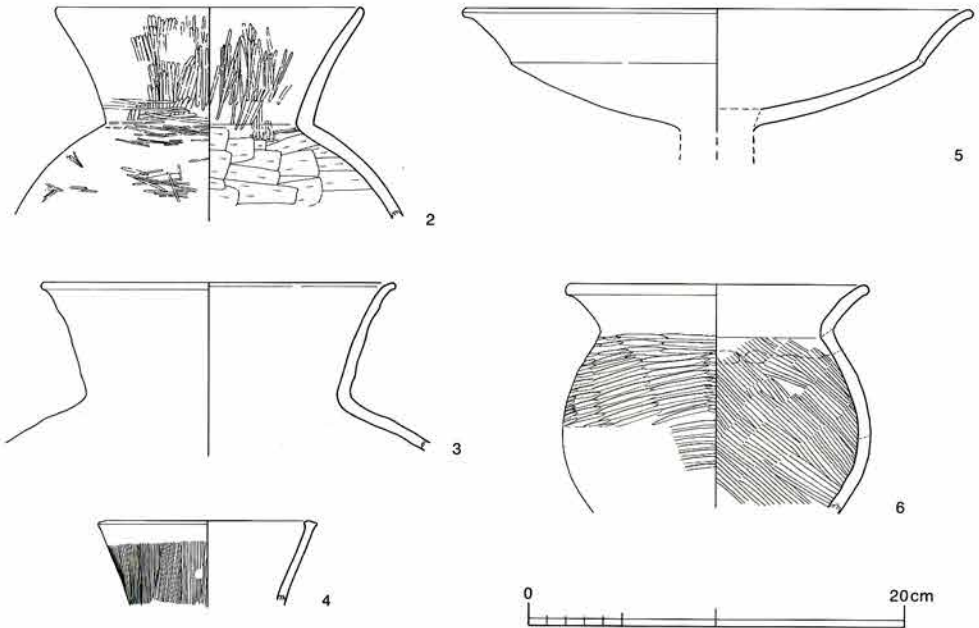


図77 SX04 出土土器実測図(2)

てから上半はヘラミガキで仕上げています。下半はナデで部分的に調整を加えています。胴部内面は、ハケ整形ののちナデ仕上げを行っているが、粘土紐の痕跡が見られます。胴部に使われているハケと口縁部に使われているハケの原体は異なっています。共に粗いハケですが、口縁部に使われている方が多少細かいものです。(2)(3)は共に壺の口頸部です。球形の胴部に付く広口の壺になろうかと思われます。(1)~(3)の3点は溝から出土しています。他の3点は堆積土から出土しています。(4)も壺の口縁部です。口径11.6cmとやや小さなもので、ハケ整形ののち端部に限ってヨコナデを行っています。(5)は高杯の杯部です。筒部との接合部で割れており、円板充填法が使用されていることが判ります。内外面とも細かくヘラミガキで仕上げられているが表面磨滅のため凶化していません。(6)は甕で、外面は平行タキで成形されたままで、内面は斜め方向のハケ整形で、口縁部のみヨコナデで調整しています。胴部内面には口縁部を成形する際の指圧痕が見られます。器壁は厚く、口径と最大腹径が同じタイプの甕で、突出平底が付くものと思われます。



図78 SX04 出土土器

⑤SX05

位置

調査区のほぼ中央に位置しています。南側に時期の新しいSX06が存在し、南溝を切っています。南東側には同時期の墓と考えられるSX04が主軸を同じくして位置しています。北側はすぐ谷地形となっており、北側溝の肩から谷地形の落ち込む肩部までは0.8mしか離れていません。地形はほぼ平坦ですが、僅かに西側が高くなっています。

遺構

西側は後世の遺構などによって削平されていますので、残っていません。また、南側はSX06の北側の溝によって切られています。復原すると北側を短辺とする台形になろうかと思われます。ただ、西辺が残っていないことから断定は出来ません。東側のコーナーはどちらも直角に近い形状を示しています。主軸はN4°Eと僅かに東に振っています。北辺は9.2m、東辺は10.5mを測ります。南辺の残存長は6.8m測ります。

遺物出土
状態

図化出来る土器は2点しか出土していませんが、弥生土器と思われる小片は多数出土しています。埋土がSX04と同じ黒色土であることから同時期と思われるます。

図化した土器は、2点とも底部です。上は甕の底部で外面でタタキで成形しています。底部は再成形で、内面はナデで調整しています。下は壺の底部で、外面はタタキ成形ののちハケで整形しています。内面はユビ成形ののちナデで仕上げています。

図81 SX05 出土土器

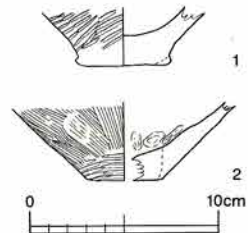


図79 SX05

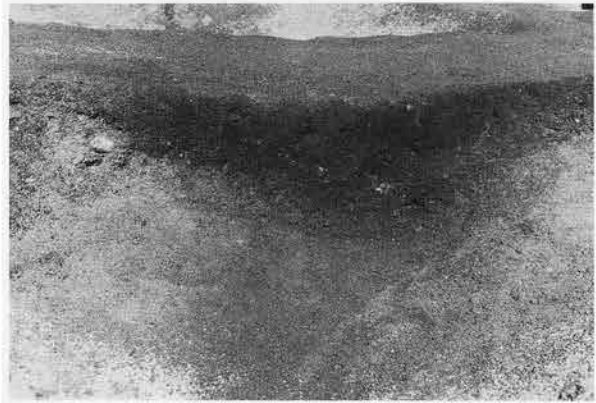
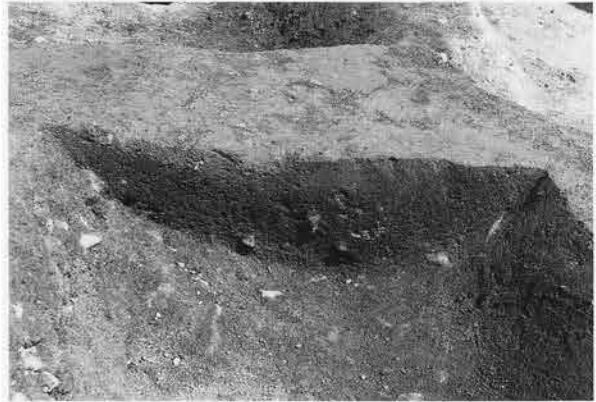


図80 SX05 土層堆積状況

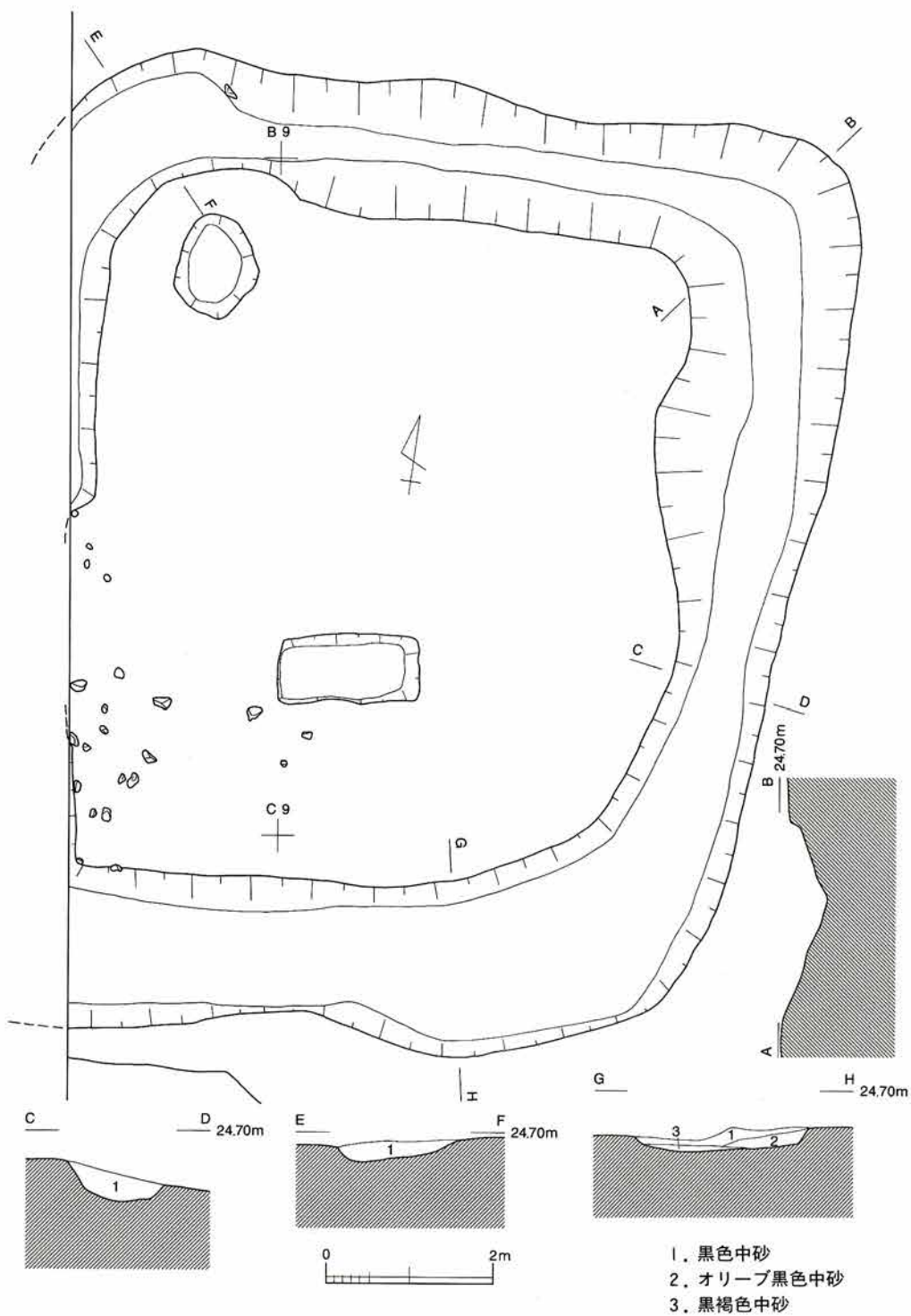


図82 SX05 実測図

⑥SX06

位置 調査区のほぼ中央の南側（C08・D08・C09・D09）に位置しています。SX04の南西、SX05の南、SX13の東にあって北溝の一部がSX05を切っています。全体の約2/3程度を検出し、残りは調査区外南側へ延びています。

遺構 調査では、北溝と東溝を検出することができました。形は方形であると思われます。検出された墳丘は周溝の変換点から東西8m南北9.2mとなっています。西溝は検出されませんでした。西側にあるSX13の東溝に切られていると思われます。溝の規模は東溝が幅約2.2m、深さ約0.7m、北溝が幅約2.3m、深さ約0.5mとなっています。埋土は大きく2層に分かれ、上層にシルト質極細砂のにぶい黄橙色土、下層に細礫～粗砂の灰黄褐色土が堆積していました。この遺構は西へ行くにしたがって徐々に高くなっています。その高い部分が攪乱をうけているため、西側は非常に残りが悪い状況になっています。北溝の西側が検出できなかったのもそのためと考えられます。主体部は検出されませんでした。

時期 出土遺物はありません。しかし、弥生時代末の遺構であるSX05の周溝を切られていることや、埋土の状況—大まかに2層に分かれ、大部分が上層の黄色系の洪水砂が占める—をみると古墳時代のものであると考えています。

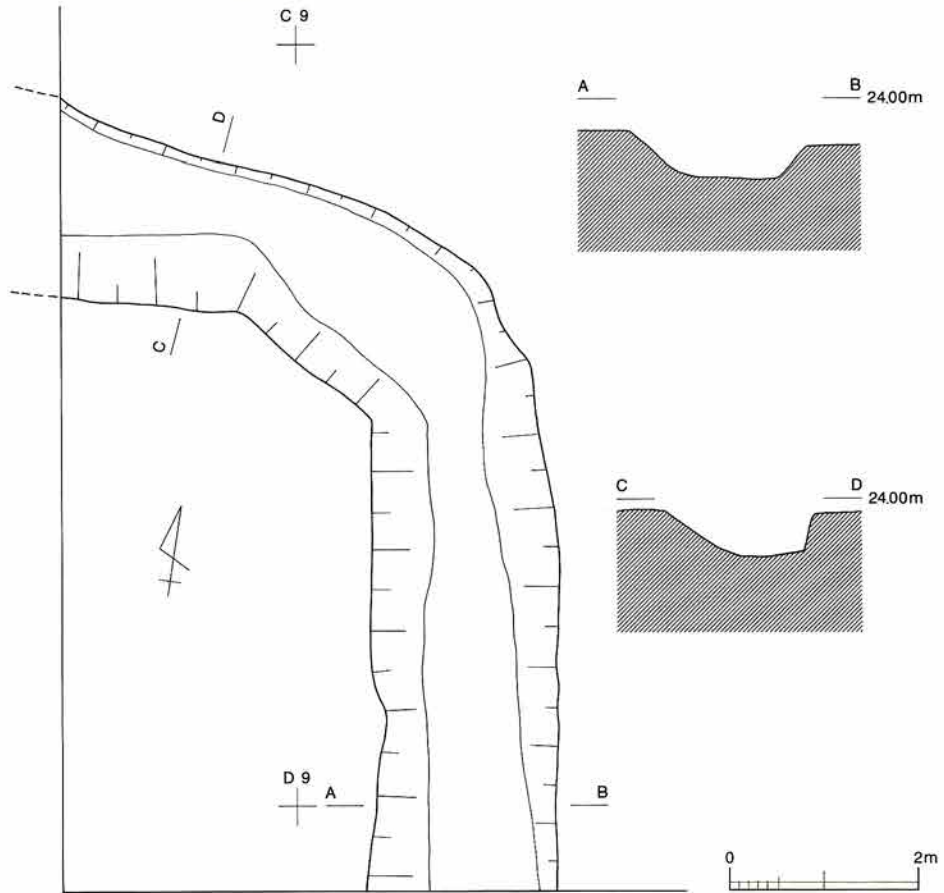


図83 SX06 実測図

⑦SX07

位置

調査区西側の中央より東側に位置しています。SX13ならびにSX14を切っています。西側は溝(SD01)がSX07の後に築かれており、一部損壊を受けています。SX13は主軸を同じくしており、SX07の東溝を共有していたかもしれません。北側には5m離れてSX11が同じ主軸で位置しています。西側には時期の下る古墳であるSX09が10m離れて存在します。



図84 SX07 遺物出土状態

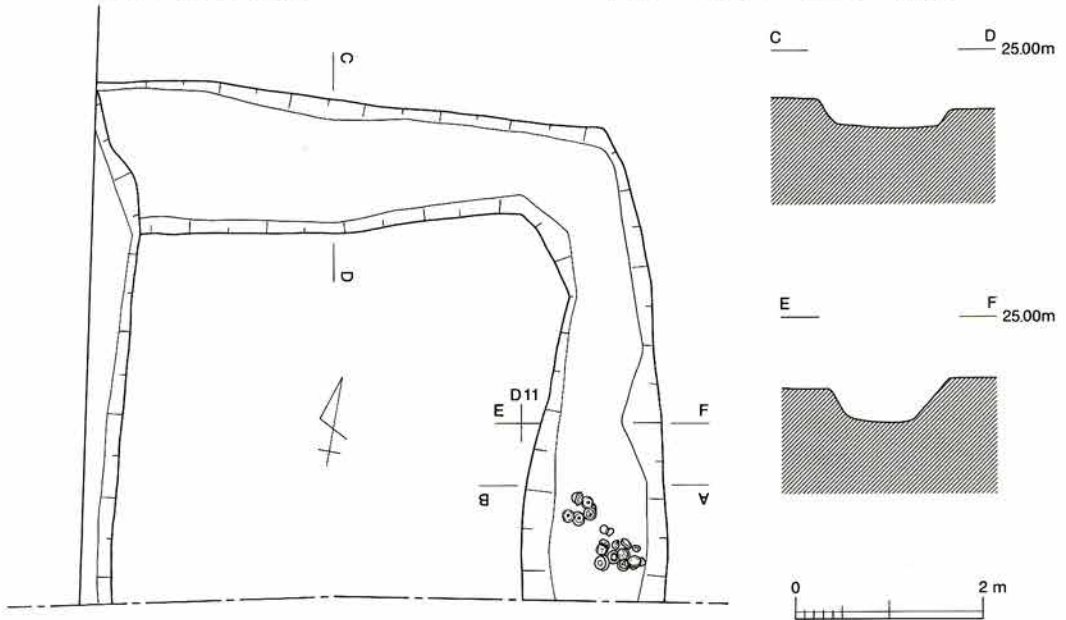


図85 SX07 実測図

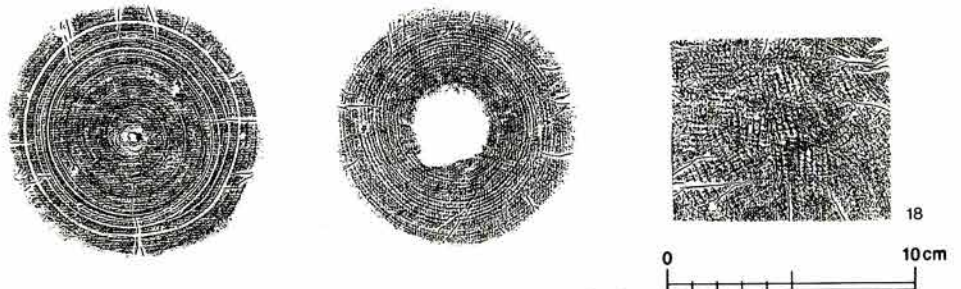


図86 SX07 出土土器 拓本

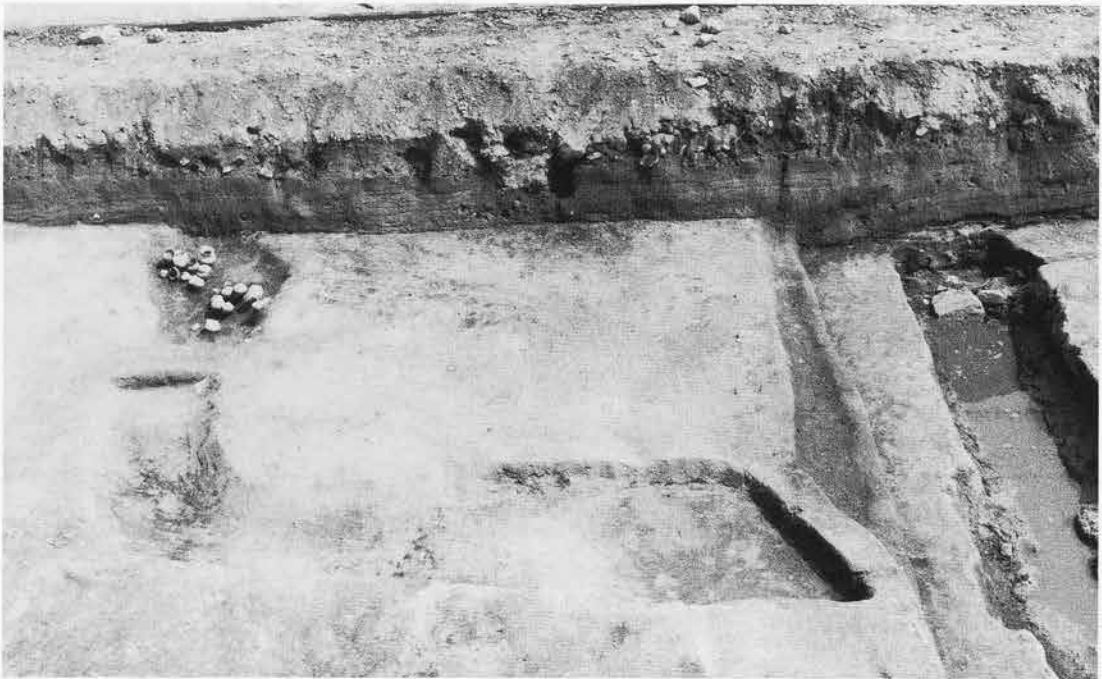


図87 SX07

遺 構 西側を溝で切られ、南側は線路下へ延びているため全体像は判りません。ただ、東西方向の規模はほぼ確定出来ます。東西は5.6mを測り、南北の残存長は5.3mあります。溝の形態・規模は均一ではなく、大きな部分で幅1.6m、深さ0.6mあり、小さな部分で幅1.0m、深さ0.3mを測ります。南側が深く、北側が浅い傾向にあります。ともに断面は台形ですが、浅い部分は垂直に近い急傾斜になっています。溝の底はだいたい平坦です。溝の埋土は、部分によって異なるが、大きくは2つに分けられます。下層は土壌化した土が徐々に堆積したもので、黒色～茶褐色を呈しています。上層は洪水による堆積土で、暗黄色の中砂が主です。溝で囲まれた平坦面は東西4.6m、南北は残存長で4.0mを測ります。

**遺物出土
状態** 東側溝の南寄りの部分で遺物が集中して出土しています。一塊りで置かれたものと思われます。総数20個体の土器が供えられたもので、大きく2群に分けられます。東側溝の内側（西肩寄り）の10個体のグループと、外側（東肩寄り）にも10個体の土器のグループがあります。内側のグループは、5組のセット関係があります。4組の蓋を持つ須恵器高杯と、土師器椀とその蓋となる杯の5組10個の土器です。この群はすべて脚を下にした正位置で出土しています。外側のグループも土器は10個で須恵器9個と土師器1個の内訳は同じですが、出土状況は異なっています。器種も壺が加わります。須恵器壺は2個あり、共に調査段階では蓋は認められませんでした。口縁部を上に向けて出土しています。土師器壺は石で蓋をしています。離れて杯蓋が出土しており、土師器壺の二重の蓋とした可能性もあります。須恵器壺と土師器壺の間から杯蓋が2点重なって出土しています。須恵器壺

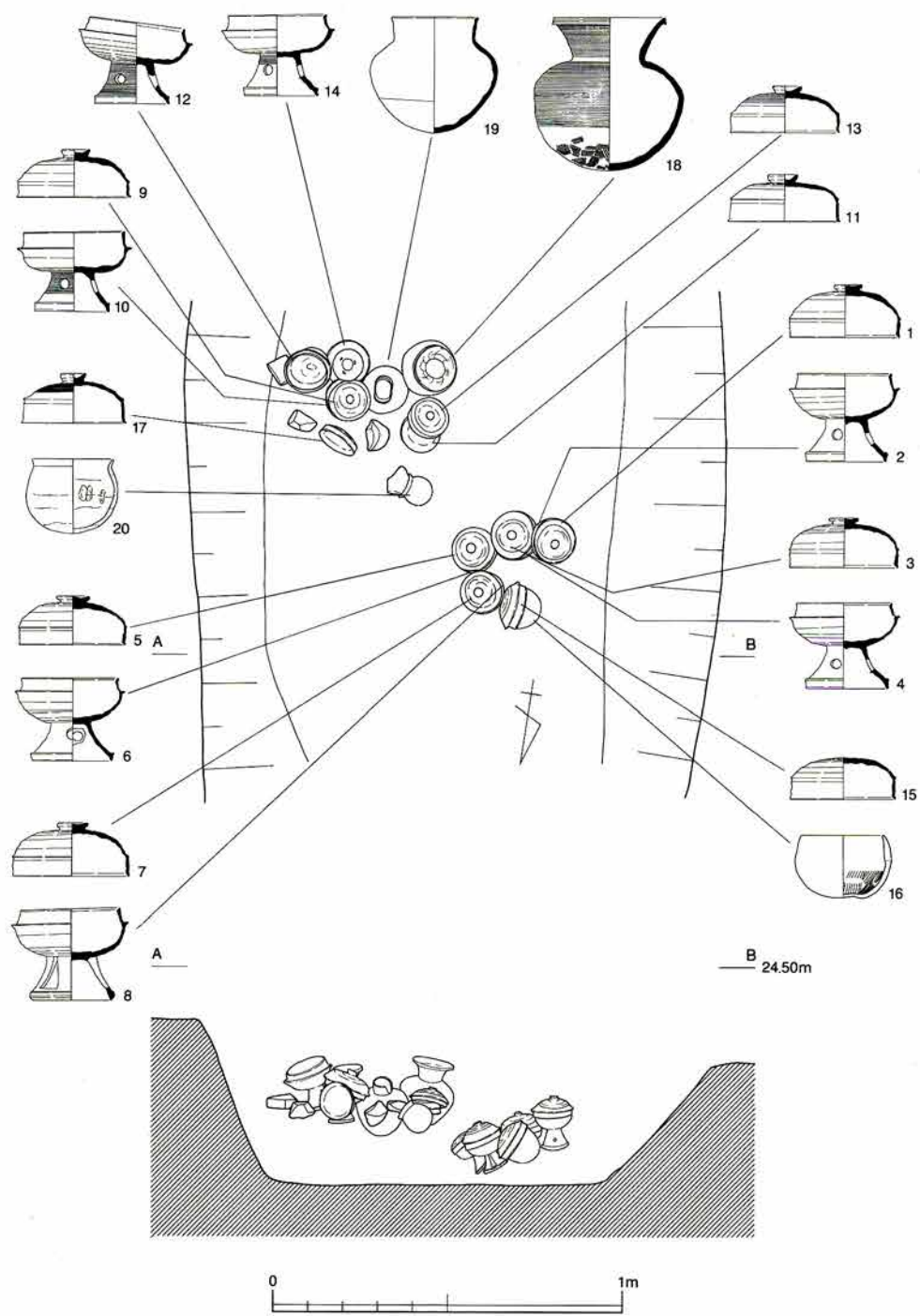


图88 SX 07 遺物出土狀態

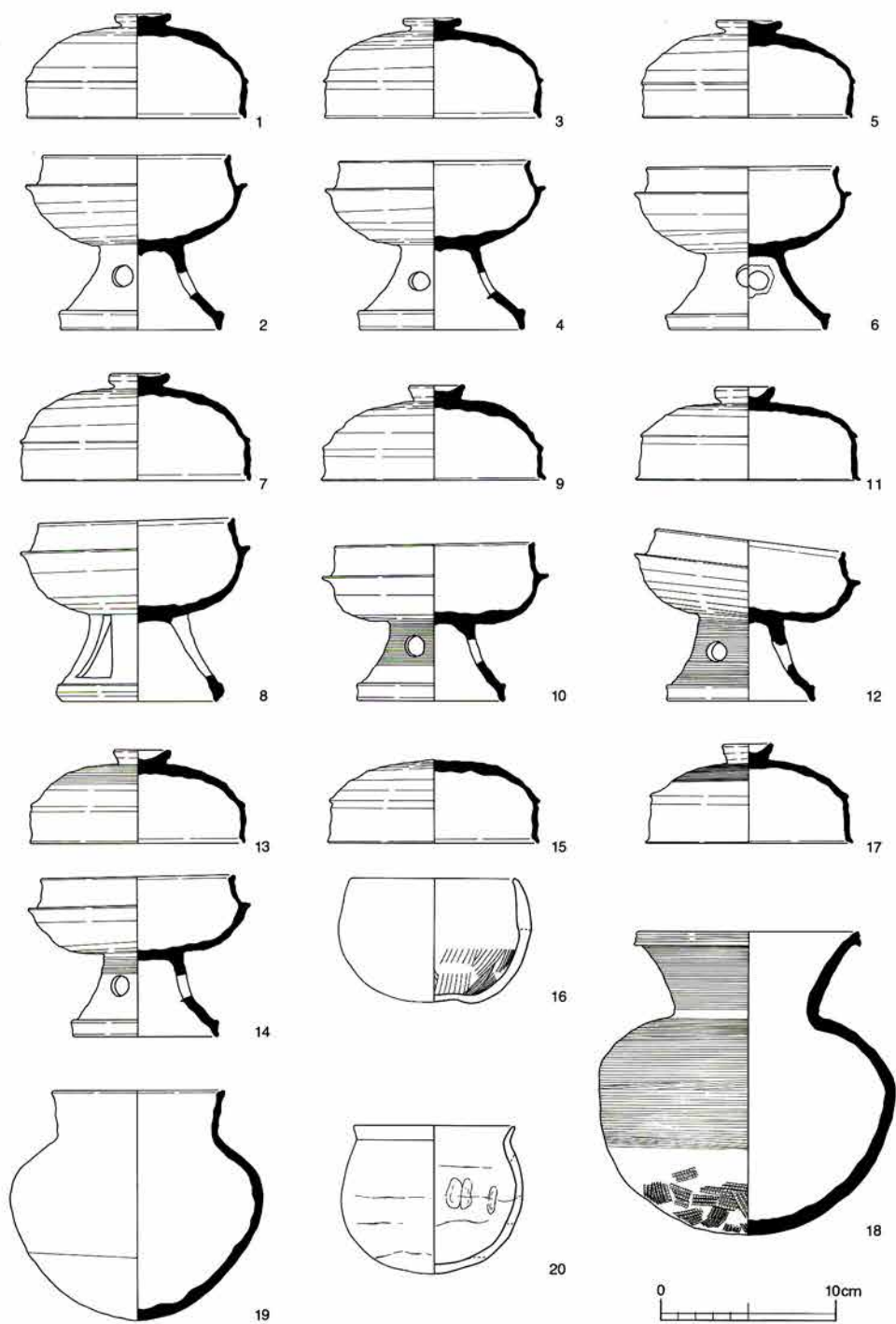


图89 SX07 出土土器实测图

の東横からは3個の高杯が出土していますが、3個とも状況が違います。1個は蓋をした状態で、1個(12)は正位置で、1個は(14)は口縁部を下にした倒位置で置かれています。検出状況ではバラバラですが、蓋が4個あることから本来は4組のセットとして供えられていたのかもしれませんが。葬送儀礼の違いによるものでしょうか。

遺物 出土遺物は、須恵器・土師器が出土しています。須恵器は杯蓋(有蓋高杯の蓋)8点と杯蓋1点と有蓋高杯7点と壺2点が出土しています。土師器は壺と碗が1点ずつです。

表5 SX07 出土遺物観察表

No.	器種	法 量(cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯 蓋	12.45	5.9	—	天井部中央につまみが付く。つまみは扁平。 天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面約 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ、他は内・外面ともロクロナデ調整。	
2	有蓋高杯	10.65	9.9	9.05	たちあがりは内傾する。受部はやや上方につまみ出される。短く広がる脚部をもち、その中ほどに円形透しを三方にあける。脚部端部は下方に拡張。	杯部の底部外面 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ他は内・外面ともロクロナデ。穿孔部の内面には粘土のはみ出しが付着。	(1)の蓋とセット関係。 円形透しを作った際に出たと思われる粘土片も共に出土。
3	杯 蓋	12.25	5.65	—	天井部中央に扁平のつまみが付く。 天井部と口縁部をわける稜は短い。	天井部外面 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
4	有蓋高杯	10.8	9.6	9.2	たちあがりは内傾する。受部はやや水平にのびる。短い脚部をもち、中ほどに円形透しを三方にあける。脚部端部は上下に拡張。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。受部の上面に凹線を巡らす。	(3)の蓋とセット関係。
5	杯 蓋	11.9	5.6	—	天井部中央に扁平のつまみが付く。 天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
6	有蓋高杯	10.8	9.25	8.8	たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短く広がる脚部をもち、中ほどに円形透しを二方にあける。脚部端部は上下に拡張。	杯部の底部外面はロクロケズリ、他は内・外面ともロクロナデ調整。受部の上面に凹線を巡らす。	(5)の蓋とセット関係。 円形透しを作った際に出たと思われる粘土片も共に出土。
7	杯 蓋	12.95	6.1	—	天井部中央に扁平のつまみが付く。 天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
8	有蓋高杯	11.1	10.35	8.8	たちあがりは内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短く太い脚部をもち、脚部端部に稜をもち、脚部部に三角形の透しを三方にあける。	杯部の底部外面はロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	(7)の蓋とセット関係。
9	杯 蓋	12.75	5.4	—	天井部中央につまみが付く。つまみは上方につまみ出され比較的器高が高い。天井部と口縁部をわける稜はあまい。	天井部外面をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ、内面天井部は一方方向の仕上げナデを施す。	天井部外面に灰かぶり(重ね焼痕)。
10	有蓋高杯	11.35	9.0	8.2	比較的扁平な杯部をもち、たちあがりほぼ垂直にたつ。受部は水平にのびる。短い脚部をもち、その中ほどに円形透しを三方にあける。脚部端部は上下に拡張。	杯部の底部外面をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部外面にカキメを施す。	(9)の蓋とセット関係。
15	蓋	11.95	4.75	—	天井部はやや扁平でつまみをもたない。 天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
16	鉢	9.3	7.1	—	体部は全体的に丸く、口縁部は内傾する口縁端部は内彎する。	外面はユビ成形により、口縁部はヨコナデ底部にはユビおさえ痕のこぼる。内面はユビ成形のちヨコナデを施し、のちに粗いハケで調整しユビでナデている。口縁部と体部の境に粘土の継ぎ目みられる。	(11)の須恵器杯蓋とセット関係。

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
11	杯 蓋	12.7	5.3	—	天井部中央につまみが付く、つまみは周縁を上方につまみ出され器高は比較的高い。天井部と口縁部をわける稜は短い。	天井部外面をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	天井部外面灰かぶり(重ね焼痕)。
12	有蓋高杯	10.8	9.1	8.3	たちあがりはやや内傾する。受部は水平にのびる。短く広がる脚をもち、その中ほどに円形透しを三方にあける。脚部端部は上下に拡張。	杯部底部外面は下半をロクロケズリのちかキメ調整か、他は内・外面ともロクロナデ。脚部外面カキメ調整。	
13	杯 蓋	12.2	5.3	—	天井部中央につまみが付く、つまみは周縁を上方につまみ上げる。天井部と口縁部をわける稜は短くあまい。	天井部外面はロクロケズリのちかキメ調整。他は内・外面ともロクロナデ調整。	天井部外面灰かぶり(重ね焼痕)。
14	有蓋高杯	11.0	9.2	8.1	たちあがりは内傾する。受部はほぼ水平にのびる。短い脚部をもち、その中ほどに円形の透しを三方にあける。脚部端部は上下に拡張。	杯部底部外面をロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。脚部外面はカキメ調整(一部灰かぶりのため不明瞭)。穿孔部内面に粘土のはみ出しがみられる。	
17	杯 蓋	11.75	5.65	—	天井部中央につまみが付く、つまみは周縁を上方につまみ出され器高は高い。天井部と口縁部をわける稜は短い。	天井部外面はロクロケズリのちかキメ調整。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
18	壺	12.5	17.2	—	口頸部は外反し、端部は下方に拡張する。体部の最大径は $\frac{1}{2}$ 以上にある。	頸部から体部にかけて外面はカキメ調整。下半以下は格子目叩きを施す。内面はロクロナデ調整。口縁部端面に2条の凹線を巡らす。	
19	壺	(9.7)	8.0	—	口頸部は短くわずかに外反する。体部の最大径は $\frac{1}{2}$ あたりにある。	体部外面、下半以下はロクロによらない。不定方向のヘラケズリ調整。他は内・外面ともロクロナデ調整。	外面肩部と内面に灰かぶり。
20	小型丸底壺	9.0	8.4	—	短く外反する口縁部をもつ。体部はほぼ球形に近い。	外面はユビ成形。底部は叩きのちかユビによるナデ。内面はユビ成形。口縁部はヨコナデを施す。内・外面とも粘土の継ぎ目がよくわかる。	



図90 S X 0 7 出土土器



图91 SX07 出土土器(1)



图92 SX 07 出土土器(2)

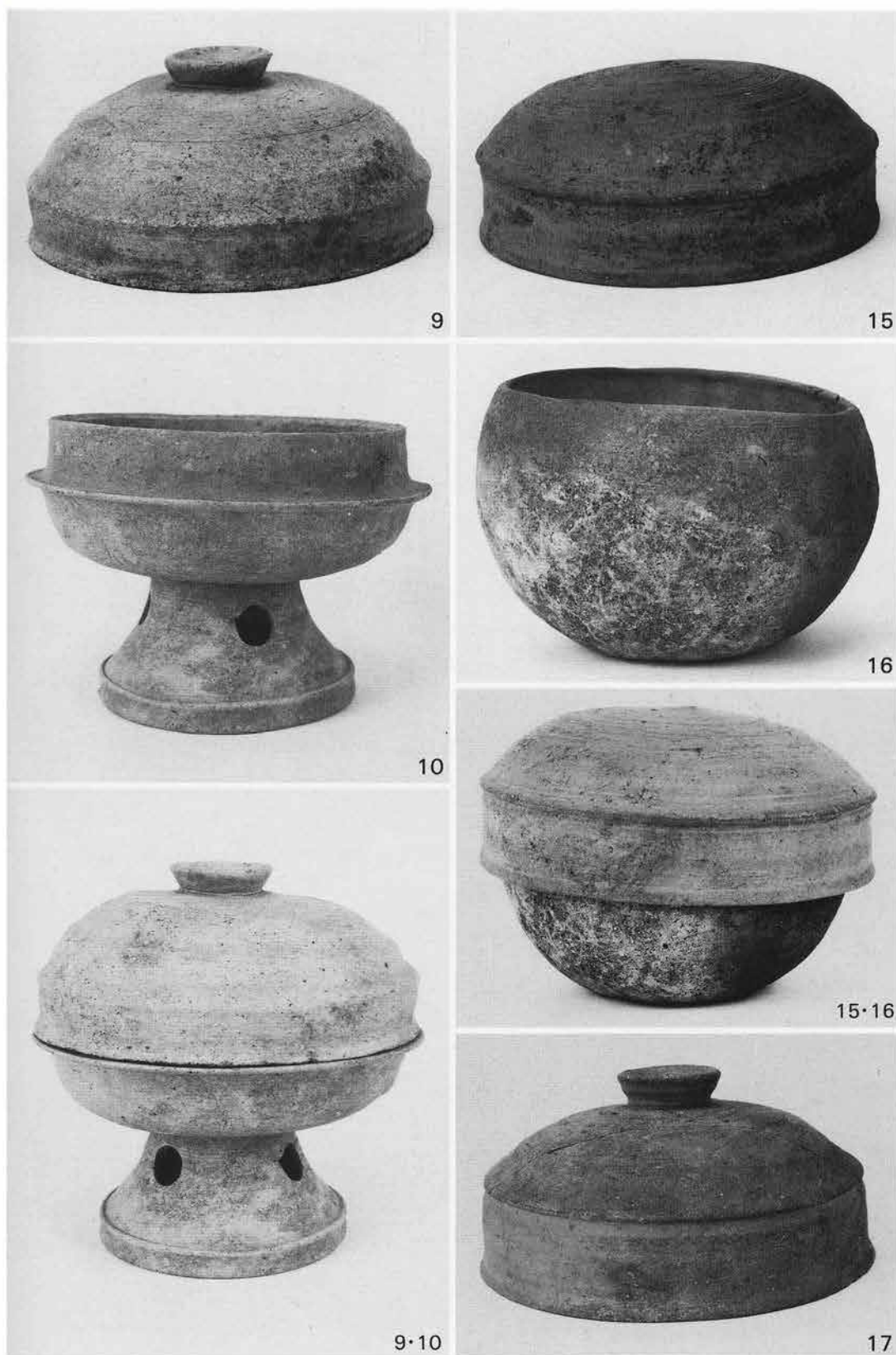


图93 SX 07 出土土器(3)



11



18



12



19



13



20



14

图94 SX 07 出土土器(4)

⑧SX08

位置

調査区の西端に近いところに位置しています。1条の溝しか調査していませんが、遺跡の性格から考えて取り敢えず同じ扱いをして古墳として報告します。北側約2mには新しい段階の古墳であるSX09の溝があります。溝の東西方向どちらも遺構は近接しては築かれていません。東側は約10m離れてSX07がほぼ主軸を同じくして立地しています。西側は削平している

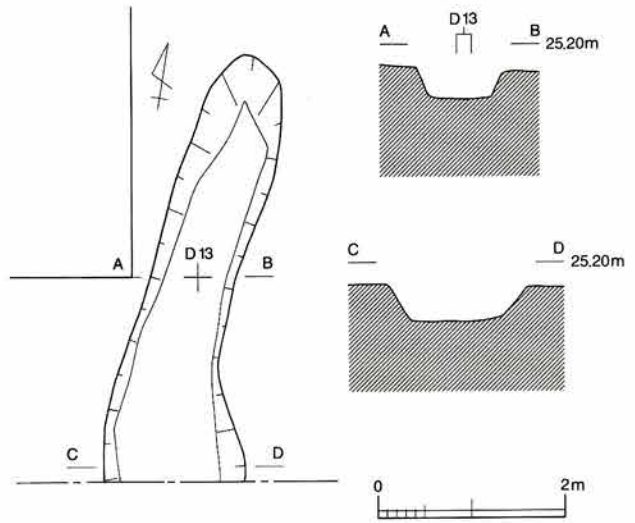


図95 SX08 実測図

のかもしれませんが、遺構は調査区端まで(約15m)認められませんでした。

遺構

他の古墳と異なり、1条の溝しか検出していません。西側が削平されていることから対になる溝が残っていない可能性もあるので、他と同じ扱いをします。調査区南側に延びている溝で、ほぼ直線的に延びています。南北よりやや東に主軸を振っていますが、SX07などと同じ主軸をとっています。西肩は直線ですが、東肩は南から約1.2mのところに変化しています。その南側はやや弧を描いて膨らんでいます。幅も南側の方が広く1.8mを測ります。北側は1mと狭くなっていますが、肩部はしっかりしています。調査をした長さは4.6mを測ります。埋土は下部に5cm前後の黒褐色～褐色の中砂層がありますが、ほとんどは暗黄色の中砂層です。

遺物

肩部周辺(特に東側)から弥生土器の小片が出土していますが、図化可能なものではありません。溝内からも僅かに2点弥生土器が出土しています。しかし、これら遺物は時期を示す資料ではなく、埋土の状況などからはSX07などと同じ古墳の時期と考えられます。

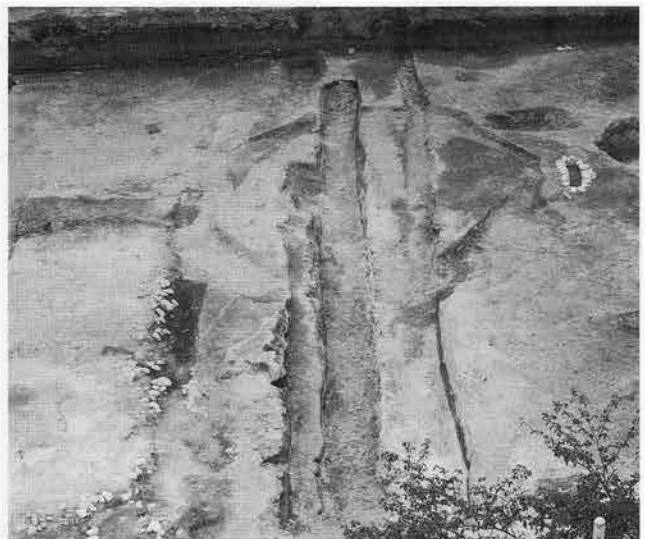


図96 SX08 および周辺遺構

⑨SX09

位置 調査区東側の中央に位置しています。東側のSX02、南東側のSX03と時期は異なるものの整然と構築されています。西側には同時期の墓と考えられるSX05が主軸を同じくして位置しています。北側は約8m離れて谷地形となっていることから、墓は存在しません。

遺構 平面規模は、現状では僅かに北辺が短い台形となっています。他の墓と同じく溝によって墓の規模を定めています。北辺は7.9m、東辺は8.6m、南辺は9.4m、西辺は9.0mで、溝の幅は狭いところで1.0m、広いところで1.6mを測ります。南側2つのコーナーは隅円ながら角ばっていますが、北側のコーナーは方形が崩れて弧状になっています。そのために平面プランがより台形に見えます。溝の内側の平坦面の大きさは東西辺・南北辺ともに約7.2mを測ります。溝の

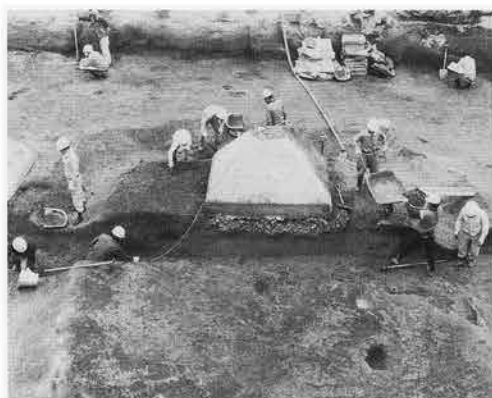
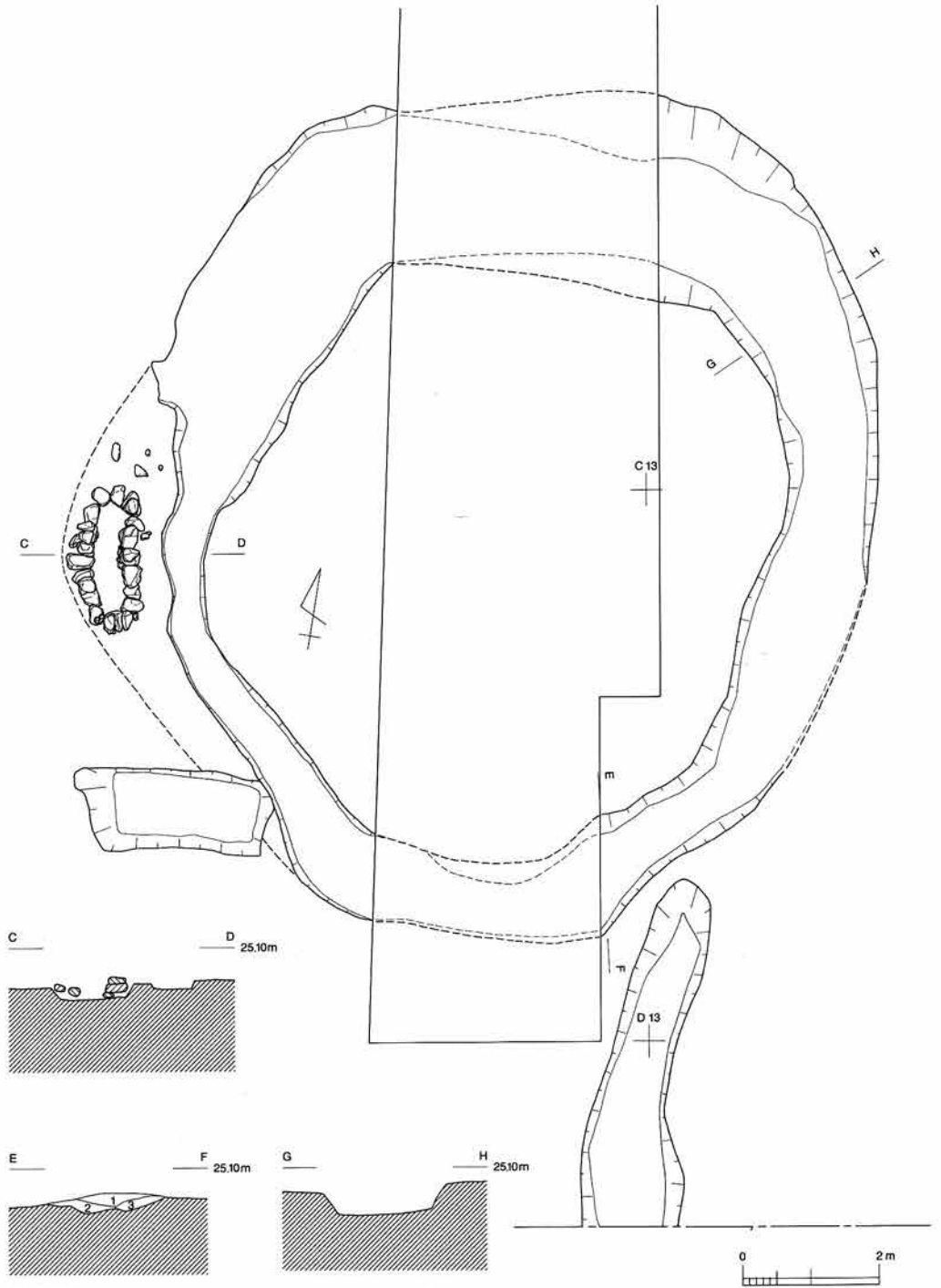


図97 調査風景



図98 SX09



1. にぶい黄橙シルト質極細砂
2. 褐灰シルト質極細砂
3. 褐灰中砂～細砂

図99 SX09 実測図

深さは0.2~0.45mで平均0.2mの深さです。溝の埋土は、黒色ないしは黒色に近い土壌化している砂層です。大きくは上下2層に分けられます。下層は数層に分かれ、部分によって堆積状態が異なります。上層埋土には弥生土器片が認められます。

遺物出土 溝埋土にも土器は見られます〔(1)~(3)〕
状態 が、築造後に混入したものと思われます。原位置を保っているのは、東側溝の1個体の弥生土器だけです。東側溝のほぼ中央から出土しています。壺で口縁部を北側に向けて横位置で出土しています。土器は、ほぼ溝の主軸方向と一致して置かれています。底面に接しておらず、僅かに上に位置しています。ただ、溝の下の土が有機質によって変化した可能性もあります。土器は

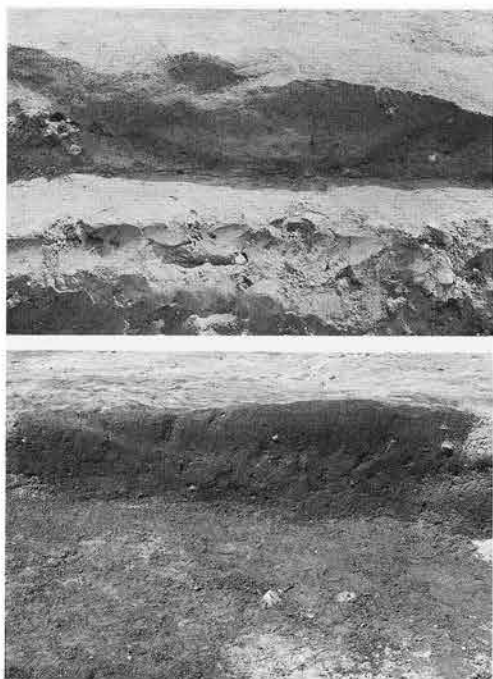


図100 SX09 堆積状況



図101 SX09 土器拓本

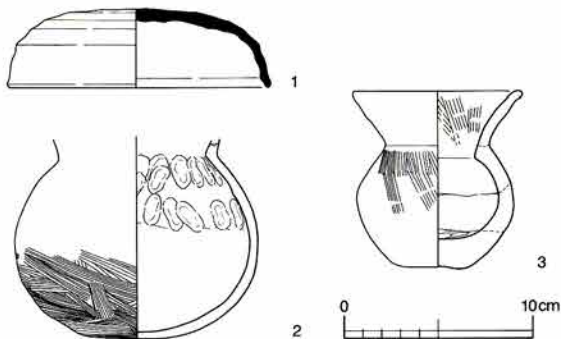


図102 SX09 出土土器 実測図

表6 SX09 出土遺物観察表

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯 蓋	(13.8)	4.3	—	全体的に器厚が高厚い。天井部と口縁部をわける稜は不明瞭。天井部は扁平。	天井部外面以上クロケズリ、他は内・外面ともクロケ調整。天井部内面に同心円状の叩き痕がみられる。	
2	壺	—	(10.5)		ほぼ球形の体部。	全体的にユビ整形したのち、外面はハケ整形上半はヨコナデで仕上げる。内面はユビ整形のまま指圧痕残る。	
3	壺	9.0	9.2		器肉は非常に厚い。底部は特に厚い。口縁部は外方に直線的に開く。	外面はユビ整形ののち粗いハケで整形する。口縁部はヨコナデで仕上げる。内面はユビ整形ののちナデで調整する。	

溝の底中央よりやや内側から出土していますが、当初から置いたものか、上から落ち込んだものかは明らかではありません。偶然かもしれませんが、主軸方向と土器の方向が同じであることから故意に置いたものと考えています。

他の土器は、溝埋土と遺構面上部の堆積土から出土しています。小片が多く図化可能な土器は僅かです。



図103 土器出土状態



図104 SX09 出土土器

⑩SX10

位置 調査区西端に位置します。調査区西側は旧国鉄のターンテーブルが存在したことから、残存状況は良好とは言えません。東側にSX09が位置していますが、築造時期は異なります。

遺構 西側はほとんど残っていないことから、全体像は明らかではありません。僅か数cmしか残っていませんでした。全体のほぼ半分近くを調査したものと思われます。調査した部分の数値では、幅約2m（最大5.2m、最小1.2m）の方形に溝を巡らす方形周溝墓と思われます。南北の長さは14.2m、東西の残存長は6mを測ります。溝の深さは、ほとんど残っておらず、最も深いところで0.2mです。

遺物 弥生時代末の土器が数点出土しています。器種がわかるのは壺だけです。周溝の底に接して出土しています。

時期 出土遺物から弥生時代末と思われます。

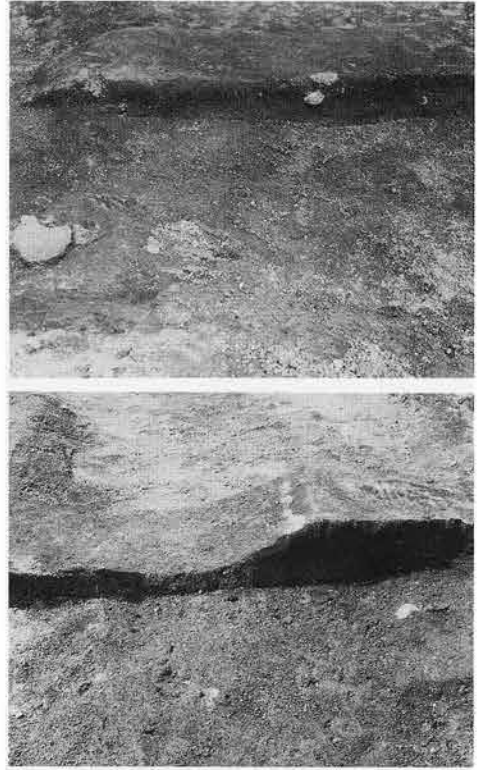


図105 SX10 土層堆積状況



図106 SX10

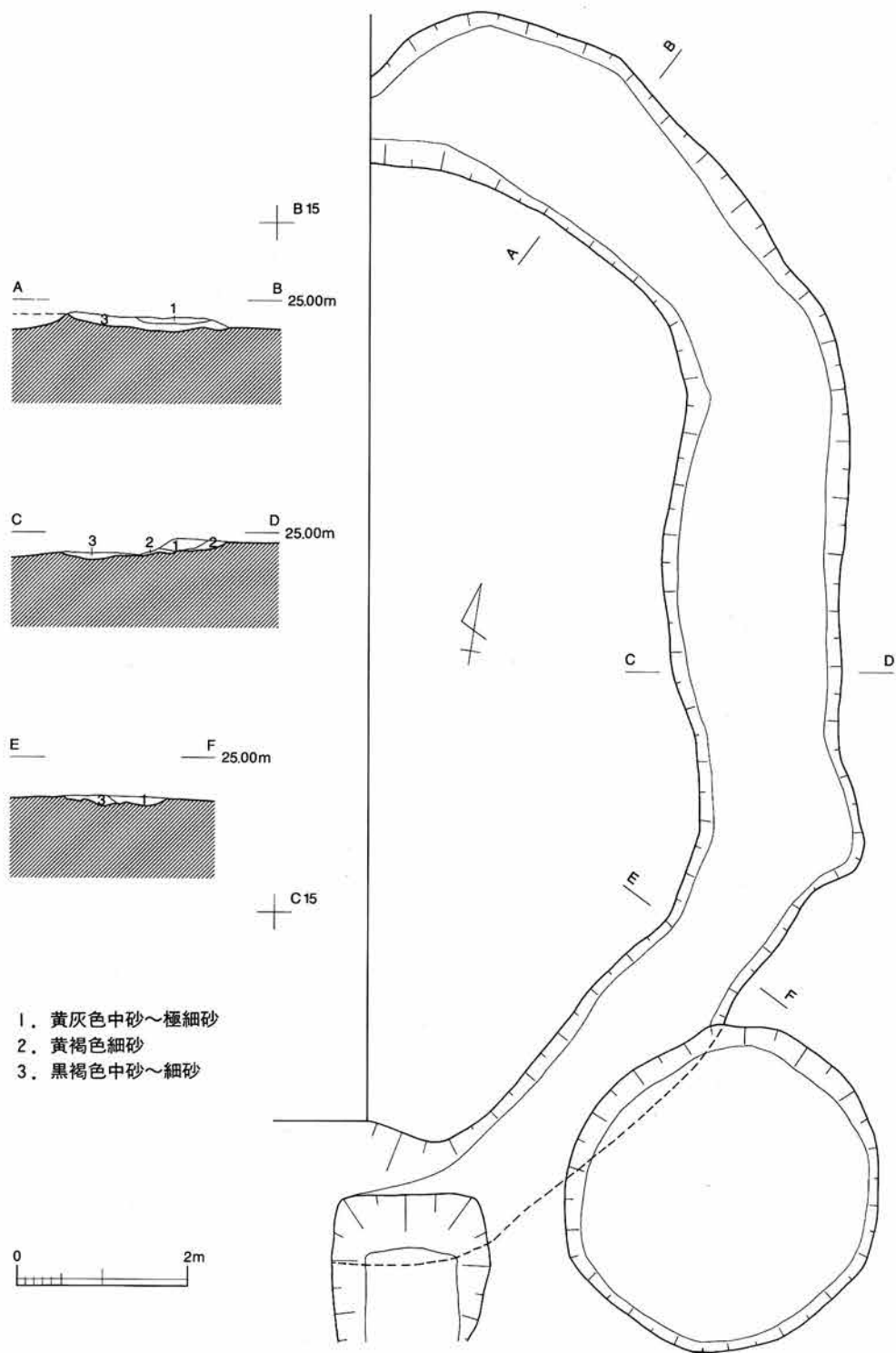


图107 SX10 实测图

①SX11

位置 調査区西半に位置します。南西コーナーをSX09が、東側をSX12が切っています。また、南東部分もSX14が切り合っており、複雑な切り合い関係にあります。ただ、SX09・SX12ともに時期が下るため、遺構面が高くなっているため、僅かに溝が下層で検出されています。平面図では不明瞭ですが、上下関係があります。

遺構 南西コーナーをSX09に、南東コーナー付近をSX14に切られています。平面的にはほぼ全容のわかる墓（古墳）です。南北長は15.5m、東西長は12.3mのやや南北に長い方形をした古墳です。主体部（埋葬施設）は残念ながら確認されていません。出土遺物がないことから、早くは流出したものと想像されます。溝の深さは最大値で0.5mと浅いものですが、築造当初は立派な溝だったと考えられます。

溝の幅は、狭いところで1.2m、広いところで2.2mを測ります。調査段階では北側の溝が広がっています。溝で囲まれた内側の数値は、東西9.5m、南北12.0mあり、他の古墳より1回り規模が大きいです。



図108 SX11 葎石



図109 SX11

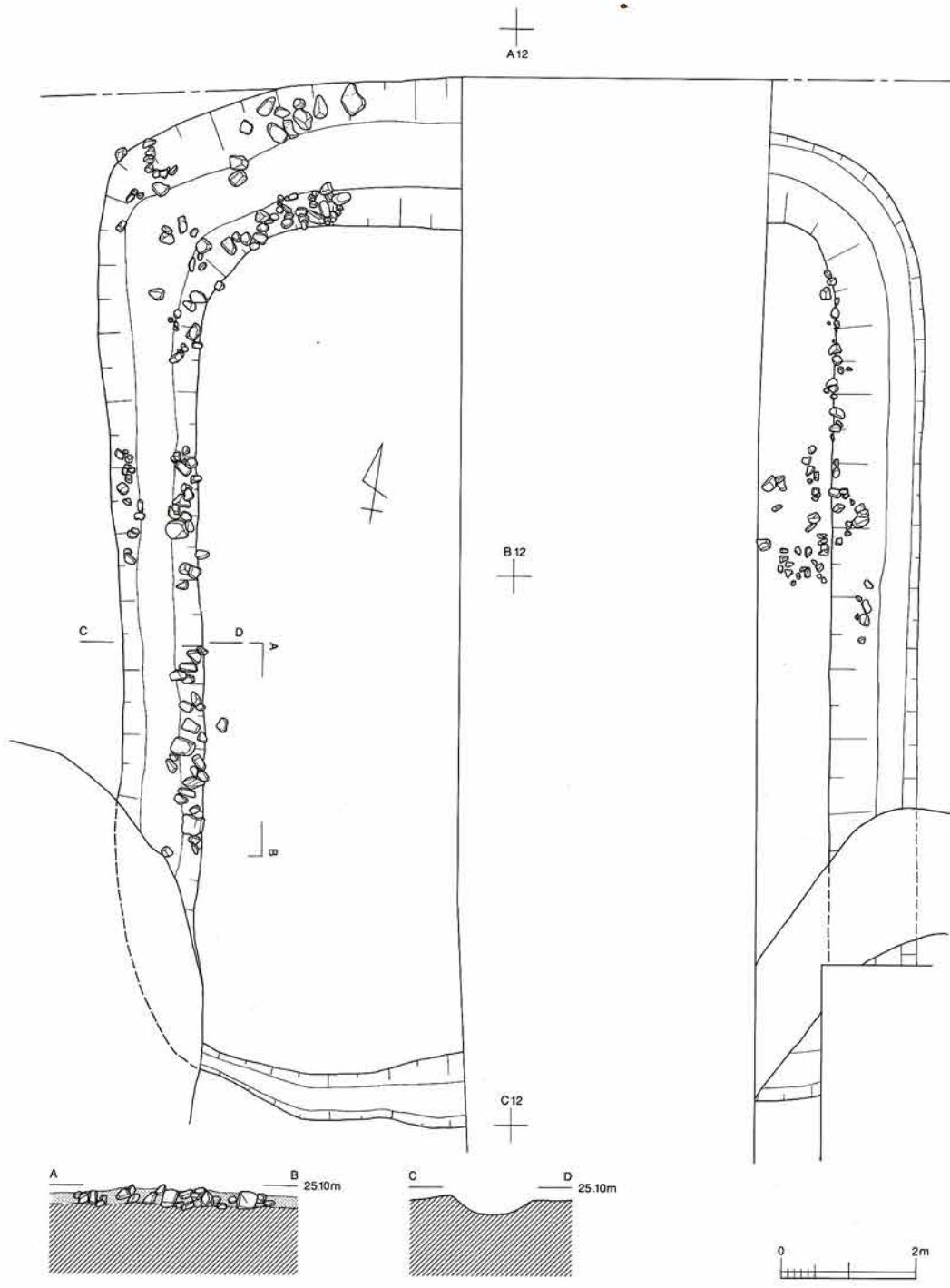


图110 SX 11 实测图

この古墳の特徴は、墳丘に葺石が巡らされていることです。西側の溝でも、特に内側の墳丘部に顕著に葺石が施されています。石材は、地元山塊で採取される花崗岩がおもに使われています。大きいもので人頭大で、大半は拳大前後の礫が使用されています。



図111 SX11 北西コーナー

またこの古墳では埴輪が出土しています。確認調査で1点出土していますがそれ以外では今回の調査区では出土していません。

第9次調査の住吉東古墳のように埴輪列を保有する古墳は住吉町遺跡群内で確認されていますが、やはり有力者の墓と考えて良いかと思えます。今回、調査を実施した中では盟主墳と位置づけても良い古墳と思われる。

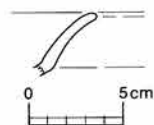


図112 出土土器

直接の遺構ではありませんが、SX11部分で顕著に地震の痕跡が確認されています。地震に伴う断層が認められたのも、この古墳からです。

遺物 出土遺物は、ほとんどありません。図化したのは図111の土師器の口縁部だけです。二重口縁と思われるが、磨滅しています。他に、図化していませんが、埴輪の破片があります。円筒埴輪で、退化した断面M字形のタガで、縦方向のハケが見られます。

時期 切り合い関係から最も古い可能性があります。6世紀初頭前後かと考えています。



図113 SX11

⑫SX12

位置 調査区西半の東側である全体のほぼ中央に位置しています。西側にSX11が、南にSX14が存在します。ただ、垂直的には、SX11は低いところに位置しています。SX12の東側は古墳が築造されておらず、やや低くなっています。浅い谷となり、水田跡(上層水田)が認められます。

遺構 西側溝は、確認調査トレンチ部分に相当することから、不明です。他の3辺は調査を行っており、正しい数値がわかります。溝の平面の形は、他の古墳と同じ方形ですが、ややびつになっています。東辺が短くなった(台形の上辺となる)台形になっています。完全に残っている東辺で7.5mを測り、西側の残存部では8.6mあります。南辺は6.6m、北辺は6.4m残っています。溝は浅いもので0.2m前後のものでした。幅は北東コーナーに近い北辺で狭くなっていますが、それ以外はほぼ同じ幅です。2.1m前後の幅でもっとも狭いところは1.0mです。

埋葬施設はやはり確認されていません。溝で囲まれた内側の規模は南北5.8mで、東西は推定となりますが、南北と同じか、やや広いのではないかと思われます。



図114 SX12 土器出土状態



図115 SX12

溝の底は、他の古墳の溝と比べて平坦でした。SX12の特徴と言えます。溝で囲まれた内側の方が僅かに高くなっていることは、一般的なことで内側に埋葬施設を築いた根拠と言えましょう。東側に古墳の存在した空間があります。1つのグループの端部に位置していたことになります。



図116 SX12 出土土器

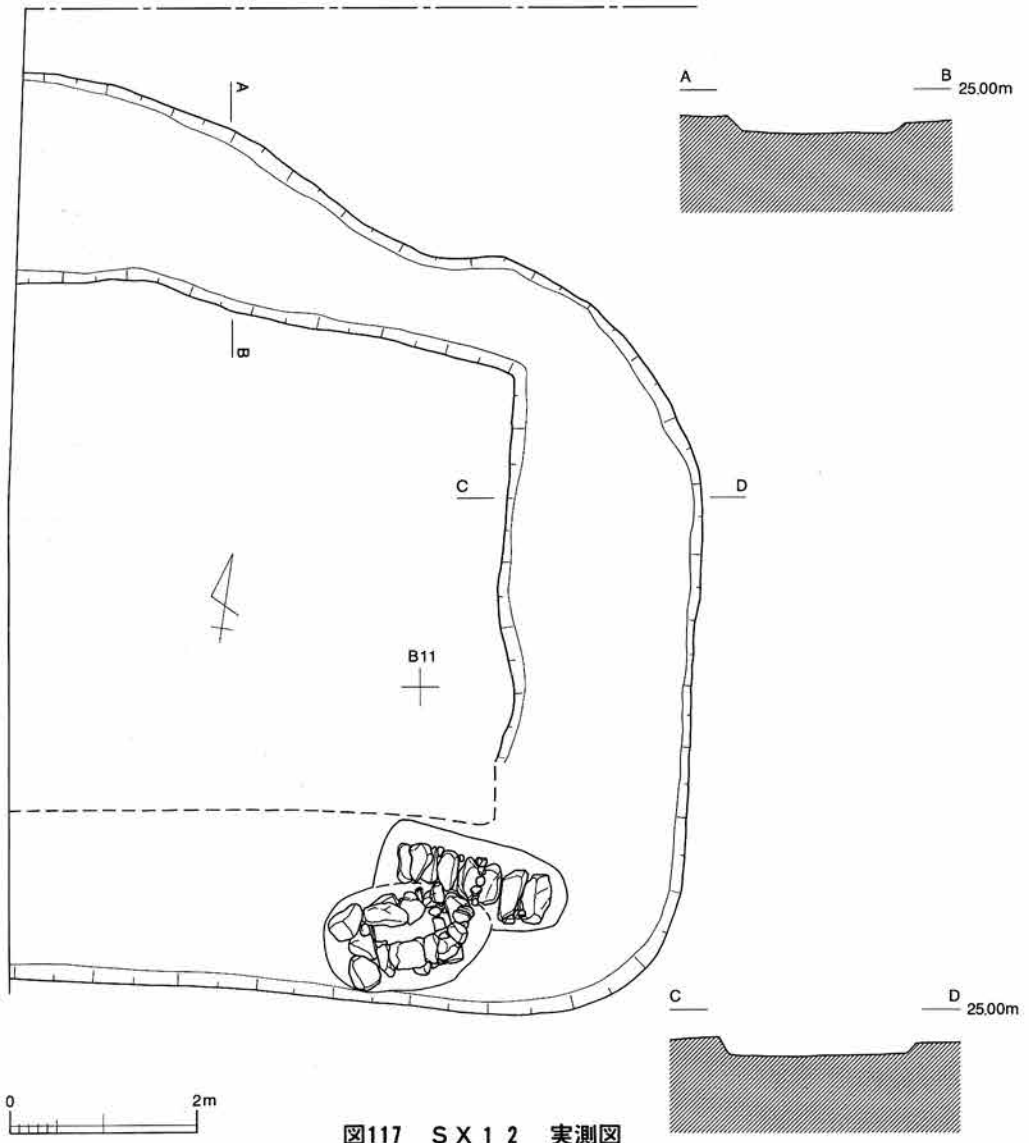


図117 SX12 実測図

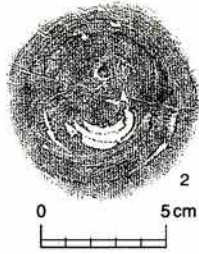


図118 土器拓本

南側溝の底で石棺 (S T 0 2) と石蓋土壙墓 (S T 0 3) が確認されています。溝内に築かれてい

ますが、この古墳の埋葬施設と断言できるかどうかは疑問です。

遺物出土 溝の底から3点の須恵器が出土しています。すべて南辺の底に接して出土しており、

ともに口縁部を下にしていました。杯身が2点、杯蓋が1点です。

遺物 杯3点出土していますが、杯蓋はやや新しくなる可能性があります。

埴輪が1点出土していますが、SX11に伴う埴輪と考えています。

時期 今回調査を行った部分では新しい段階になりますが、SX09よりは古くなろうと思われれます。杯身の時期が築造時期で、杯蓋がS T 0 2・S T 0 3に伴うものではないかと考え、6世紀中葉の古墳であろうと思われれます。

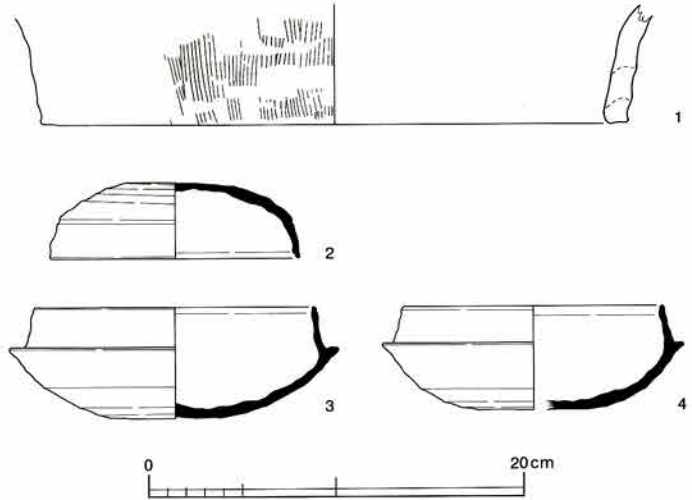


図119 SX12 出土土器実測図



図120 SX12 出土土器

表7 SX12 出土遺物観察表

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
2	杯 蓋	13.1	4.0	—	やや扁平、つまみなし。天井部と口縁部の界に凹線が巡る。	天井部外面にロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	
3	杯 身	(13.6)	5.4	—	比較的大型、たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのびる。	底部外面にロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。	底部外面灰かぶり。
4	杯 身	(14.8)	5.8	—	大型、やや扁平、たちあがりはやや内傾する。受部は水平にのびる。	底部外面以上ロクロケズリ。他は内・外面ともロクロナデ調整。底部内面は一方方向の仕上げナデを施す。	

⑬ SX13

位置 調査区のほぼ中央の南側 (C09・D09・C10・D10) に位置しています。SX06の西側、SX07の東側に造られています。

遺構 調査では北溝と東溝を検出しました。形は方形であると思われます。検出された墳丘の規模は、周溝の変換点から測って東西約7.5m、南北約5.6mとなっています。周溝は、西溝がコーナー部分より南がSX07に切られており、東溝も南の部分は検出できませんでした。溝の規模は北溝が幅1.5~1.9m、深さ約0.5m、東溝が幅約1.4m、深さ約0.4mと、調査区の東側にあるものより比較的浅くなっています。これは、調査区の西側が東側に比べて高くなっているためと、西側の遺構面(遺構が造られている面)が東側より多く削られているためと思われる。主体部はここでも検出されませんでした。

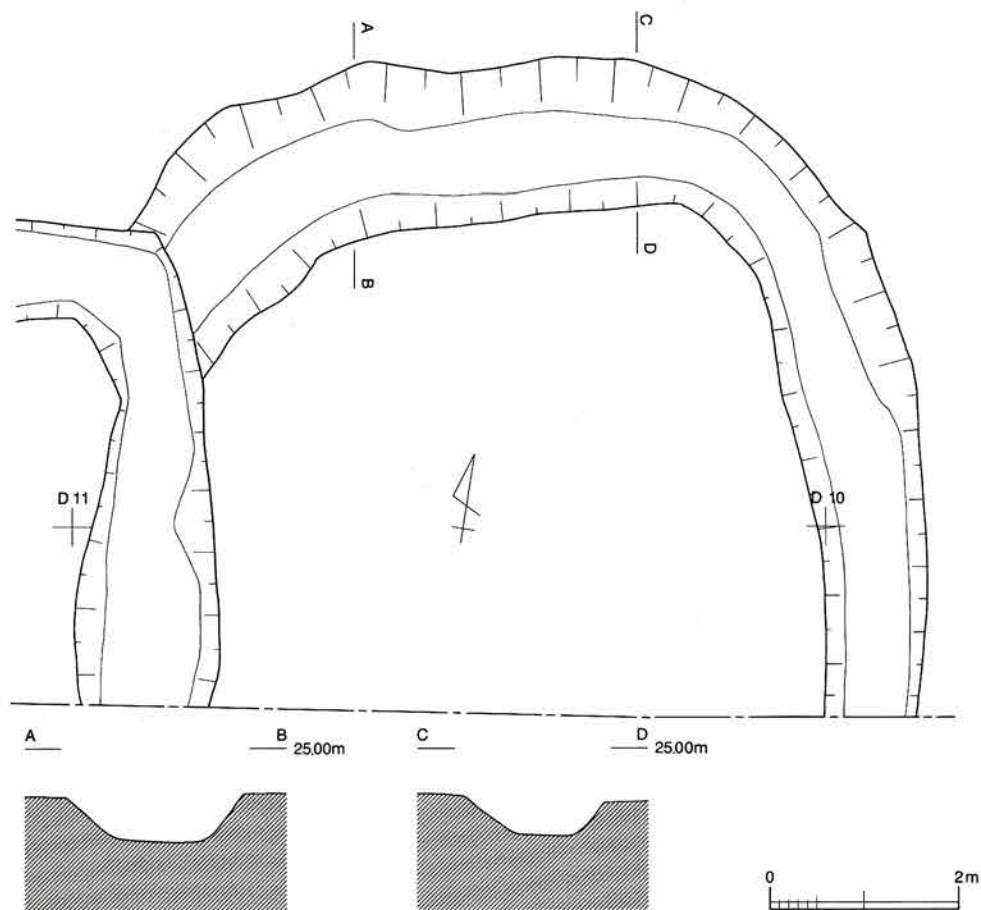


図121 SX13 実測図

時期 出土遺物は須恵器の杯身が出土しています。時期は5世紀後半と考えています。しかし、遺構の切り合いの関係からSX07よりは古く、SX06よりは新しいと考えられます。



図122 SX13 出土土器実測図



図123 SX13 出土土器

表8 SX13 出土遺物観察表

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯 身	11.35	5.5	—	たちあがりはやや内傾する。受部はやや上方につまみ出される。底部はやや扁平。	底部外面 $\frac{1}{2}$ をロクロケズリ、他は内外面ともロクロナデ調整。	受部上面に一部蓋の口縁部が癒着。



図124 調査区西半 全景

⑭ SX14

位置

調査区の中央やや西側 (B10・C10・B11・C11) に位置しています。SX07とSX11の間に造られています。

遺構

調査では周溝の東側部分を検出することができました。残りの部分は、SX11とSX07に切られていました。墳丘の形はやや不定形の方形で周溝は幅0.7m~1.4m、深さ0.2m程度となっています。遺構の残り具合は非常に悪く、主体部は検出されませんでした。

遺物

周溝の東側から須恵器が割れた状態で出土しました。これらを接合したところ三耳壺(3つの把手をもった壺)と、その蓋になりました。

時期

出土した遺物から5世紀のものと考えられますがSX07に切られていることから、これよりも古いようです。

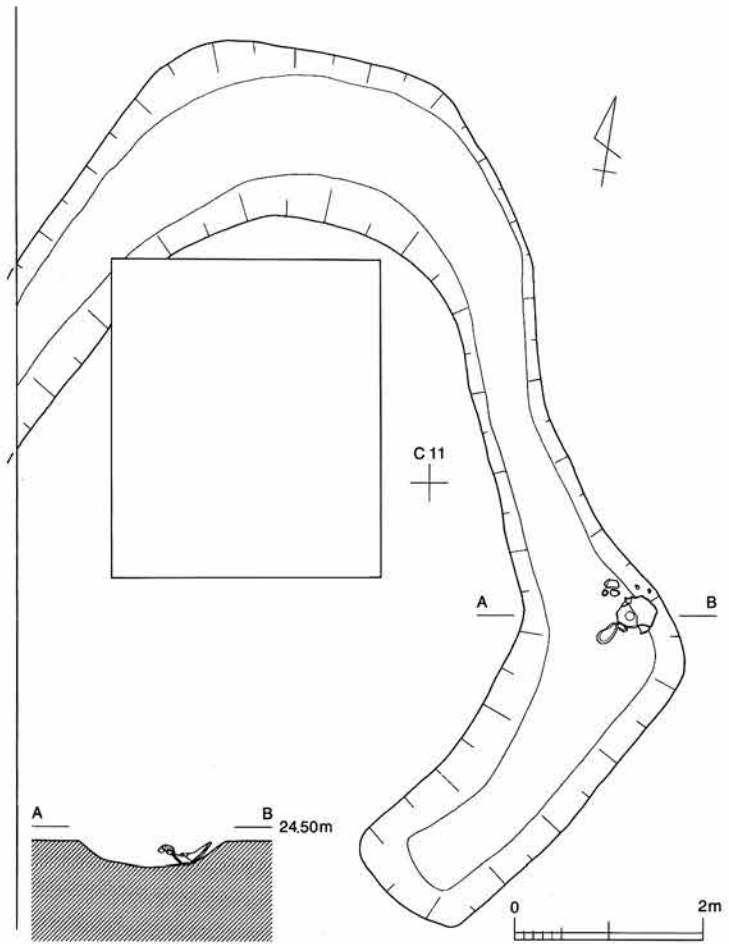


図125 SX14 実測図

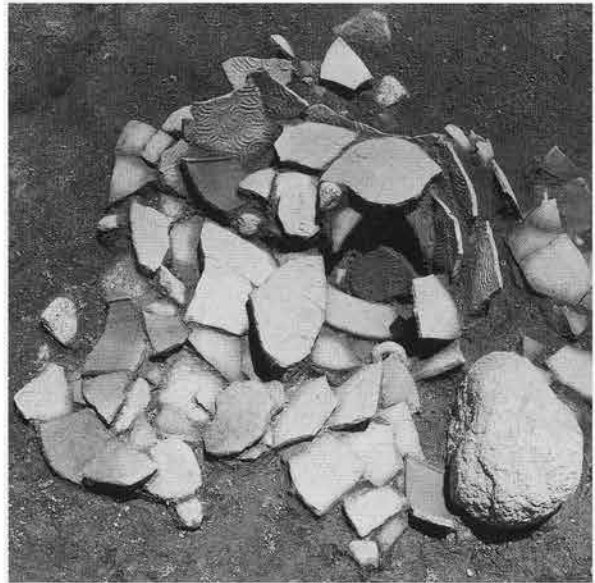


図126 SX14 遺物出土状態

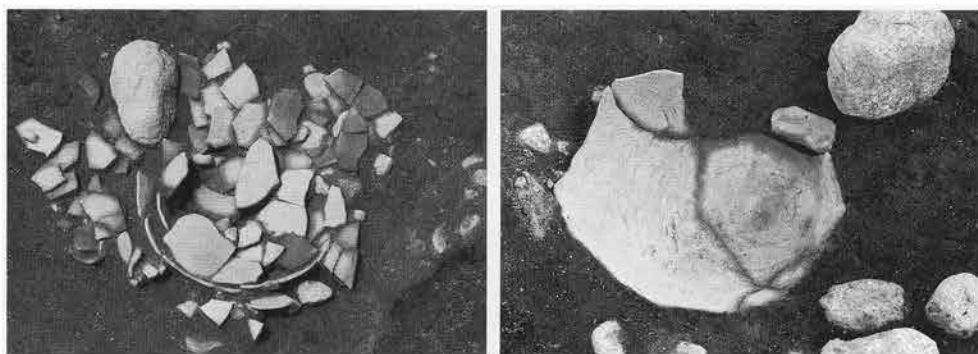


図127 SX14 遺物出土状態

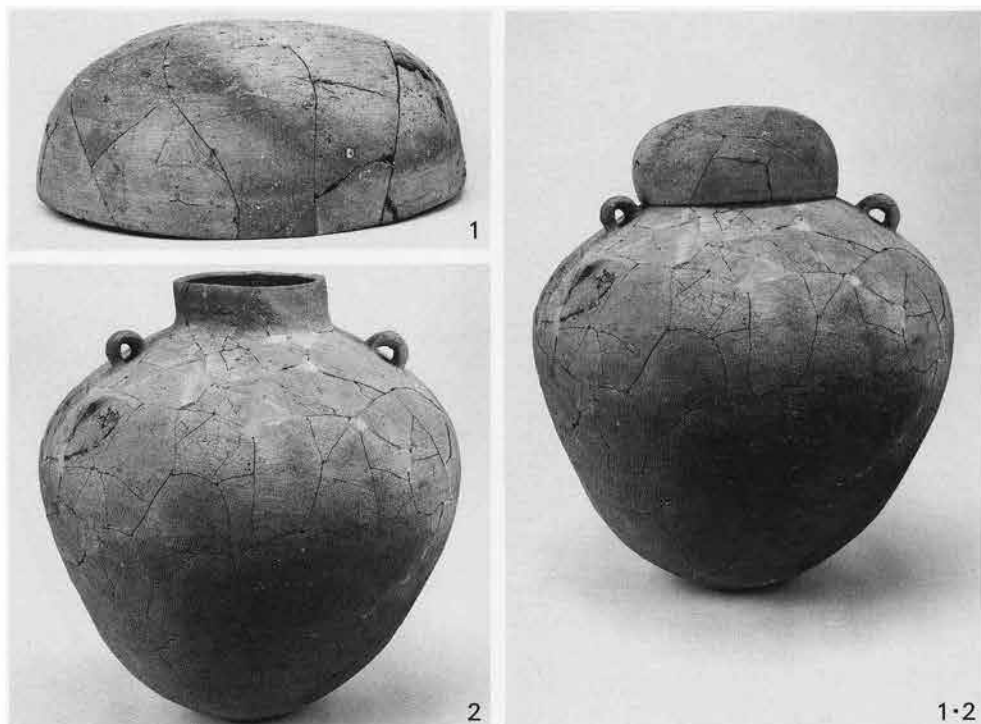


図128 SX14 出土遺物

表9 SX14 出土遺物観察表

No.	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	蓋	26.5	10.8	—	やや扁平、口縁端部は内側に肥厚。天井部と口縁部の界はなし。	天井部外面はロクロによらない不定方向のヘラケズリ。口縁部内・外面はロクロナデ。天井部内面は不定方向のナデ調整。	
2	三耳壺	17.8	56.6	—	短く直立する口頸部をもつ。外面背部の3ヶ所に粘土紐を縦にした耳がつけられる。	同心円叩きを施す。口頸部内・外面はヨコナデ調整	(1)の蓋とセット関係。外面背部と内面底部に灰かぶり。

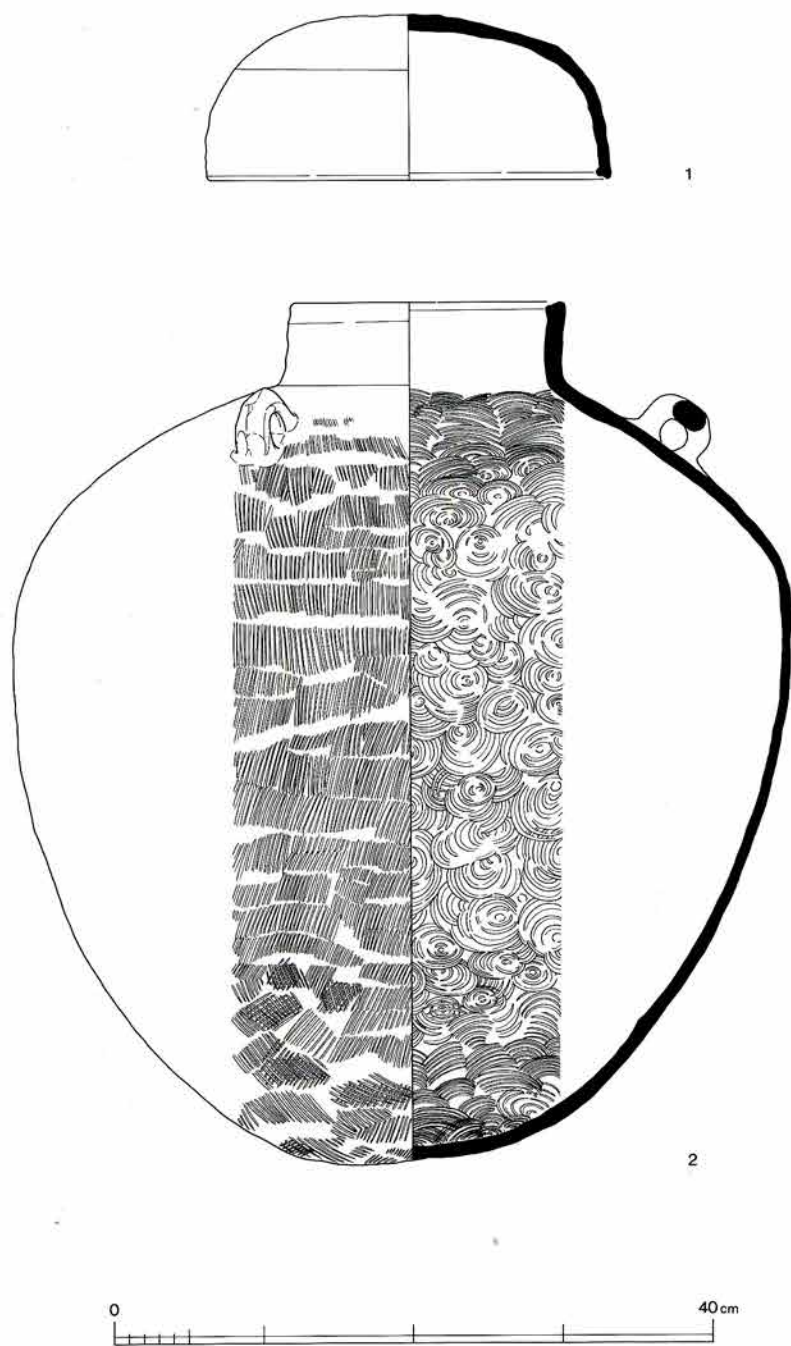


图129 SX 14 出土土器实测图

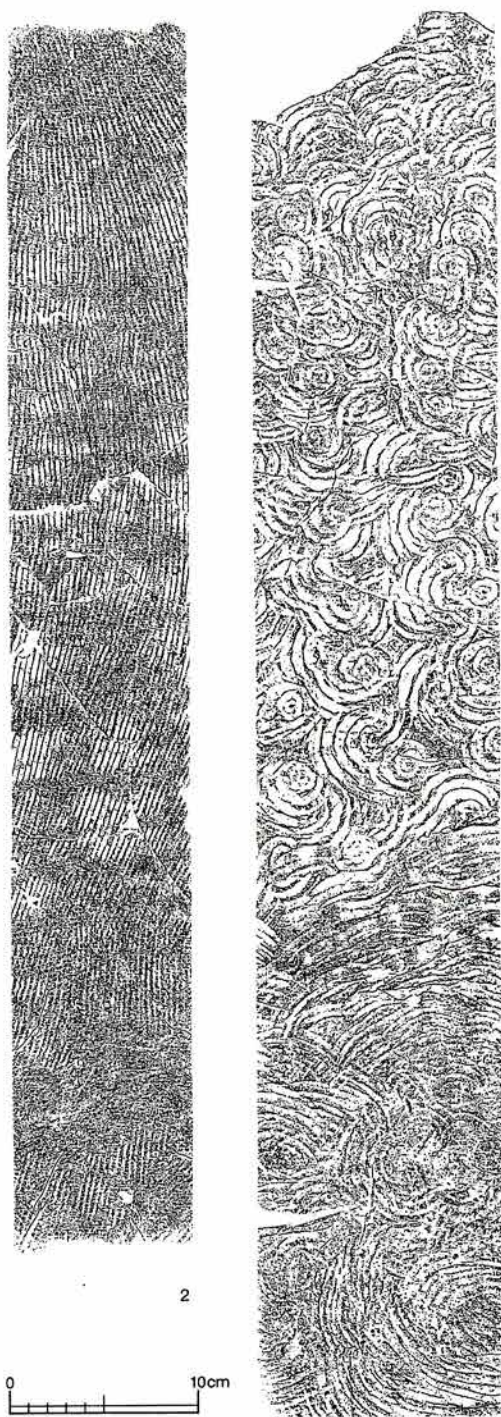


图130 SX14 出土土器拓本

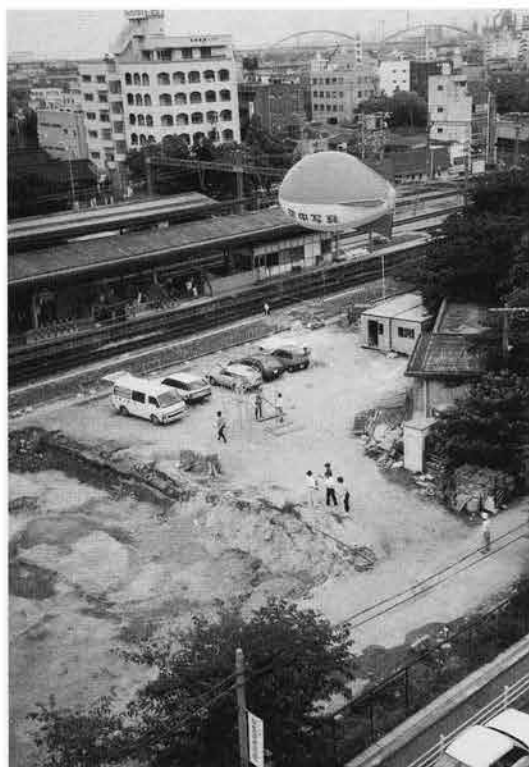


图131 调查风景

3. 建物跡

①SB01

位置 調査区の北東端 (A05・B05) に位置しています。遺構面は、弥生～古墳時代の微高地とその北側の谷部を覆っている層 (約20cm上層) にあります。

遺構 2間×4間の南北棟の掘立柱建物跡です。西側の桁筋の第3柱と南西隅の柱を消失しています。また、東側の桁筋は調査区の東壁にあたるため南東隅の柱を検出したのみで、残りの柱は調査区外に存在しているものと思われます。柱間の間隔は梁行が2.4m、桁行が2m、柱穴の深さは0.15m～0.3mとなっています。

調査区の東端には、同じ時代の地表面でSB01以外に柱穴を検出しています。しかし、これらは建物として復原することはできませんでした。

時期 柱穴からは土師器片が出土しています。細片のため明確な時期は決められませんが、同時代の地表面から出土した遺物から平安時代末～鎌倉時代の時期が与えられます。

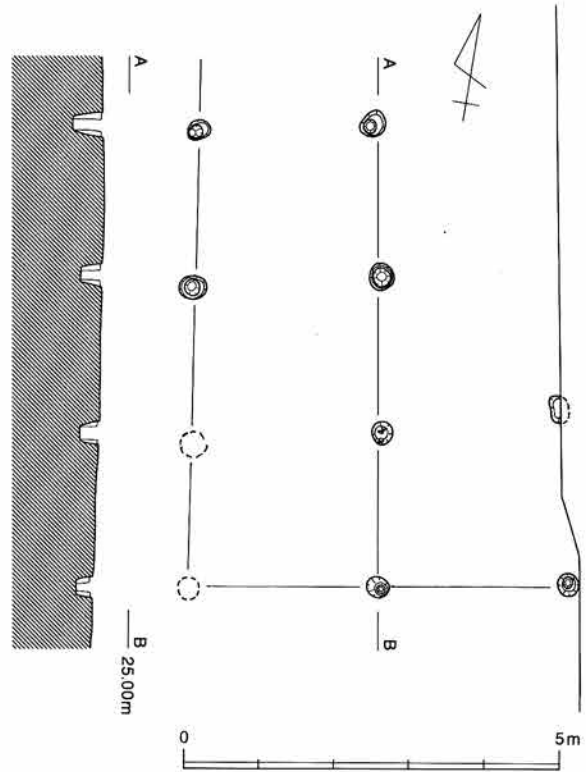


図132 SB01 実測図



図133 SB01

②SB02

位置 調査区の中央やや東側（B08）に位置しています。ちょうどSX05とかさなる位置にあります。SX05より上の層に建てられていたようです。

遺構 1間×2間の掘立柱建物跡です。北東隅の柱と南西隅の柱をそれぞれ消失しています。柱間の間隔は梁行が2.4m、桁行が2.2~2.4m、柱穴の深さは残存している深さで0.2m~0.36mとなっています。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は不明ですが、SB01と同じ地表面に建てられていることから、それとほぼ同時期のものと考えられます。

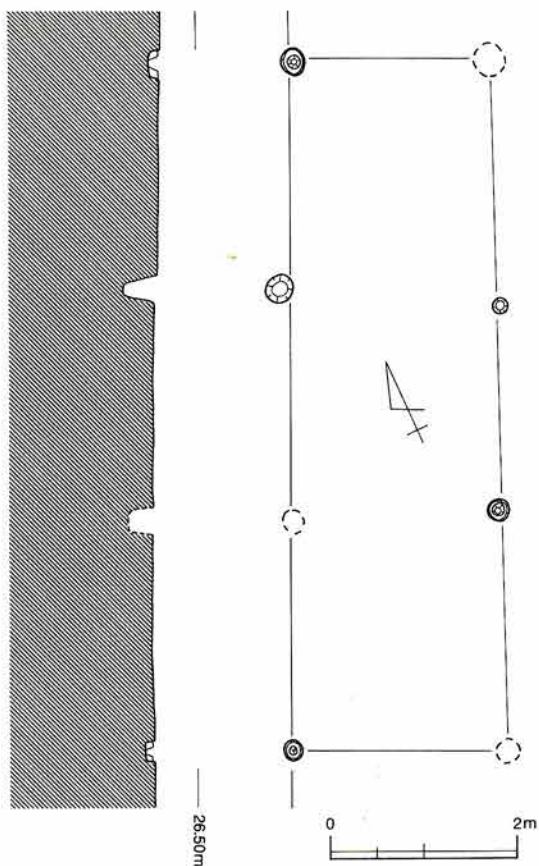


図134 SB02 実測図



図135 調査風景

③SB03

位置 調査区の東側（B06・C06）に位置しており、SX02によって削られています。全体の4分の1程度が残っているものと思われる。北側約9mのところは微高地の端部の肩にあたります。南側の端はわかりませんが、微高地の北寄りに立地しているものと思われる。

遺構 SX02の墳丘下に残存していました。周溝によって切られており、溝外には残存していませんでした。墳丘内の方が高く、溝の外側は低くなっているため残っていませんでした。柱穴・ピットなど深く掘り下げられる遺構の確認を行ったが、溝の肩部も含めて認められませんでした。竪穴住居跡の一部ですが、残存状態は良好とは言えません。壁溝とピット3基だけを調査しています。壁溝は、コーナーを含めた2辺を調査で確認しました。しかし、

ともに古墳の周溝によって削られていることから、長さは不明です。残存長は、東辺が2.3m、北辺が1.5mを測ります。全体の4分の1前後と思われる、4～5m位の規模になろうかと推定されます。壁溝の深さは0.1～0.15mです。ピットは中央のものがやや大きく径0.35mで深さは0.26mを測ります。壁溝のコーナー近くの壁溝に接して築かれたピットは径0.23mで深さは0.11mを、南側のピットは径0.22mで深さは0.14mを測ります。

3基のピットから上屋構造を推定することは困難ですが、古墳周溝の肩部にピットが残っていないことと確認したピットの位置が壁溝に近寄っていることから、4本柱の可能性が高いものと考えています。

遺物 住居跡の床面からは1点も遺物は出土していません。ただ、SX02の墳丘下でSB03の東側から数点の土器が出土しています。遺構に接していないことから、直ちに住居跡の時期とは考えられませんが、甕・高杯の破片が見られます。

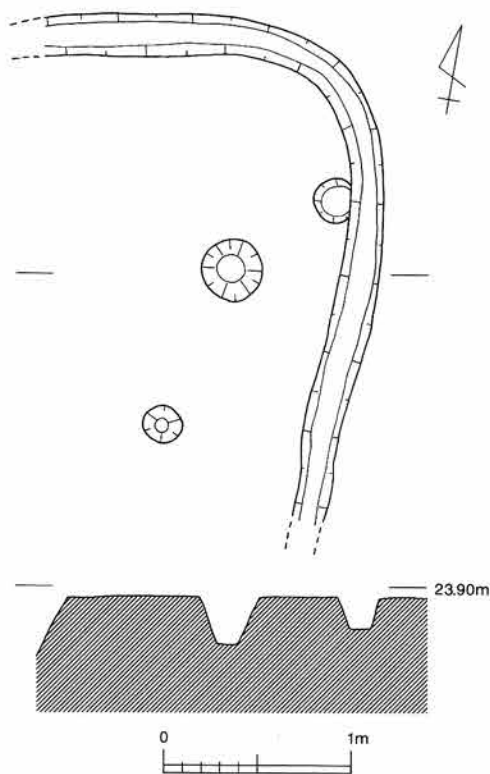


図136 SB03 実測図



図137 現地説明会風景

時 期 古墳の墳丘下に存在していることから、古墳の時期（6世紀初頭）より古いことは確実です。床面出土遺物がないことから時期決定は出来ませんが、遺構面からは土器棺（ST05）の時期と考えられます。布留式古段階（4世紀後半）の住居跡と考えられます。

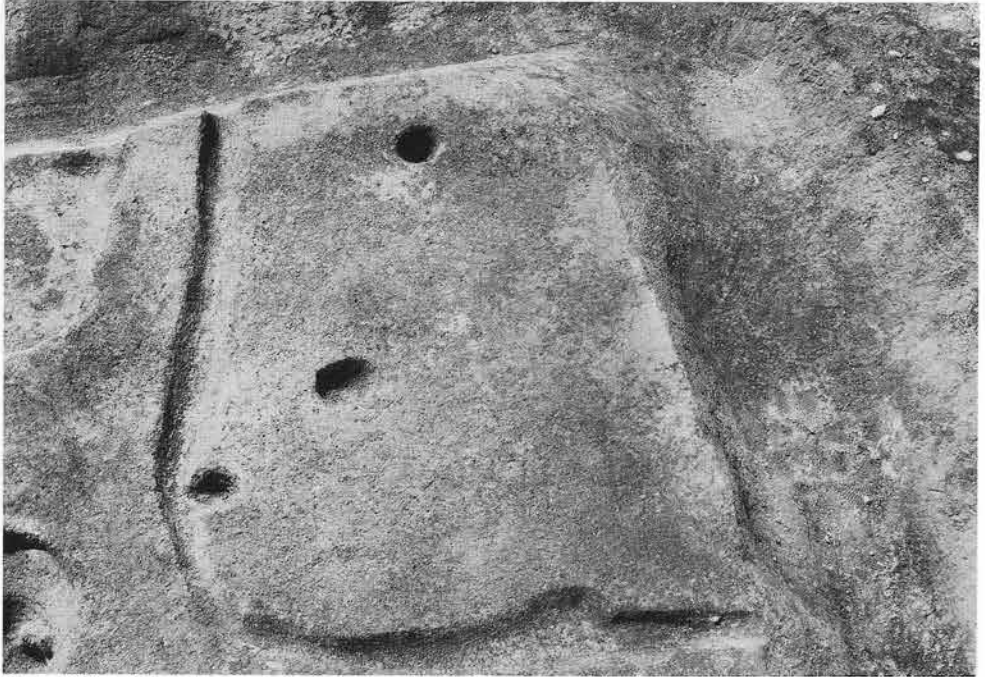


図138 SB03

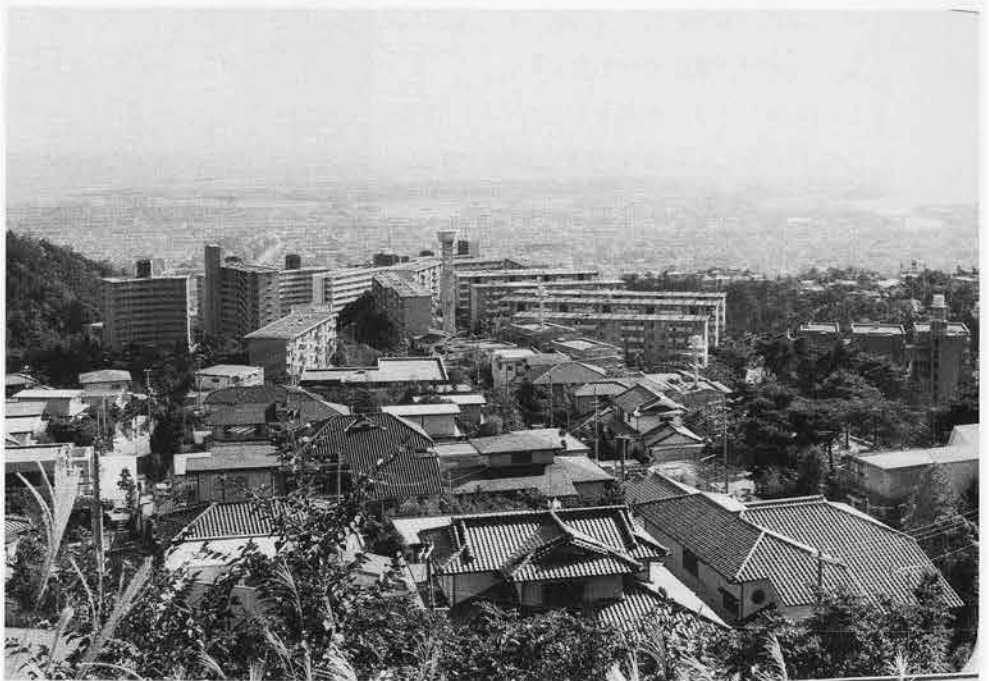


図139 坊ヶ塚遺跡 遠景

4. 墓

①ST01 (石棺墓)

位置 調査区西側のSX09の西側周溝内に存在しています。周溝の西辺と南辺のコーナー部分に位置していたものと思われます。微高地の中央近くに立地しているものと思われます。調査地外の西側で古墳と思われる溝を確認していますが、坊ヶ塚遺跡の西端に位置する古墳に伴う埋葬施設です。周溝の外側の肩部近くに築かれています。

遺構 花崗岩の河原石を使って築かれた石棺です。石棺の西半は弧状を呈しています。蓋石は残っておらず、側壁も2石目までしか残っていません。石棺の内法は、長さ1.6m、幅0.4m、残存高0.3mを測ります。石材は人頭大の河原石が主で、最大の石で長さ0.4mを測ります。河原石を使っていることもあって、安定を図るために、横積みか小口積みで構築されています。さらに安定を図るために、拳大の石も詰め石として使われていますが、量的には少量です。

石棺としては一般的なものですが、特徴は平面形態にあります。東壁は直線ですが、西壁は弧状になっています。SX09の周溝に合致するように弧を描いています。そのため、中央部分が最も幅が広く、南側小口部の幅が0.25mと最も狭い数値となっています。

棺内および墓壙埋土からの出土遺物は、墓壙埋土から弥生土器の小片が2点出土しているだけです。しかし、棺内を精査している段階で、埋葬人骨の痕跡を確認しました。頭骨周辺と大腿骨と思われる痕跡を確認しています。



図140 ST01 検出状況

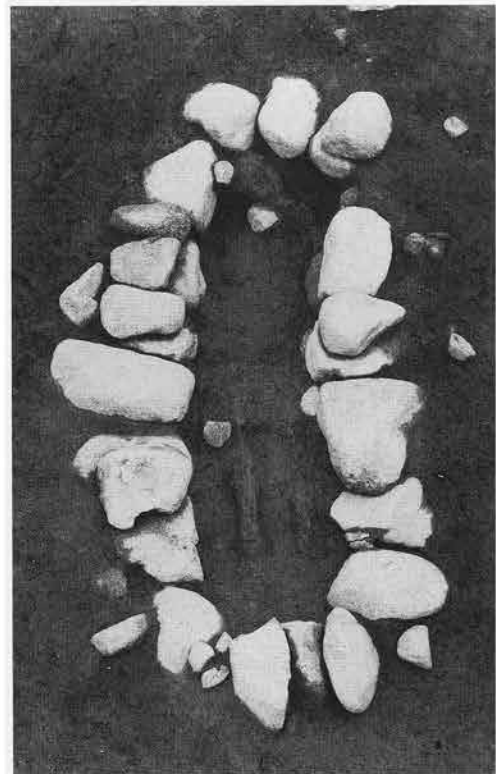


図141 ST01

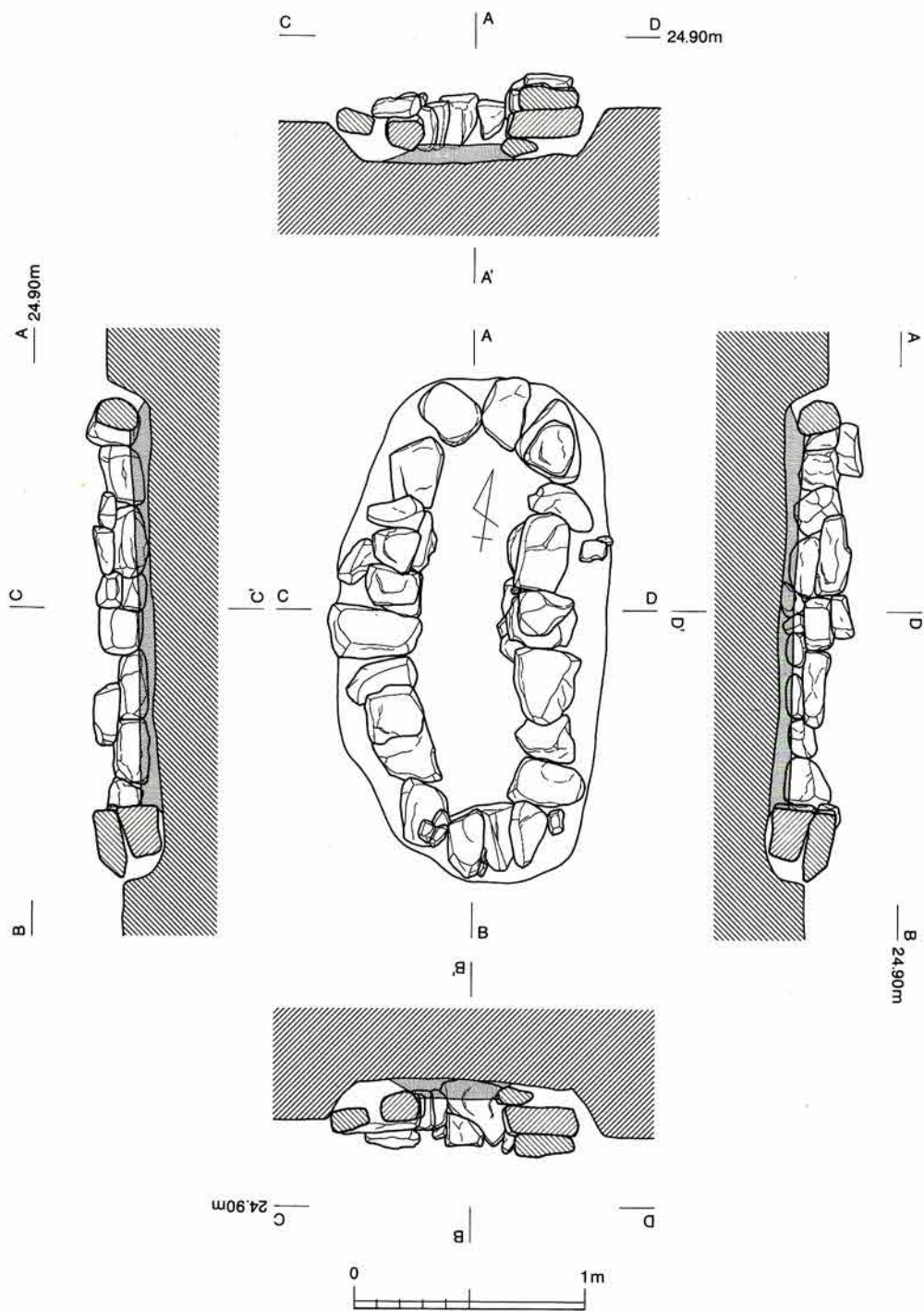


图142 ST 01 实测图

遺物 墓壇埋土から弥生土器の小片を2点採集していますが、前の遺構面の遺物が小片となって混入したと思われる。墓壇肩から南へ約2.8m離れた同一面で土師器小形丸底壺が出土しています。SX09の周溝埋没時に堆積した遺物です。

時期 遺構内から出土遺物がないことから、断定は出来ませんが、土層の堆積状況からSX09に伴う時期の可能性が高いものと考えられます。周溝から6世紀後半の須恵器も出土していることから、同時期かやや遅れた時期（6世紀末）と考えています。



図143 ST01



図144 ST01とSX09

②ST02 (石棺墓)

位置 調査区の中央やや西側 (B10・B11) のSX12の墳丘内東側に存在しています。すぐ北側にはST03 (石蓋土壇) が切り合って築かれています。

遺構 ST01と同じような花崗岩の川原石を使用して築かれた石棺です。蓋石は残っておらず、側壁は2石目までを検出することが出来ました。構築方法は地面に墓壙を掘り、その中に石棺を築いています。石棺はST01とほぼ同じ方法をとっていますが、小口 (短辺壁) の石は1石を立てて築いています。検出した側壁は2石目で高さを揃えてあり、また小口側の1石ともほぼ同じ高さであることから、この上に蓋があったと考えています。側石などの大きな石だけでなく、拳大の詰め石も比較的残っていることから、蓋石ではなく、腐りやすい木の蓋であったことも考えられます。石棺内には東隅に拳大の石が並べて据えてありました。枕にしていたものと思われます。石棺の内法は、長さ0.85m、幅0.3m、残存高0.45mを測ります。石材は最大のもので長さ0.5mを測りますが、概ね0.2~0.4mに収まるものです。石棺の内法から考えて成人を葬ったものとは考え難く、小児用のものと想定できます。

時期 遺構から遺物が出土していないため断定は出来ませんが、SX12に伴う時期の可能性が高いと考えられます。SX12の時期が6世紀後半であることから、ほぼ同じ時期と考えています。



図145 ST02



図146 ST02



図147 ST02とST03

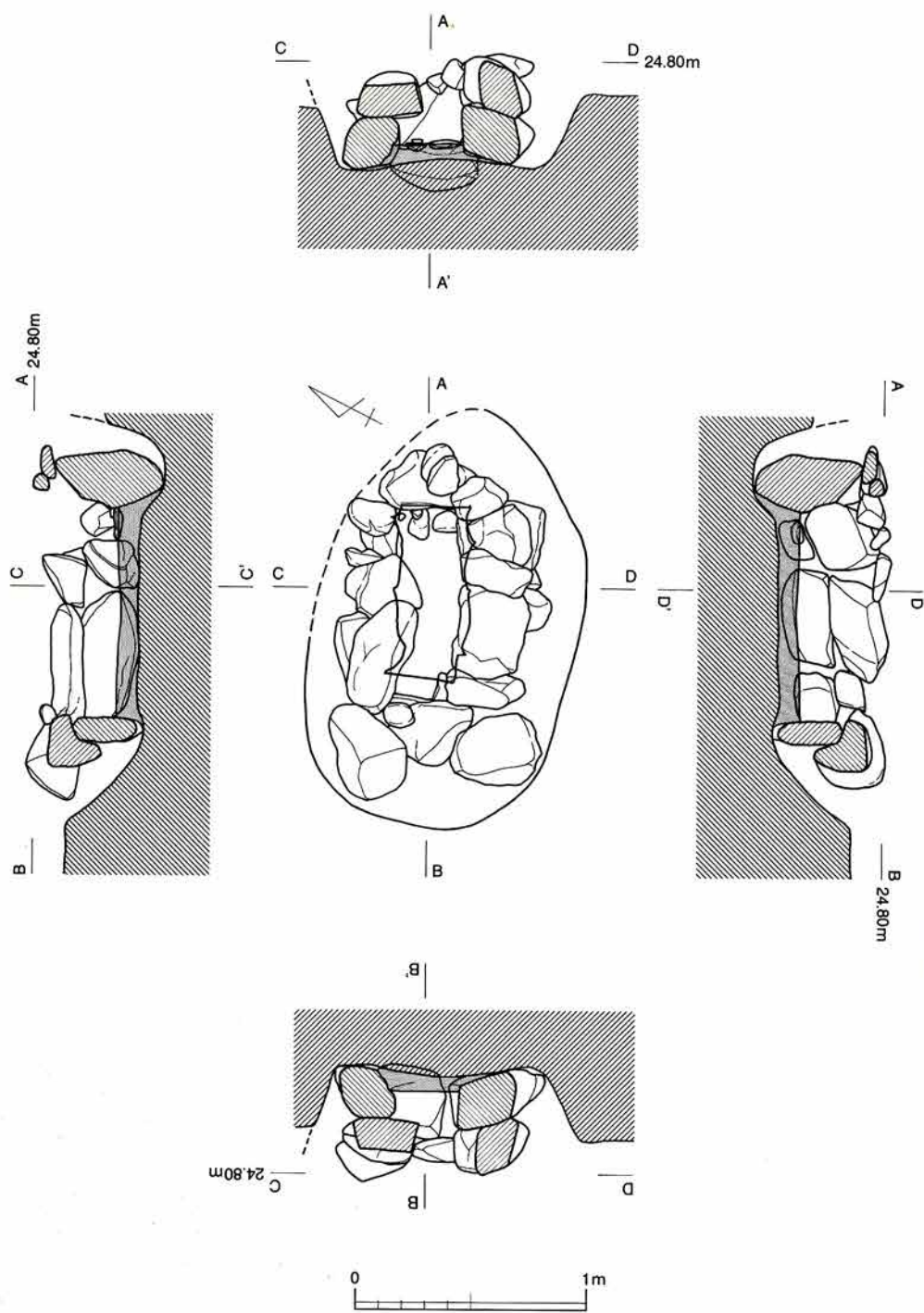


图148 ST 02 实测图

③ST03 (石蓋土壙)

位置

ST02のすぐ北側に築かれていますがST02によって切られています。

遺構

土壙墓の上に、花崗岩の川原石を蓋として使用しています。構築方法は地面に墓壙を掘りさらに遺体を入れる。土壙の部分を掘り下げて、その上に石で蓋をしています。蓋石は横長でやや偏平なものを合計8枚横にならべて置き、それぞれの石の隙間には、拳程度の石を詰め石として置いています。蓋石の大きさは、長さ0.4~0.6m、幅0.2~0.3mのものを使用しています。遺体を入れる土壙の部分は、長さ1.4m、幅0.45m、深さ0.2mで、土壙

の東側部分で埋葬人骨の頭骨部分を、西側部分で足の部分と思われる骨を検出しました。

時期

遺物が出土していないために、これも断定できませんが、ST02によって切られていることから、それよりやや古い時期か、ほぼ同時期であると考えています。

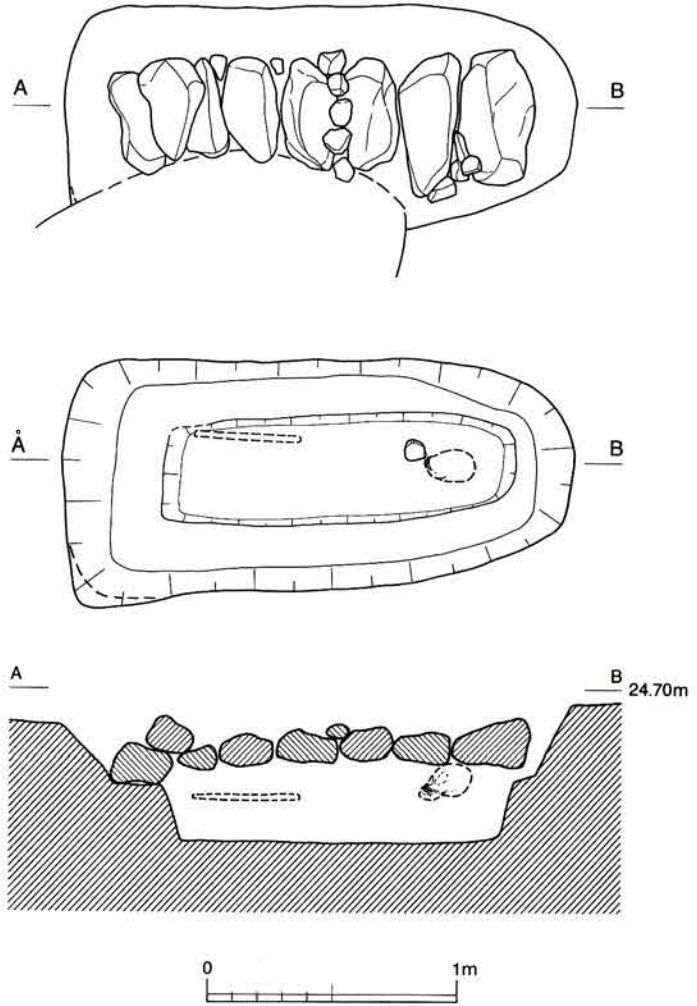


図149 ST03 実測図



図150 ST03

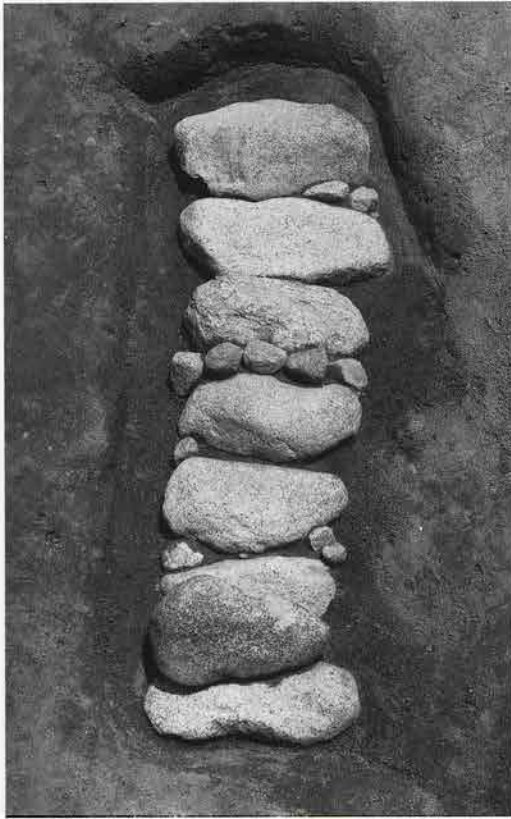


図151 ST03 蓋の状況



図152 ST03 墓壇検出状況



図153 ST03 骨遺存状況

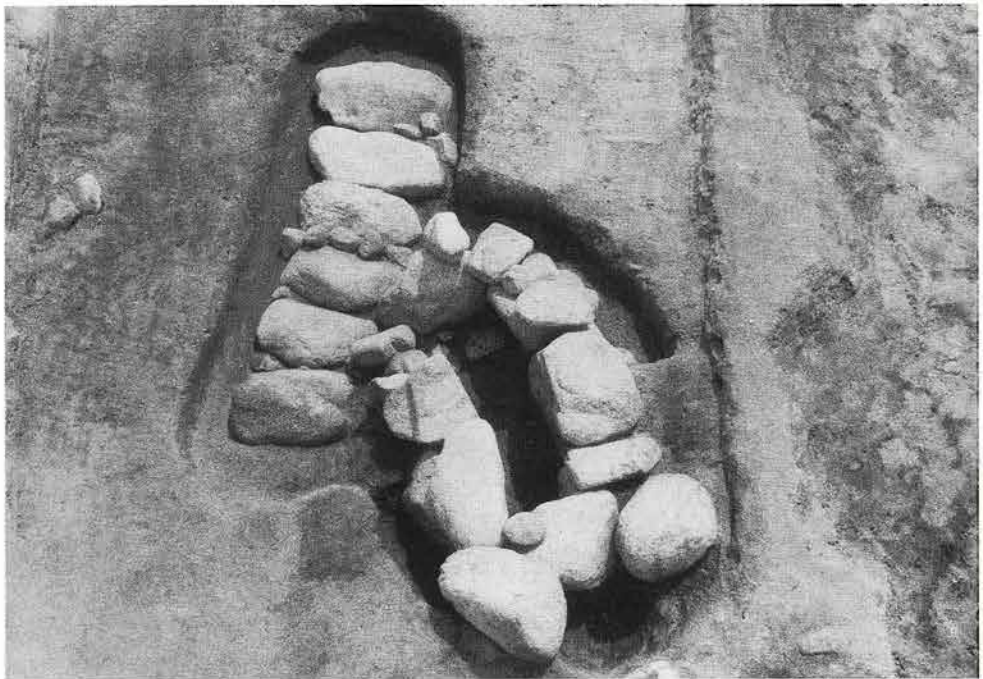


図154 ST03・ST02

④ST04 (木棺墓)

位置 調査区の南端 (C08・D08) の SX04の南西、SX06の東側に存在しています。

遺構 長方形の平面プランをしています。長辺2m、短辺1.25m、を検出しましたが、深さは約5cm程度しかありませんでした。主軸は北東-南西のN22°Eです。遺構の形状からおそらく木棺墓であると思われますが、木棺の痕跡は残っていませんでした。

時期 出土遺物がないため断定出来ません。SX04、SX06と同じ遺構面で検出しているため、おおまかに弥生時代末~古墳時代の時期が与えられます。

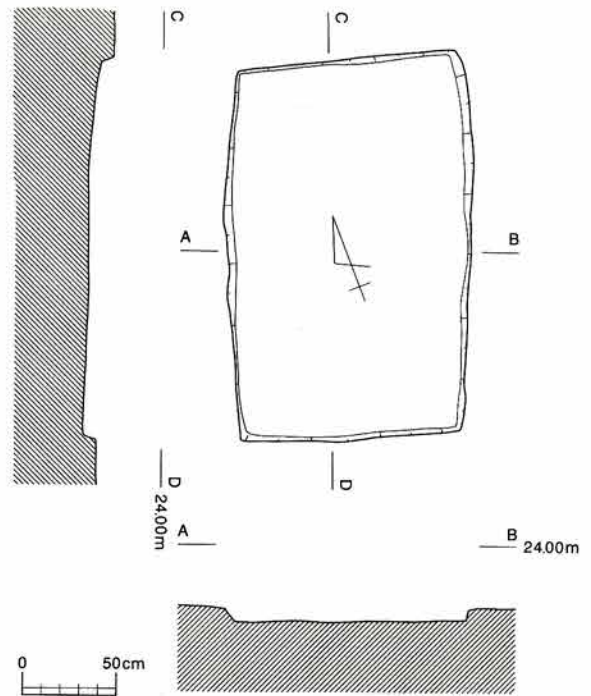


図155 ST04 実測図

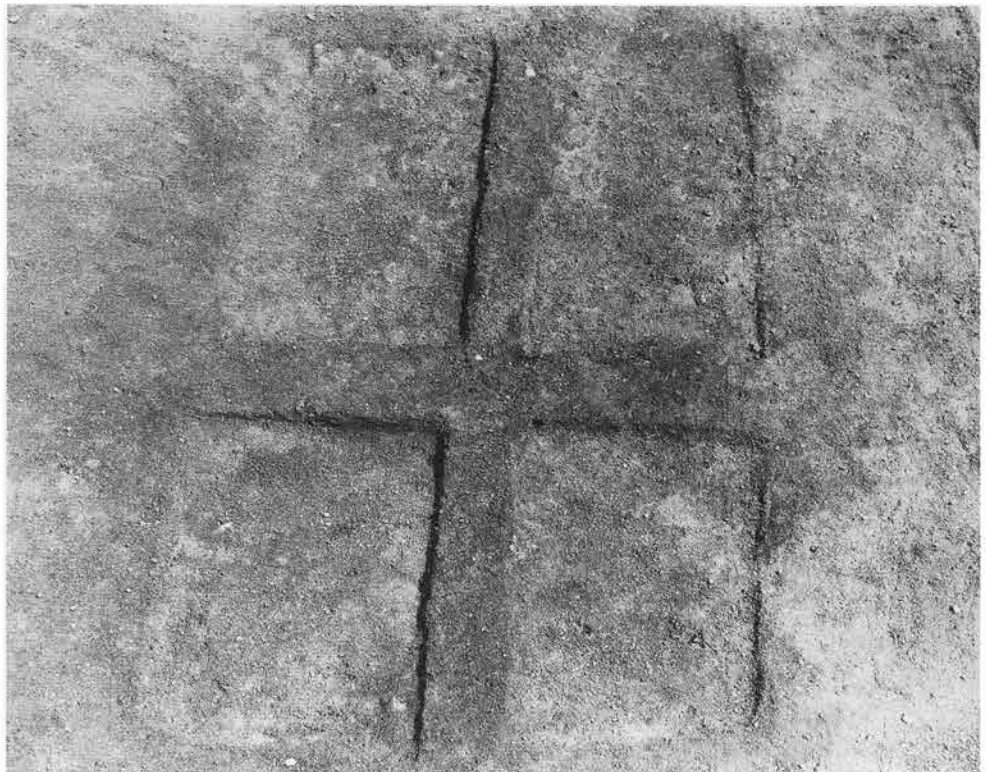


図156 ST04

⑤ST05 (土器棺墓)

位置 調査区東側に近い6トレンチ(試掘溝)によって確認した遺構です。B10に位置し、北側の谷部の肩から1.5m南に存在します。南側にはほぼ接してST06が築かれています。南東約12m離れた竪穴住居跡(SB03)と同時期と考えられる遺構で、住居と墓が隣接した例の1つです。

遺構 機械掘削によって、墓壙の西半を欠失していますが、全体の規模は想定出来ます。上部の径70cm、下部の径20cm、深さ25cmの摺鉢状の墓壙の中央北寄りに棺を据えています。墓壙の肩の形状は北半が垂直に近い急斜面で南半は緩やかになっています。棺は身と蓋の2個体でなっています。ともに口縁部・頸部・胴部上半を割って使っていません。胴部下半を使用しています。棺身の方が胴部最大腹径上部までの大きな個体を使い、棺蓋は胴部最大腹径下部までの残存部分の少ない個体を使っています。ともに意図的に上半を欠いたものと思われます。棺は、垂直に立てるのではなく、南に約30°傾けて置いています。当然、蓋もそれに準じていますが、角度はやや緩やかで水平に近くなっています。明らかな墓壙は前記の規模ですが、盛土はさらに広がっています。

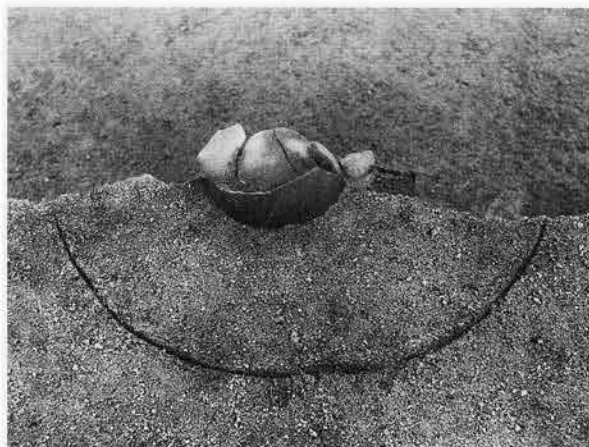


図157 ST05



図158 ST05



図159 ST05 墓壙

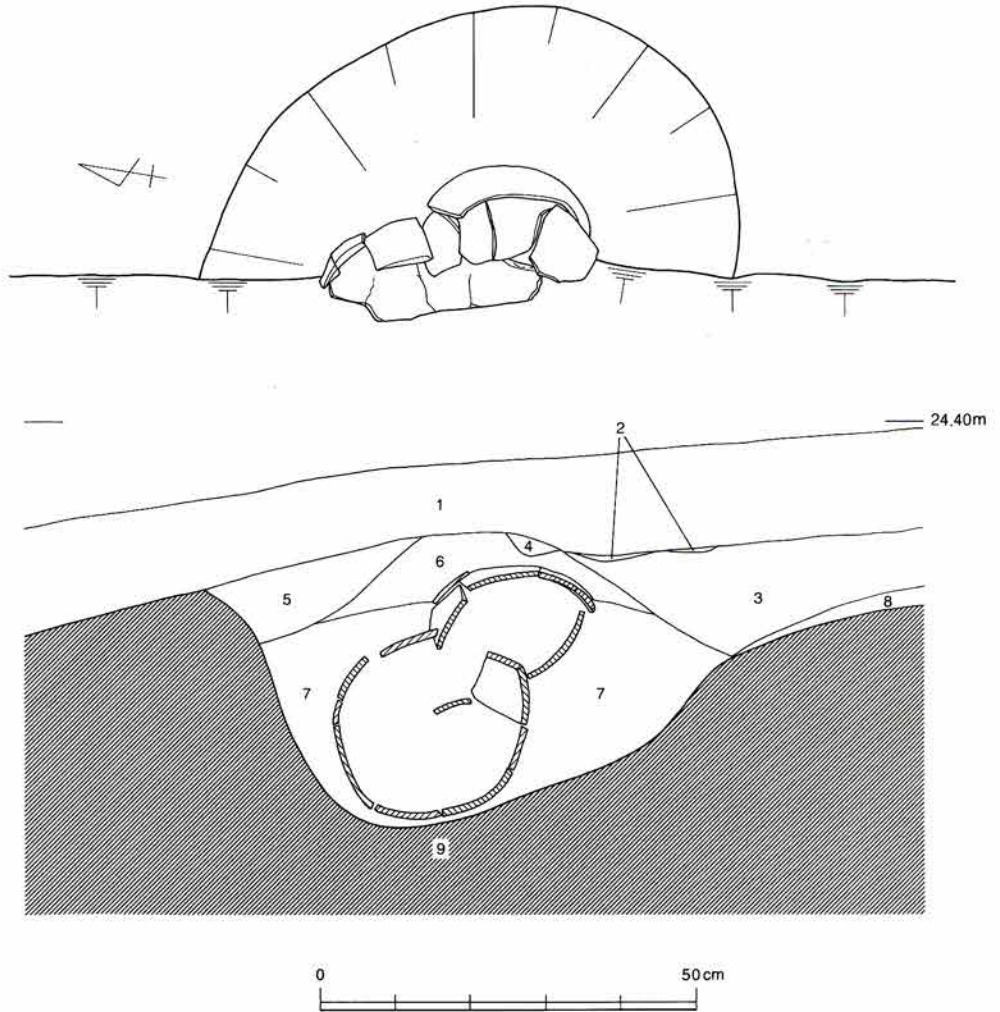
遺構面が砂をベースとしていることから肩部が崩壊し易かったものと思われ、そのため棺蓋の上の盛土が高く盛り上がった状態になっています。その高さを測ると、38cmになりま

す。遺構面が砂層ということで、正確な規模の測定は困難ですが、明らかに計測出来る数値は墓墳の数値です。遺構築成時の表土であったであろう灰褐色中砂を切って墓墳を掘り下げていることから、遺構の規模はこの部分と考えられます。

遺物 棺内を精査しましたが、副葬品は見られませんでした。棺として利用された2個体の土師器のみが、出土遺物として挙げられます。



図160 ST 05 堆積状況



- | | | |
|------------|-----------------|----------------------------|
| 1. 黒褐色砂質土 | 2. 黄色砂 | 3. 黒褐色砂質土 |
| 4. 暗黒褐色砂質土 | 5. 灰褐色砂質土(小礫含む) | 6. 灰褐色砂質土(5層より淡い、固くしまっている) |
| 7. 淡灰色砂質土 | 8. 灰褐色砂 | 9. 黄灰色砂 |

図161 ST 05 実測図

ともに中型の土器の底部です。棺身の土器（2）は残存高14.2cmの丸底の土器で、最大腹径21.2cmを測ります。色調は茶褐色～薄茶色を呈しており、チャート・長石などの砂粒を含みます。内面はユビで成形したのちへラケズリで器壁を薄くしていますが、あまり丁寧ではありません。指圧痕が顕著に見られます。外面は7本/cmのハケ整形ののち、10～12本/cmの細かいハケで仕上げています。内面には、粘土紐の継ぎ目や土器の上部を打ち欠いた痕跡が見られます。

時期 土器棺の土器から見て、庄内式新段階併行期から布留式古段階併行期と考えています。古墳時代はじめの4世紀後半の土器棺です。

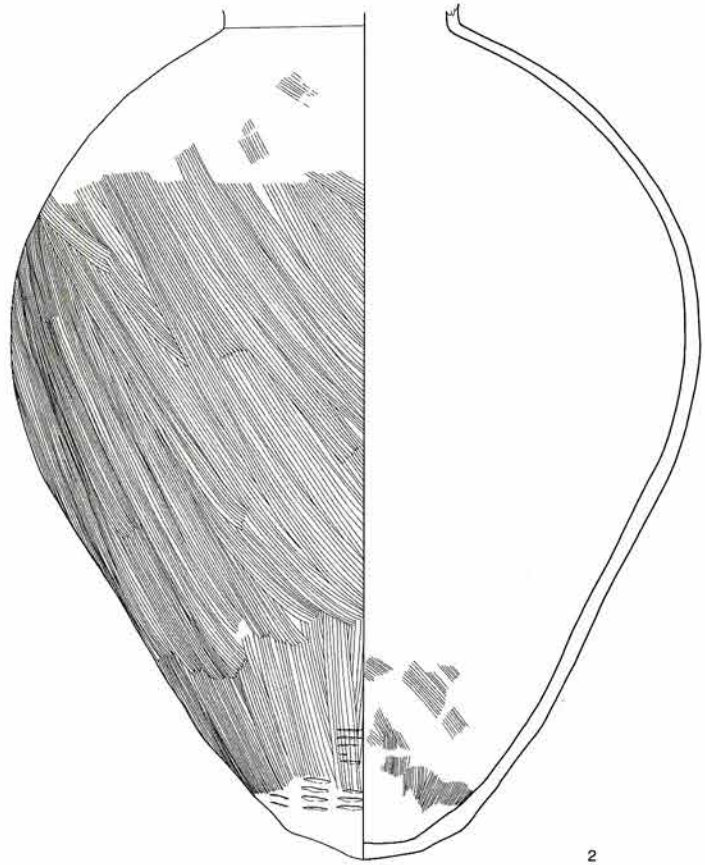
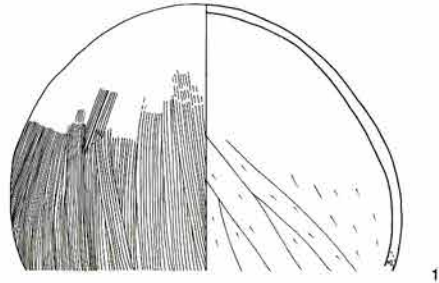


図162 ST05 出土土器実測図

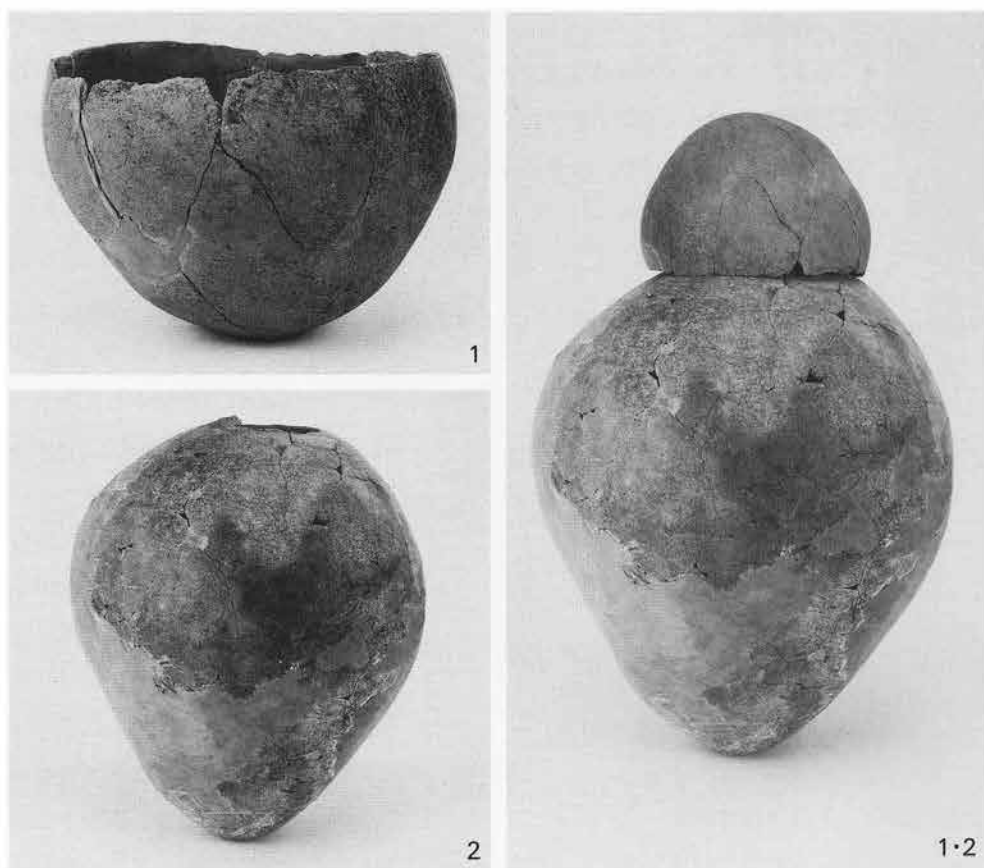


図163 ST05 出土土器

⑥ST06 (土墳墓)

位置 調査区中央の東寄りで確認された遺構で、ST05が北側に50cm離れて築かれています。谷部の肩から200cm離れていることとなります。

遺構 ST05 (土器棺墓) と同一面で近接して築かれた土墳です。楕円形の平面プランをしており、長径120cm、短径60cm、深さ22cmを測ります。北側の方が急傾斜で、南側は緩やかになっています。遺構は土墳であるが、土器棺墓に隣接していることから、墓の可能性が考えられる遺構です。

時期 出土遺物はありますが、遺構面がST05 (土器棺墓) と同じことから、同じ時期と考えられます。

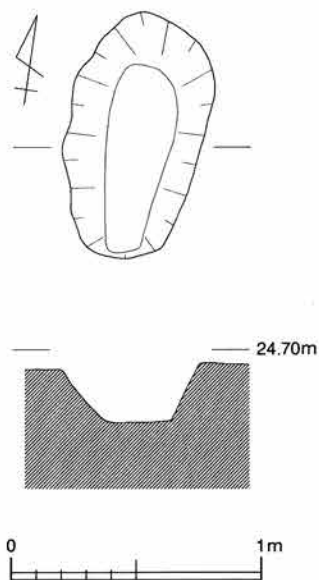


図164 ST06 実測図

5. 水田跡

第4～5トレンチ間の北側で古墳時代後期以降の水田跡（上層水田）を検出したほか、弥生時代の方形周溝墓が築かれていた地表面より下にある、より古い地表面を調査してみたところ、水田跡（中・下層水田）が検出されました。畦畔（あぜ）で区切られた、小区画の不定形の水田であったことが分かりました。

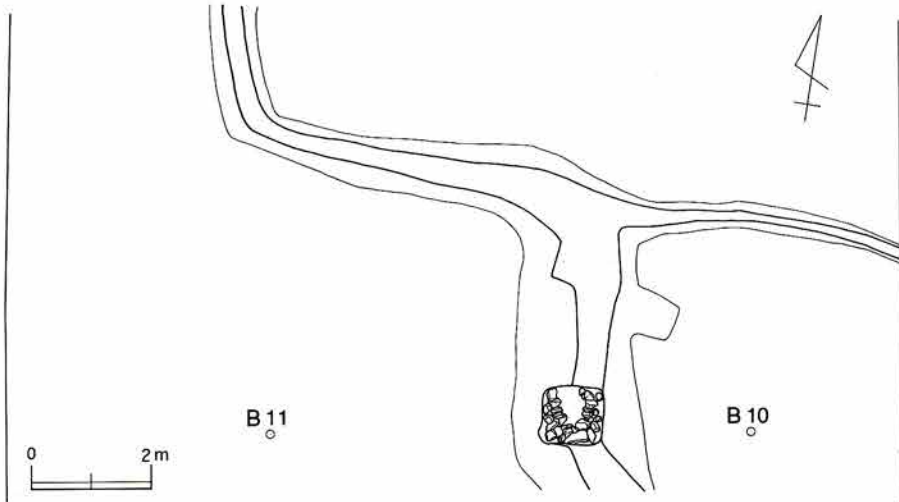


図165 上層水田 実測図

上層水田 上層水田は第4～5トレンチ間で検出しました。北側の谷状部と土石流による微高地との境に北から南へ、そして東西に伸びる幅0.4m～1mの畦畔（あぜ）と、さらに南下する大畦畔（幅2m～2.2m）を検出しました。調査した面積が狭いため、水田の1筆（1枚）ごとの面積は不明ですが、比較的大きな水田であったと考えられます。時期は古墳時代後期以降と考えています。



図166 上層水田 実測図

中層水田 中層水田は第3～4トレンチ間と第6～7トレンチ間で検出しました。第6～7トレンチ間では南北方向の大畦畔と、それから派生する小畦畔をを検出しました。水田の形態はいわゆる不定形小区画水田で3～4トレンチ間で、検出されたものは水田1筆あたり4.1㎡～9.6㎡と非常に小さなものでした。このような水田が作られた理由として、調査区の地表面の比高差が16mで約50cmと大きいことが挙げられます。平坦な地形では、1筆の面積は広く取ることができますが、このような水田に利用するには比較的急な地形では、狭い範囲を畦畔で囲まないと水を確保することができなかつたようです。この遺構面の畦畔上で人の足跡を検出しています。中層水田の時期は、方形周溝墓よりも下の地表面で検出されたことから、弥生時代後期以前のものです。

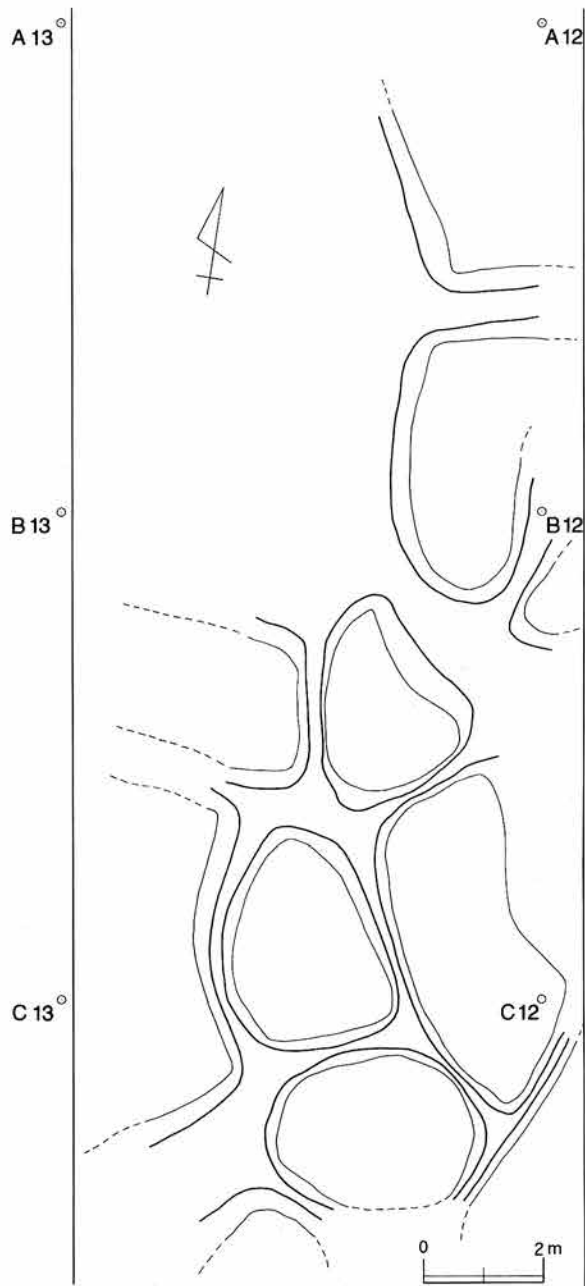


図167 中層水田 実測図

下層水田 下層水田は第6～7トレンチ間で検出しました。北側の東西方向の大畦畔と、南西部で不定形の小区画水田を検出しています。

検出した水田は、調査した箇所以外にも当然広がっていたものと思われます。調査した箇所は平面的に検出可能な地点を重点的に行いました。

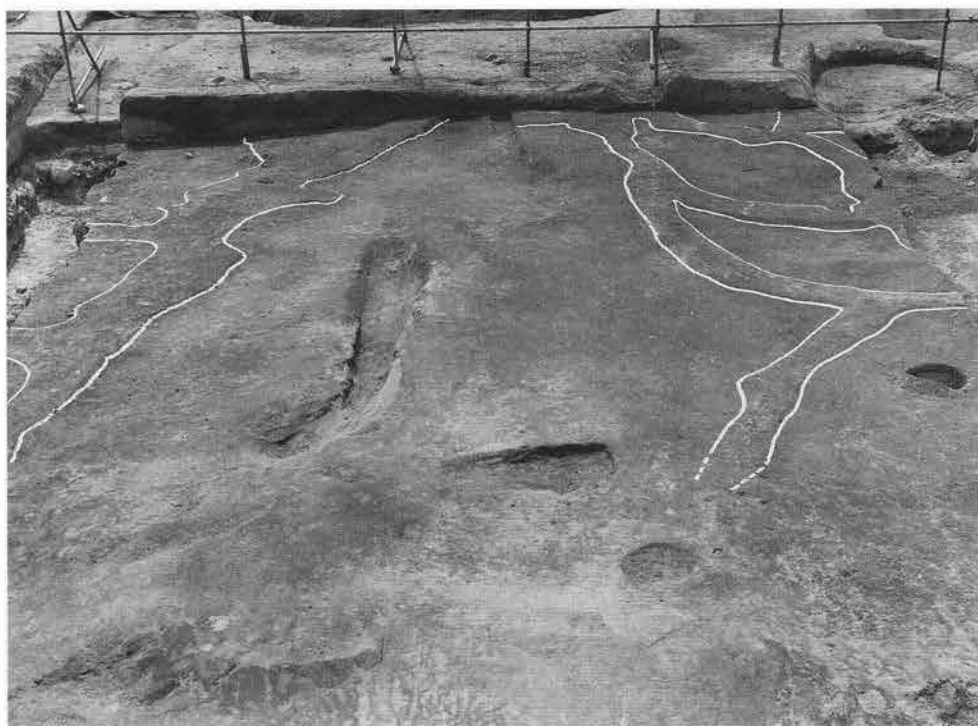


图168 上層水田



图169 中層水田 足跡

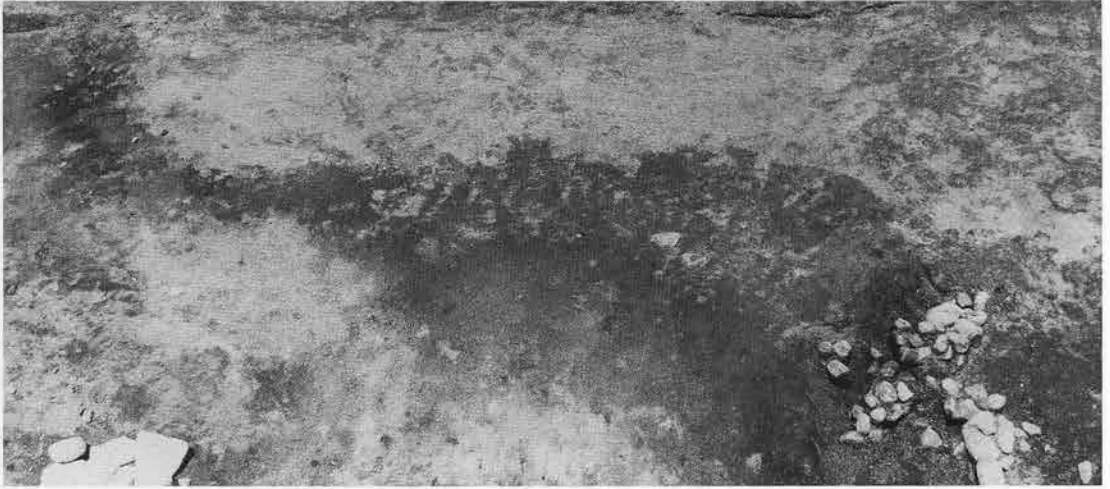


图170 上層水田 大哇畔



图171 集水施設

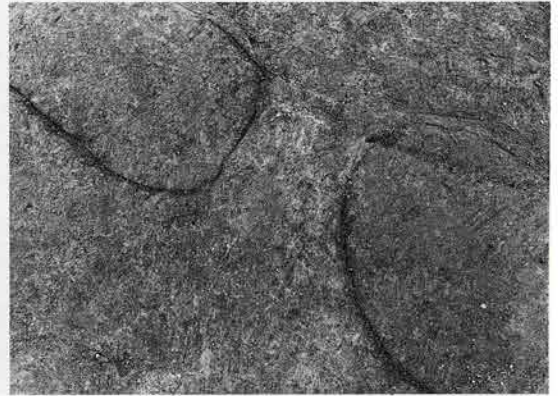


图172 中層水田 水口



图173 中層水田

6. その他の遺構

①地震に伴う遺構（痕跡）

確認調査の第4トレンチの東壁で右の写真のような地層のずれが確認されました。断層は、平安時代末～鎌倉時代の堆積層から始まっており、それより上層の堆積には見られません。調査区の全面的な平面調査を行ったところ、このような地層のずれの痕跡を検出することが出来ました。(図174)



図174 地震による断層

これらの地層のずれは3～4トレンチ間で北東-南西方向に数本みられる他はほぼ東西方向に走っています。深さは70cmに及ぶものもあります。これらは、正断層あるいは地割れと考えられ、おそらく地震等による地面の振動によってできたものであると考えています。



図175 地震による噴砂

この原因となった地震等が起こった時期については、平安時代末～鎌倉時代の遺構であるSK01より上の地層から切り込んでいることから、この時期より後から起こったことが明らかです。



図176 地震による噴砂の分布

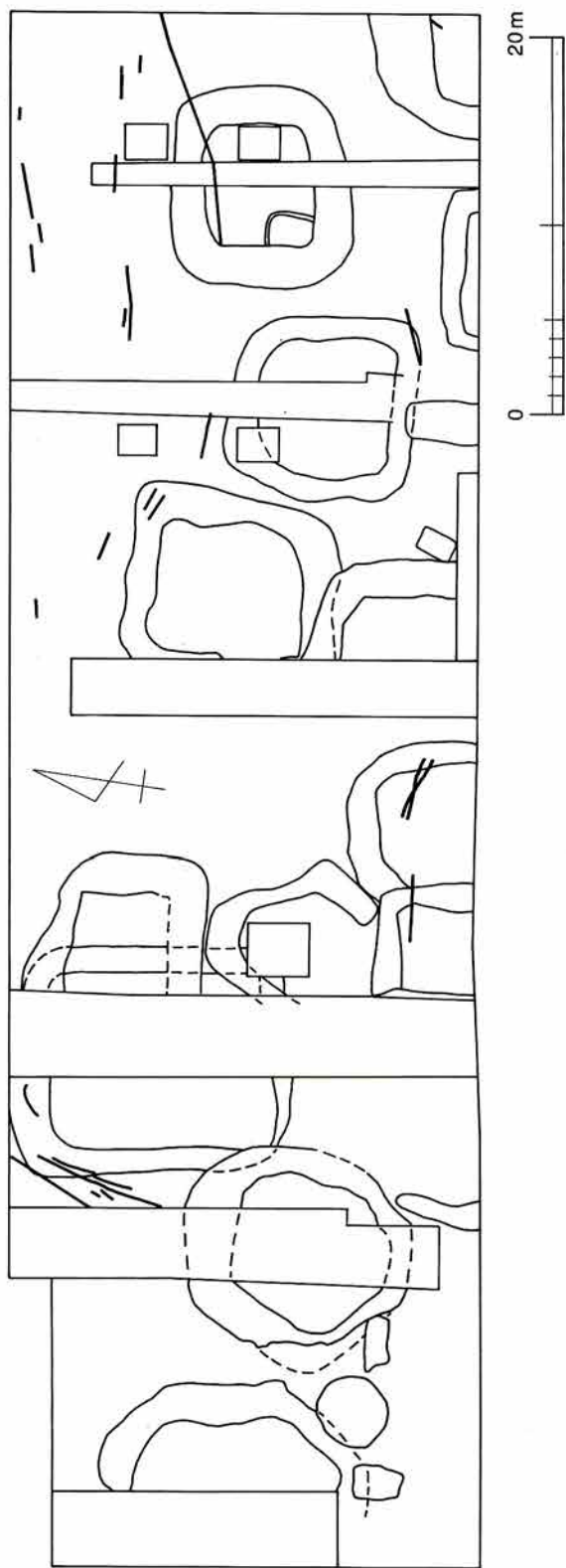


图177 地震の痕跡(地割れ)分布図

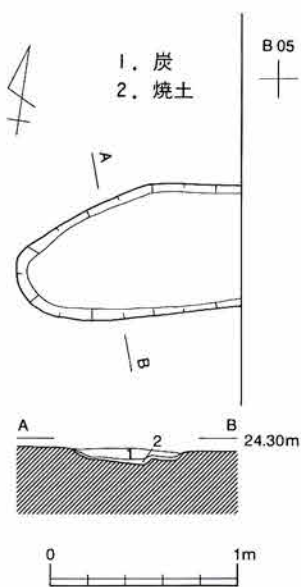


図178 SK01

②SK01

位置 調査区の北東隅に位置しています。東壁沿いで検出しており、調査対象地外へ延びています。前項の地震の痕跡が顕著な遺構で、地震の痕跡を考える端緒となった遺構です。この時期は谷部が埋まり、

その上に建物跡が築かれますが、本来、谷となる肩部付近に位置しています。

遺構 土壌内に炭・焼土が充満した土壙（焼土壙）です。不定形を呈しています。東西に長い土壙で、東西の検出した長さは120cm、南北の長さは70cmを測ります。深さは、浅いところで4cm、深いところで9cmを測ります。

時期 土壙内からの出土遺物はありませんが、土壙直上から土器が出土しています。また、遺構面の時期が平安時代末～鎌倉時代の時期が与えられることから、この時期と考えられます。SB01と同一面で空間を共用していますが、遺構の先後関係はわかりません。ほぼ同時期ですが、前後関係があるのでしょうか。

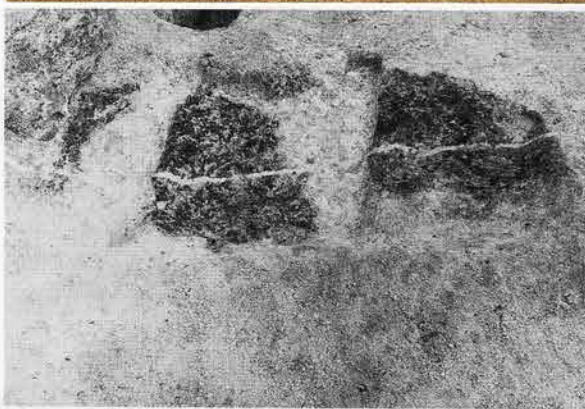
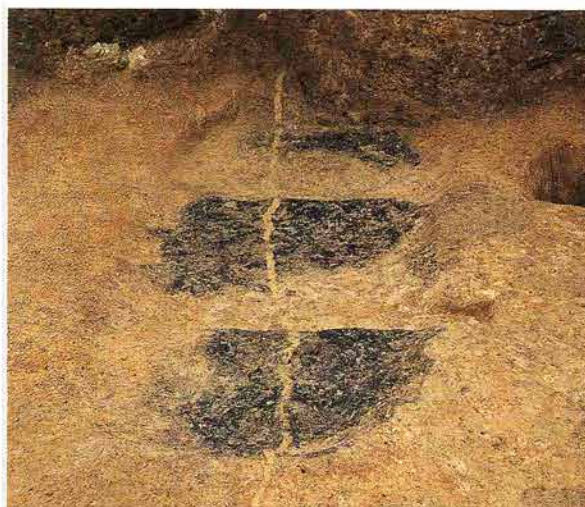


図179 SK01

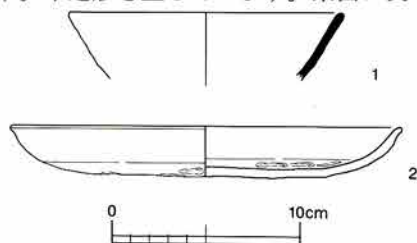


図180 SK01 出土土器



図181 SK01 出土土器

③SK02

位置 調査区東寄りのB06に位置しています。確認調査の第6・7トレンチの中央で、SX02の北西部に存在します。北側には約60cmで谷部となる肩があります。

遺構 長楕円形の平面プランをしています。主軸は北東-南西のN24°Eです。長径203cm、短径97cm、深さ11cmを測ります。遺構は古墳の築造面の下層で確認しています。ST05（土器棺墓）・ST06（土壙墓）・SB03（竪穴住居跡）と同一面に営まれています。

時期 出土遺物はありませんが、ST05と同一面であることから、古墳時代前期の遺構と考えられます。また、遺構の性格は断定できませんが、土壙墓の可能性が考えられます。

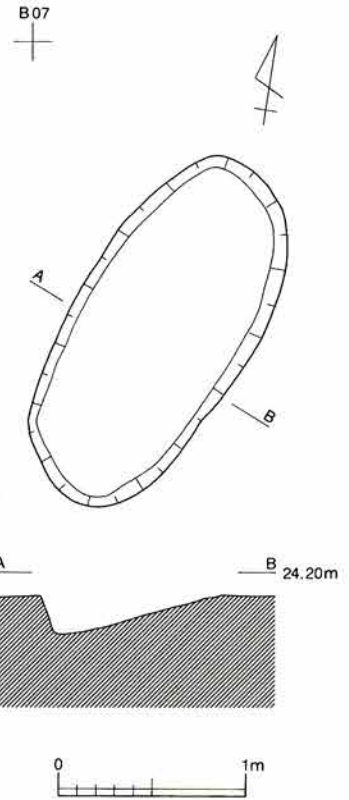


図182 SK02



図183 調査風景

④SK03

位置 C10の調査区西半に位置しています。谷の付け根部分に近い微高地上に立地しています。SX12の周溝内に存在します。SK03が築かれていますのは、弥生時代の水田の大畦畔の上です。

遺構 方形の石組を上面に配置する土壇です。南北100cm、東西90cmの方形に花崗岩の角礫を組んでいます。最も大きな石で40cmを測ります。20~30cmの石材が主体となっており、間には10cm未満の礫も見られます。小礫は円礫が多いようです。石は部分的に2段になっているところもあります。石組の下に100cm四方の方形の土壇が掘られています。深さは35~40cmで、底は平坦でなく、中央が深く周辺が浅くなっています。埋土は、灰褐色の中砂・シルトです。

時期 出土遺物は、やはりありません。堆積土が新しい様相を持つ土であることから、弥生時代の水田に伴うものとは思われません。中世の遺構面の埋土よりも新しい埋土と思われます。時期を限定出来ず、中近世と幅を持たせた方形石組を有する土壇と考えられます。遺構の性格は、墓の可能性も十分に考えられます。

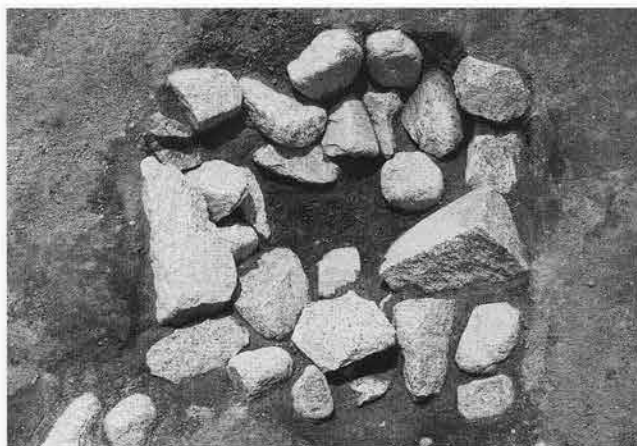


図184 SK03

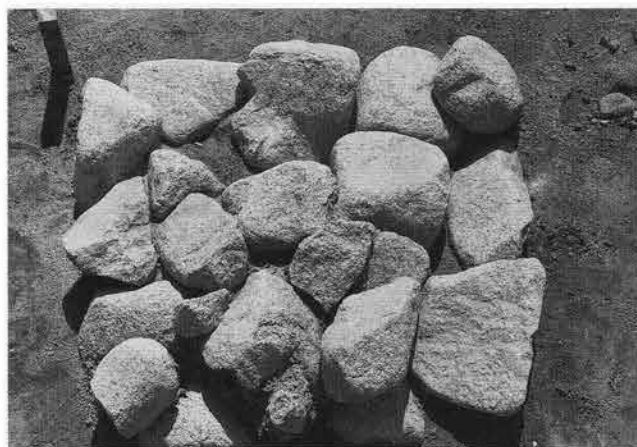


図185 SK03

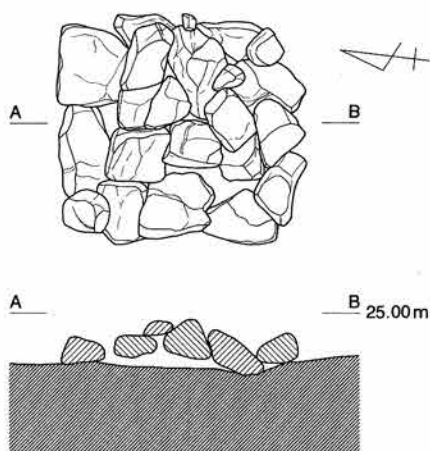


図186 SK03

⑤その他の遺構

遺構ではありませんが、調査区域の北側中央付近から東端まで、谷地形を確認しています。現状で深さ1mを超えるものです。谷の底は比較的平坦です。

A B06~08の古墳時代前期の面で、小さな土壇やピットを調査していますが、性格は明らかではありません。また、平安時代末~鎌倉時代の面では、SB01・SB02以外にも、ほぼ全域でピットを確認しています。建物・柵などの遺構としては理解出来ませんでした。

⑥遺構外の遺物

ここでは、遺構に伴わない遺物を紹介します。

遺物の種類は、須恵器・土師器・埴輪・土錘・陶磁器が出土しています。時期的にも古墳時代から近世までと幅があります。(1)~(4)の須恵器は調査を行った古墳と同じ時期のもので、いずれかの古墳から流れたものと思われます。埴輪も同様で、出土位置からSX11以外にも埴輪を保有する古墳が存在したことを教えてください。

図191の遺物は、SB01などの時期の遺物です。少量ながら当時の生活を想像するには貴重な遺物です。

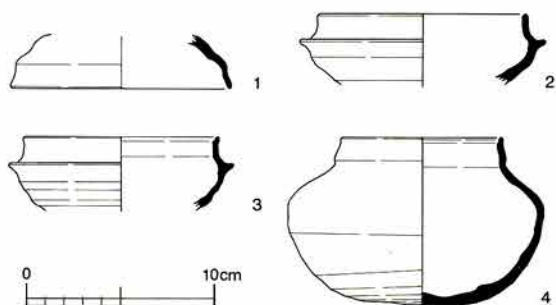


図187 遺構外の遺物(1)

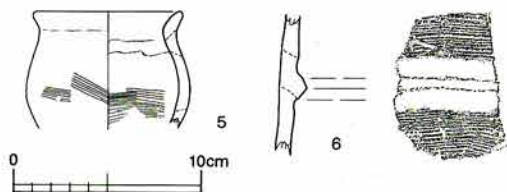


図188 遺構外の遺物(2)

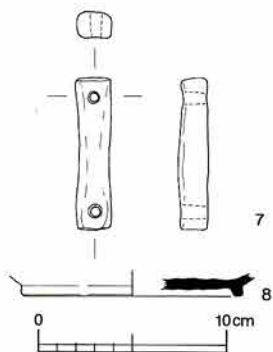


図189 遺構外の遺物(3)



図190 須恵器 短頸壺

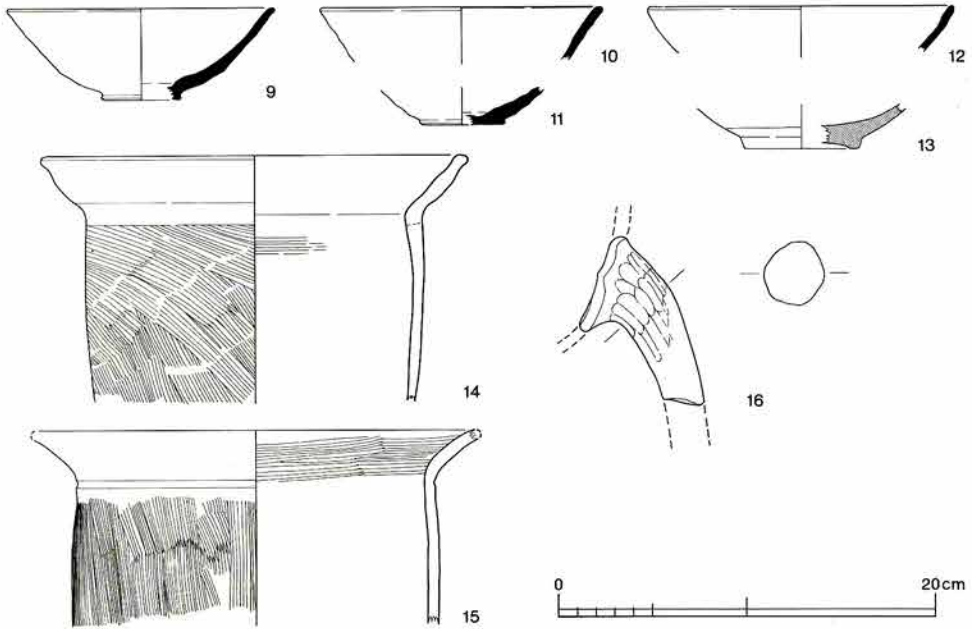


図191 遺構外の遺物(4)

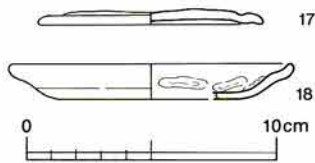


図192 遺構外の遺物(5)

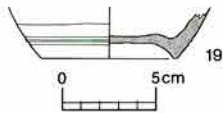


図193 遺構外の遺物(6)



図194 須恵器椀・土師器皿

表10 遺構外遺物観察表

No	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
1	杯 蓋	(11.8)	(2.8)	—	口縁部と天井部をわける稜はみとめられない。口縁部はやや外方へ広がり、端部は丸くおさめる。	内・外面ともロクロナデ。	
2	杯 身	(10.8)	(3.7)	—	たちあがりはほぼ直立する。受部は水平にのびる。端部は丸くおさめる。	底部外面ロクロケズリ、他は内・外面ともロクロナデ。	
3	杯 身	(10.2)	(3.85)	—	たちあがりはほぼ直立する。受部は水平にのびる。	底部外面ロクロケズリ、他は内・外面ともロクロナデ。	有蓋高杯の杯部か。
4	短頸壺	(8.4)	8.9	—	口頸部は短くわずかに内傾し立ちあがる。体部はやや扁平、体部の最大径は口径以上にある。口縁端部内面に凹線が巡る。	体部下半以下はロクロケズリ、他は内・外面ともロクロナデ、底部内面に一方方向の仕上げナデを施す。	外面肩部に蓋の口縁部が一部癒着。外面灰かぶり。

No	器種	法 量 (cm)			形 態 の 特 徴	技 法	備 考
		口径	器高	底径			
5	小 壺	(7.6)	(6.1)	—	外反する短い口縁部をもつ。	内・外面ともユビ成形ののちヨコ方向のハケ目を施す。 口縁部内外面はヨコナデ。	内面に粘土の継ぎ目がみられる。
6	埴 輪	—	(7.3)	—	断面台形の突帯をもつ。	内面はユビナデののちタテ方向のハケ目を施す。 外面は櫛目状のヨコ方向のハケ目を施す。	円筒埴輪。
7	有孔土鍾				長さ8.0cmの棒状で両端に孔をもつ。中央部がややくびれた形をしている。	孔は一方方向から穿っている。	
8	底 部	—	(1.2)	(11.4)	付高台をもつ。	内面ロクロナデののち不定方向の仕上げナデを施す。外面はロクロケズリののち、輪高台貼り付けのためヨコナデを施す。	杯の底部。
9	椀	(14.0)	(4.8)	(4.0)	平底、底部内面に凹部をもつ、底部は平底高台風に成形、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内・外面ともロクロナデ、底部外面未調整(糸切り痕)。	
10	椀	(5.0)	(2.8)	—	口縁端部はわずかに肥厚し、丸くおさめる。ほぼ直線的に立ち上がる。	内・外面ともロクロナデ。	
11	椀	(16.2)	(2.4)	—	口縁端部は丸くおさめる。やや内彎気味に立ち上がる。	内・外面ともロクロナデ。	口縁部外面に重ね焼き痕。
12	底 部	—	(2.5)	(4.0)	平底、体部はほぼ斜め上方に直線的に立ち上がる。底部はやや平底高台風に成形される。	内・外面ともロクロナデ。底部外面未調整(糸切り痕)。	椀の底部。
13	底 部	—	(2.3)	(5.8)	低く削り出した高台をもつ。	ロクロナデ調整。施釉(灰色を帯びた白色に発色)、底部外面露胎。	白磁碗IV-1類。
14	埴	(21.8)	(12.9)	—	ほぼ直立する体部をもち、口縁部は斜め上方へ外反してのびる。口縁端部はほぼ水平。	体部内外面ともユビ成形ののち粗いハケ目を施す。 口縁部外面はユビおさえののちヨコナデ。	
15	埴	(24.0)	(10.25)	—	ほぼ直立する体部をもつ、口縁部は外反する。	体部外面はタテ方向の粗いハケ目ののちナデ、口縁部外面ヨコナデ内面はヨコ方向のハケ目。	
16	埴 の 脚	—	—	—	断面はほぼ円形。	外面に指頭圧痕のこる。	三足器の脚。
17	蓋	(9.0)	0.5	—	扁平、天井部と口縁部の界は屈曲して口縁部が外へのびる。	外面天井部はユビおさえのあとのこる。 内面及び口縁部はヨコナデ。	
18	小 皿	(11.4)	(1.4)	—	口縁部はわずかに外反気味に立ち上がり端部はやや内彎する。	底部内・外面はユビおさえ、口縁部内・外面はヨコナデ。	
19	底 部	—	(2.7)	(7.2)	削り出しの高台をもつ。	内面底部と体部の界に凹線が巡り、砂が付着する。 底部外面は無釉。	

⑦遺構外出土の弥生土器

前項と同じく遺構外の遺物ですが、包含層から比較的まとまって出土しましたので、分けて報告します。

図195はS X 0 5の南側から出土したものです。小片が多く図化できたものは9点だけでした。器種は、壺・甕・鉢と高杯のミニチュアかと思われるものです。时期的には同じもので、S X 0 5をはじめとする方形周墓と同じ時代で、弥生時代末の弥生土器です。壺は底部でも丁寧に整形されています。ヘラミガキを主体としてナデでも仕上げられています。甕も表面は平滑に仕上げられていますが、断面が厚く精製土器とは言えません。

図196の土器は、調査区全体から出土したものです。一部、住吉駅構内立会調査の時の土器も含まれています。大半はやはり後期の土器ですが、僅かに中期まで遡る土器が認められます。(1)は直立に近く上方に延びる特徴的な酒津式と呼ばれる吉備産の甕の口縁部です。小片ですが、北四国地方(阿波・讃岐)から運ばれたと思われる土器も出土しています。

ほとんどが在地(坊ヶ塚遺跡近辺で焼かれたもの)の土器であろうと思われませんが、赤っぽく焼かれた土器が多いことは、埋葬用として使われたことを示すのかもしれませんが。

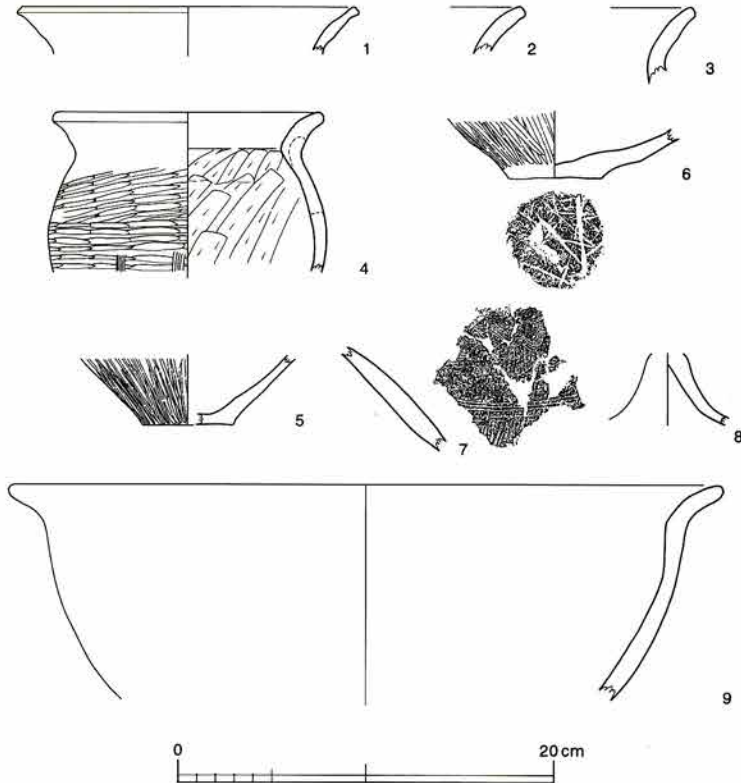


図195 弥生土器実測図(1)

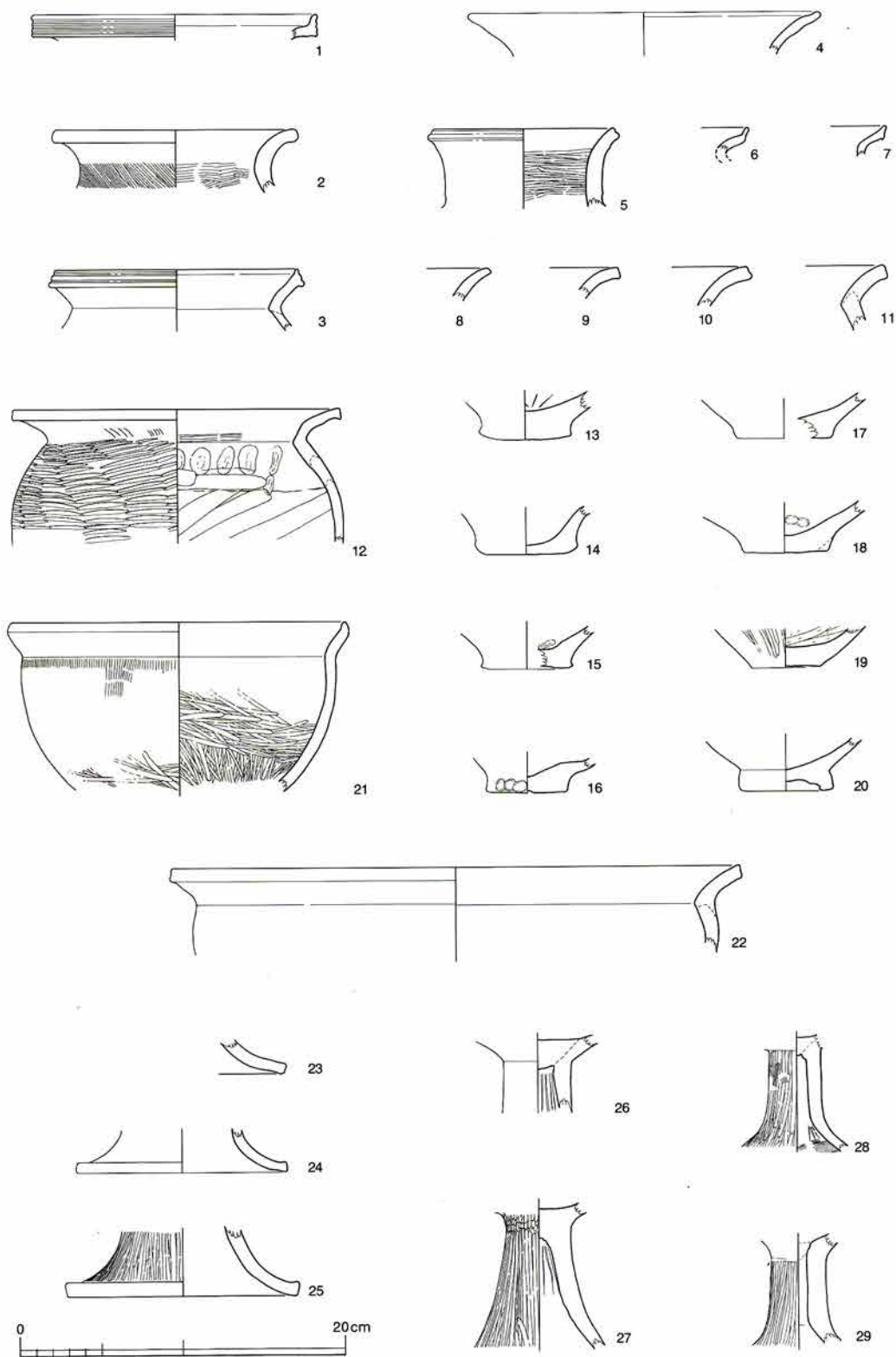


图196 弥生土器实测图(2)

IV. 土層転写覚書

考古学の調査の方法は年々進歩しています。今までは、出土遺物を持ち帰り整理することがほとんどでした。遺物の切り取りや断面の剥ぎ取りを行って、より客観性のある資料作成に努めています。今回の調査でも地震の痕跡を資料化するために、その部分の土層断面の剥ぎ取り（土層転写）を行いました。今後、一般的になろうかと思しますので、その方法を覚え書きとして記してみます。

用意する物：ハケ5～6本、ビニール手袋、はさみ、カッターナイフ、はしご、接着剤
パネル板、3cm角の木材、鋸、釘、筆、混ぜ棒、はかり、紙コップ（大）
寒冷紗（またはガーゼ）、こて、万力、断面整形用のねじり鎌等、転写用の
溶剤、張り付け用の溶剤、仕上げ用の溶剤。

2種類の接着剤

トマックNR-51（エポキシ系）	乾いた土に。強度—大
NS-10（ウレタン樹脂）	湿った土に。強度—小 砂層に。

塗 布 *NR-51の場合（気温に反応して硬化）

NR-51：硬化剤＝5：2の割合で混合。 1㎡あたり約3～4kgを要します。
NR-51は蓋をあけたら沈澱物を均一にするためよくかきまぜておきます。硬化剤と充分混ぜあわせたのち、土層断面に塗布します。液はかなり下に流れ落ちますからその量に留意して作業してください。断面塗布したら少し時間をおいてから（20分位）裏打ちのガーゼまたは寒冷紗をおしあてます。この時、布と布の重なる部分は20cmぐらいとっておき、端も多少余らせておきます。

塗布する時断面の凹んだところにもハケで塗りこんでおきます。そうしないと後で穴になってしまいます。裏打ちが少し乾いたら上からもう一度塗布してください。

乾く時間は夏で30分、冬で3時間が目安ですが、厳冬期には、1夜明けても乾いていないことがあるため、この時期は避けるかジェットヒーターで暖めてやるかしてください。冬季はNR-51と硬化剤を温めてからまぜると効果があります。

*NS-10の場合（水と反応して硬化）

NS-10：水＝7：3 紙コップに入れてハカリで調整。
水と混ぜると、かきまぜているうちに泡が発生するので、すばやく断面に塗りつけます。

塗布に時間を要するとコップの中で硬化する恐れがあります。

塗布してから約10分弱、泡がややなくなってから裏打ちをしてその後塗りつけます。水を入れた時発生した泡は、炭酸ガスで、ひとまず泡が一段落してから塗りつけます。

砂層の場合は水で湿らせてからNS-10で、粘土の場合も同様です。



図197 接着剤を塗布

NS-10は断面の水の状態によって、混合比が違ってきます。断面に水が多い場合には混ぜる水は減らしてください。砂層の場合は7:3。

断面の上下で土層の質が違う場合NR-51とNS-10を使い分けるのもよい方法です。いずれにしてもNS-10は時間的にとても忙しい作業になります。

塗布と裏打ちの際の注意

1. NR-51の混合は、混ぜ棒で十分に攪拌させないと硬化しないことがあります。
2. 塗布の時使用したハケは、シンナー、アセトン等の中で洗っておかないと固まって使用出来なくなってしまいます。
3. 裏打ちの布を塗布面に貼り付ける時はしっかりとおさえつけて、すきまのないようにしてください。そうしないとパネル貼りのときにうきあがったり、補修のときに接着剤がうまくつかなくなったりすることがあります。
4. NR-51での場合はとくに水に気をつけてください。剥ぎ取る範囲より下側に湧水している場合、深く掘って剥ぎ取り面に水がかからないようにしてください。
5. 剥ぎ取り面を整形するとき断面の分層の線は消してください。そうしないと剥ぎ取った面に線が浮き上がってしまいます。
6. 断面からは突出した石、土器がなるべくないようにしてください。何故ならばパネルに貼る時は、その断面が裏がわになるので貼りつけるとそこだけ浮きあがって非常に不都合だからです。



図198 塗布状況



図199 寒冷紗による裏打ち

剥ぎ取り 塗布面が硬化したら剥ぎ取りを行います。上から剥ぎ取っていきますが土層自体が固い場合逆に塗布面のほうが断面に残される恐れがあります。充分硬化してから剥ぎ取って下さい。塗布面が大きい場合1人では難しいので2～3人必要です。2人で引っ張って1人が上からスコップ等で割れ目をいれるとよいでしょう。

剥ぎ取りの際の注意

1. 塗布面が硬化したかどうかの判断は上の方を少しめくって調べてみてください。
2. 引っ張ると多い時で3～5cm土がくっついてくることがあります。この場合はスコップ等で外してください。
3. 土層がカチカチに乾燥して固い場合は剥がす隙間に水を流し込んでみます。NR-51でも硬化後は濡れても大丈夫です。
4. 塗布面にレベルのラインがマジック等で書いてあるかどうか確認しましょう。

水洗い 剥ぎ取ったら水洗いをします。水道の水とほうき、ブラシ等で勢よく洗い流します。かなり念入りに洗ってください。硬化しているかぎり剥ぎ取った面が洗い流れてしまうことはありません。念入りに洗っておかないと乾いてから土がポロポロ落ちてきて後の始末に困ることになります。ハイプレッシャーで洗うのもひとつの方法です。

パネル作り パネルは厚さ3～5mmのコンパネ等で作ってください。裏は3cm角位の木材でパネルが歪まないように枠をつくります。大きさは上下は実物より長く、左右はやや短く作ってください。

パネル貼り 水洗い後、乾いたらパネルに貼りつけます。接着剤は、アラルダイト1252とハードナー837とマイクロバルーンです。

アラルダイト1252：バードナー837＝5：2の割合で混合します。

パネルの上に一旦剥ぎ取りを置いて、上部を20～30cm空けます。下部は数cm余らせてください。パネルの上に置いたら剥ぎ取りの上の端を鉛筆で線を入れておきます。この後剥ぎ取りを外して、パネルに混合液を塗ります。1㎡につき約300g位必要です。混合液を伸ばすのはハケよりもベニヤ板のほうが便利です。これの上にマイクロバルーンを混ぜたものを塗ります。マイクロバルーンの混入率は目分量ですが、かきまぜながらマイクロバルーンを徐々に混ぜてゆきます。大雑把に言って、透明なところなくなって灰色のコンクリート状になった頃が目安です。1回目の塗りが多少乾いてから塗ってください。1㎡につき約600g位必要です。その上に剥ぎ取りを先の鉛筆の線に合わせて貼りつけます。土嚢等の重しをのせて板との隙間をなくします。パネルの端は板を噛ませて、万力等で固定させます。



図200 再度接着剤を塗布

パネル貼りの際の注意

1. 裏打ちに書いたレベルのラインをパネルの線に平行に、つまり立てた時レベルが水平になるようにしてください。
2. レベルのラインはパネルの裏側に写しかえておいてください。
3. 2回目の塗りは鉛筆の線より下4～5cmは塗らずに空けておいてください。剥ぎ取りを置いてプレスするとはみ出していきます。



図201 ジェットヒーターによる乾燥



図202 パネルに接着剤を塗る

整形

パネル貼りが固まったら整形作業を行います。パネルの左右、下部のはみ出した剥ぎ取りを大きめのカッターやグラインダーで切り取ります。表面の濡れ色を出すためにサンコールSK-50を使用します。サンコールSK-50：サンコールシンナー＝1：4の割合で混合。霧吹きで一度全体にムラなく吹きつけてからハケで2～3回塗って仕上げてください。パネルの上部の空いたところはペンキで青色等の着色をしましょう。穴のあいたところは、セメダイン+アセトンを塗って上から同質の土をかけて修復します。



図203 パネルに接着させる



図204 整形作業

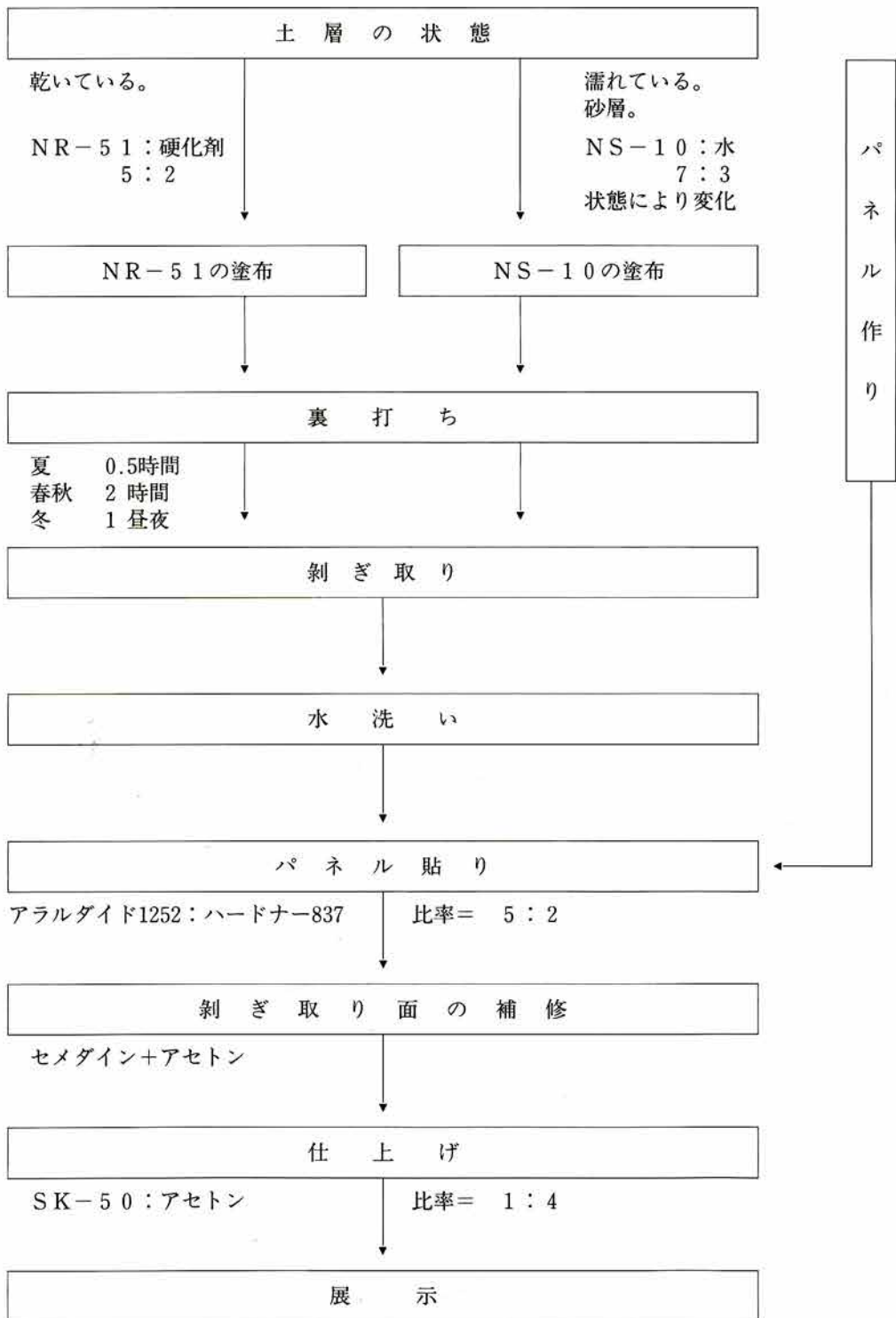


図205 土層転写の流れ

整形の際の注意

1. 作業はなるべく屋外の日陰の風通しの良い場所で行ってください。やむをえず室内で行う場合も窓を空けておいて下さい。
2. 石、土器等が断面に張りついている時は、SK-50をなるべく塗らないようにしてください。表面が光ってしまいます。
3. 火気は絶対厳禁です。とくに煙草など吸わないようにしてください。
4. シンナー缶は直射日光にあてないようにしてください。



図206 坊ヶ塚遺跡 土層転写 仕上がり

V.は公開していません

VI. 坊ヶ塚遺跡の地形環境分析

高橋 学 (立命館大学 地理)

はじめに

六甲山南麓の地形域環境分析

住吉川流域の地形面環境分析

住吉川流域平野の地形帯環境分析

坊ヶ塚遺跡周辺の微地形環境分析

坊ヶ塚遺跡の極微地形環境分析

おわりに

はじめに

六甲山南麓における遺跡の把握は、従来あまり知られていなかった平野部における発掘調査が進展するにつれて、大きく変貌をとげつつある。現在、この地域は、急激な再開発の波の中にある。このため、今まで宅地の下に位置し存在の知られていなかった遺跡が次々と姿を表しはじめたのである。これらの遺跡は、再開発により破壊されてしまうため、兵庫県、神戸市、芦屋市などの関係機関が、記録保存のための発掘調査が実施されている。調査成果の中で地理学の観点から特に注目されるのは、大規模な古墳すら埋没させてしまうような洪水堆積物の存在が確認されたことや、地震断層やそれにともなう噴砂がしばしば検出されたこと、そして水田など生産遺跡の状況が明らかになり始めたことがあげられる。遺跡の発掘は、単に埋蔵文化財の調査に留まるものではなく、地形発達史、災害史、土地開発史などの観点からも、極めて重要なものと認識され始めたのである。

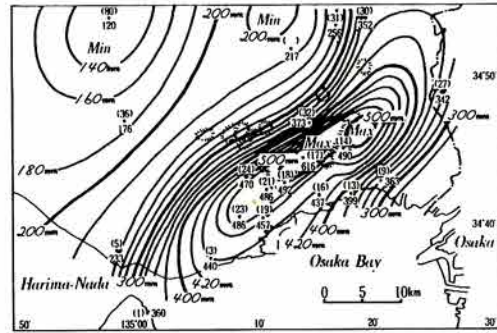
さて、今回報告する坊ヶ塚遺跡の発掘調査は、JR住吉駅のステーションビル建設に先立ち実施されたものであり、前述の観点からは、弥生時代、古墳時代後期、昭和13年の洪水と平安時代末～鎌倉時代初頭の遺構面を切る断層および噴砂が確認された点が特に注目される。

なお、調査にあたっては地形環境分析(高橋 1987)の方法によった。

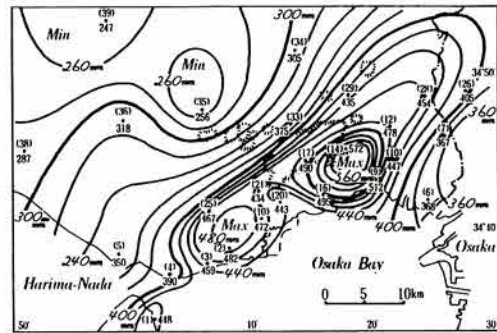
六甲山南麓の地形域環境分析

六甲山南麓の地形域環境分析については、既に(高橋 1986など)詳述したため、その要点のみ記すことにしたい。

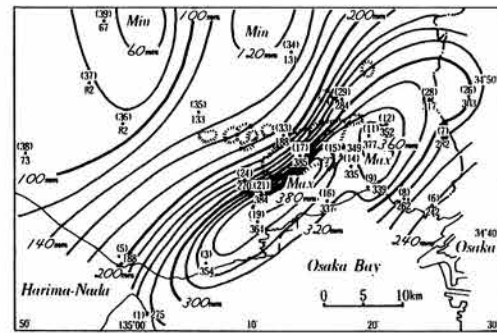
- 1) 地形域レベルで見ると、六甲山地南麓の地域は北から南に、山地域、丘陵域、平野域、海域の順に配列している。
- 2) 六甲山地は、藤田和夫 (1968) が六甲変動と呼んだ地殻変動の結果、現在も高度を1mm/年程度の割合で上昇させつつある。このため、山体は多数の断層によって分断され、階段状に高度を変化させている。
- 3) 六甲山地は、深層風化を受けた花コウ岩類（東部一六甲黒雲母花コウ岩、西部一布引花コウ閃緑岩）で形成されている。
- 4) 現在、六甲山地を被覆しているアカマツを主体とした植生は、大部分が最近の人工的な植林によるものであり、近世末一近代には広範囲に禿山が展開していた。また、それ以前にはアカマツの二次林であったようである。そして、中世から時代を遡るにしたがい一部に落葉広葉樹林を含む常緑広葉樹（照葉樹林）の占める割合が高かったとみられる。
- 5) 山麓には、大阪層群と呼ばれる半固結状態の鮮新-更新統から構成される丘陵が分布している。大阪層群のうち一部は、構造運動によって六甲山地の標高500m付近にまで持ち上げられている。
- 6) 平野は、崩壊しやすい六甲山地の性格を極めてよく反映しており、土石流扇状地や扇状地として形成された地形が広い範囲を占める。
- 7) 六甲山地南麓を流下する河川は、いずれも極めて急勾配で海へと至る。通常は、ほとんど水流がないものの、大雨の際に一旦出水すると、土石流を伴うことが多く、海域まで巨大な礫を運搬することがある。また現在は、河床が周囲より高くなっている河川（天井



1938年7月3～5日



1961年6月24～27日



1967年7月7～9日

図209 六甲山南麓の気象災害

川)が多いが、これは後に詳述するように、近世以降に生じた状況であり、中世以前には全く異なった様相を示していたと考えらる。

- 8) 大阪湾の西部にあたる海域は、六甲変動の影響を受け、急速に水深を増す。しかしながら、後に述べるように、全体としてみると水深は浅く、現在のような状態になったのは完新世になってからである。
- 9) そして、今回新たに付け加わったものとして、気象データの分析がある。観測された詳細な記録の残る水害について検討した結果、六甲山地南麓の大雨には共通するみつつの特徴があることが判明したのである。すなわち、梅雨前線が本州に沿って太平洋上に停滞し、台風が九州に接近した場合に、豪雨が記録されやすい。しかも、六甲山地南麓に降水の中心がある場合と播磨西部にその中心がある場合とがある。そのいずれの場合であっても、印南野付近が境界となる。六甲山地南麓と播磨西部の水害は、厳密には一致しないことが多い(図209参照)。また、1時間あたりの降雨量が40mm、あるいは降り始めからの総雨量が200mmを越えたとき、災害の発生する可能性が極めて高くなる。

以上のように、地形域レベルでは、崩壊しやすい六甲山地の性格が、この地域の特徴として大きな比重を占めているといえよう。

住吉川流域の地形面環境分析

つぎに住吉川流域の地形面環境分析のレベルで住吉川流域平野を捉えてみたい。

住吉川は、六甲山(標高931m)に源を発し、わずか9kmの距離で大阪湾に達する急勾配の河川である。住吉川は侵食域に花コウ岩類だけでなく砂岩、チャート等からなる中・古生層の地域を包含していることが、特徴的である。

図210に示したように、住吉川流域の平野は、段丘Ⅰ面、段丘Ⅱ面、完新世段丘面、現氾濫原面の4面の地形面に分類できる。このうち最も古い時代に形成された段丘Ⅰ面は、現在、人工改変が著しく、大阪層群から構成される丘陵と識別することが困難になっている。完新世段丘面は、かつて段丘Ⅲ面として更新世に属すると推定していたが、神戸市教育委員会が実施した郡家遺跡御影中学校地点の発掘調査の結果、完新世においても土砂の形成があったことが判明し、完新世に属するものと修正した(高橋 1990)。いずれの段丘面も段丘化した後は洪水を受けることがなくなり、安定した環境となった。

現在、段丘面は地震や洪水の被害を受けにくいことや眺望がきくことなどの理由により高級住宅地となっていることが多いが、段丘Ⅰ・Ⅱ面は、近世には新田開発の場として、中世以前には利用価値の低い荒野や、日常生活に必要な薪炭を得るための山林と考えられていた可能性がある。現在の地形認識は必ずしも過去の人々のそれと同じではない。他方、完新世段丘面以

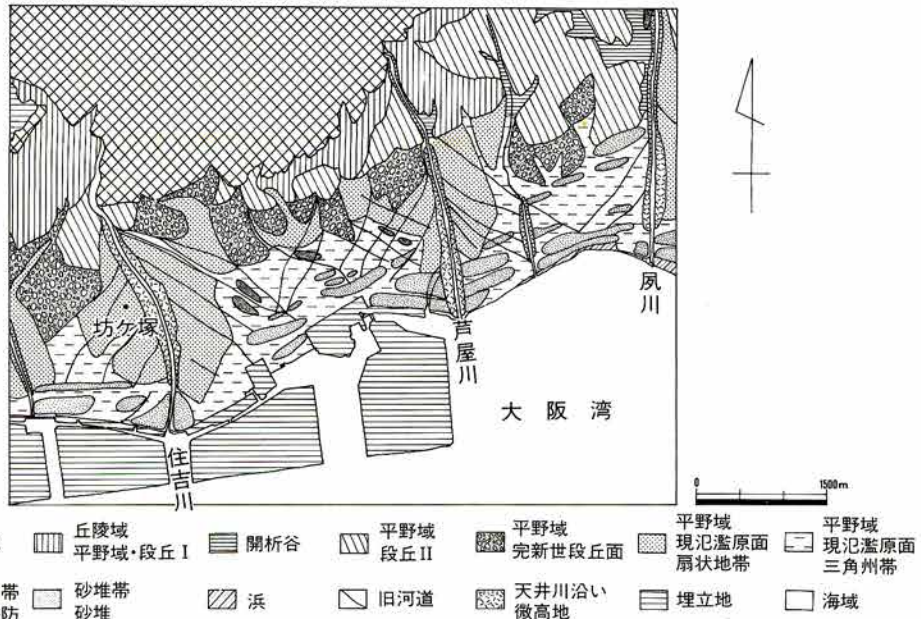


図210 地形分類図

下には、条里型土地割が広い範囲に展開している。

住吉川流域平野の地形帯環境

さて、現汎濫原面は、今回発掘調査を行った坊ヶ塚遺跡の立地する地形面であり、現在も土砂の堆積が継続している場所である。地形帯レベルで、この地域を捉えてみると、段丘II面、完新世段丘面は等高線の状態や礫の卓越する構成物から扇状地帯として形成されたものと判断される。段丘I面についても、その分布する位置が六甲山地に最も近いことから扇状地帯として形成されたものであることが推定できよう。これに対し、現汎濫原面はふたつの異なる地形帯から構成されている。すなわち、六甲山地よりの部分は、他の段丘面と同様に扇状地帯として形成されたものであるが、海側の部分は「縄文海進」最盛期に海域であった場所が、後に陸化した三角州帯と考えられるのである。

大阪湾・播磨灘地域における「縄文海進」については、前田保夫が多くの業績を報告している(前田保夫 1980ほか)。また、市原実・梶山彦太郎の河内地域における環境変化の研究は、考古学の研究者たちに深く浸透しているといっても過言ではない(市原・梶山 1986ほか)。両者は、「縄文海進」を気候の温暖化にともなう「高海水準」に起因した「海岸線の陸側への移動」と考えている。いずれの場合も標高+3mに海水準が達したものと見積っており、従来、この値が瀬戸内海沿岸の各地に適用されてきた。ところが、近年、河内平野や岡山平野において、現在の海水準が完新世において最も高い可能性が指摘されはじめた。前田が「高海水準」を確

認した明石川流域の場合、狭い明石海峡に流れの速い潮流が押し寄せるために、海水面が通常の場合と比較して1 m以上高くなっていることが確認されており、瀬戸内海沿岸地域を代表する値として用いることができない(海上保安庁水路部 1989)。仮に海水準が高くならなかったとしても、地形の形成が進んでいなければ、海岸線は現在よりも陸側に位置することになる。が生ずるのである。すなわち、現在より内陸側に海岸線が位置する原因が、「高海水準」とばかりはいえない点に注意を要する。

また、前田は「縄文海進」最盛期に形成された波蝕崖が T. P. + 4 m の等高線に沿って存在すると指摘しているが、その波蝕崖の刻まれているのが完新世段丘面や現氾濫原面の扇状地帯の端であることから、より新しい時代に原因を求める必要がある。

さて、六甲山地南麓の現氾濫原面・三角州帯の場合、ボーリングデータを見ると、典型的な海成層を確認することは難しい(高橋 1987)。これは、山地を流下した土石流が海域にまで到達するため不安定な海成となっていたためと考えられる。また、土石流は海底に堆積した細粒物質を挟ってしまうため、一層その傾向は助長される。ここでは、地形の傾斜変換点と最も陸よりの砂堆列をもって現氾濫原面・扇状地帯と三角州帯の境界と仮定することにしたい。

なお、六甲山地南麓における縄文海進最盛期の海岸線の復原については、稿を改めて報告したい。

坊ヶ塚遺跡周辺の微地形環境分析

次に、微地形環境分析レベルで坊ヶ塚遺跡とその周辺をみてみたい。その際、最も目をひくものとして、天井川および天井川沿いの微高地がある。坊ヶ塚遺跡の東を流下する住吉川は、現在、河床が周囲より数m以上も高い天井川となっている。このような天井川は、1) 堤防によって人工的に流路が固定され、2) 河床への土砂の堆積が進行し、3) 洪水の危険性の上昇に伴い堤防の嵩上げするといった過程が繰り返される中で形成されたと考えられている。また、天井川沿いには、河川の氾濫が繰り返した結果、溢流堆積物が集積して数mにも達している。この地形は、構成物や形成営力の点からみると自然堤防と同じであるが、その形成には人工堤防の築造と嵩上げが大きく関与していることから、自然堤防と区別して天井川沿いの微高地とされる。

図211に示したように、六甲山地南麓の道路や鉄道が花綵状に歪む原因となっているのは、垂直、水平両方向に緩やかで波長の長い起伏を形成する扇状地帯(段丘面を含む)であった。他方、河川付近で垂直方向に波長の短い急傾斜を形成しているのが、天井川および天井川沿いの微高地である。これらは、都市の発展や交通の障壁となっており、鉄道が通過するためにトンネルすら掘削されている。天井川、および天井川沿い微高地は、現在、非常に目立った微地形であるけれども、最も大きな形成要因が人工的な築堤にあることから、形成起源はあまり遡れ

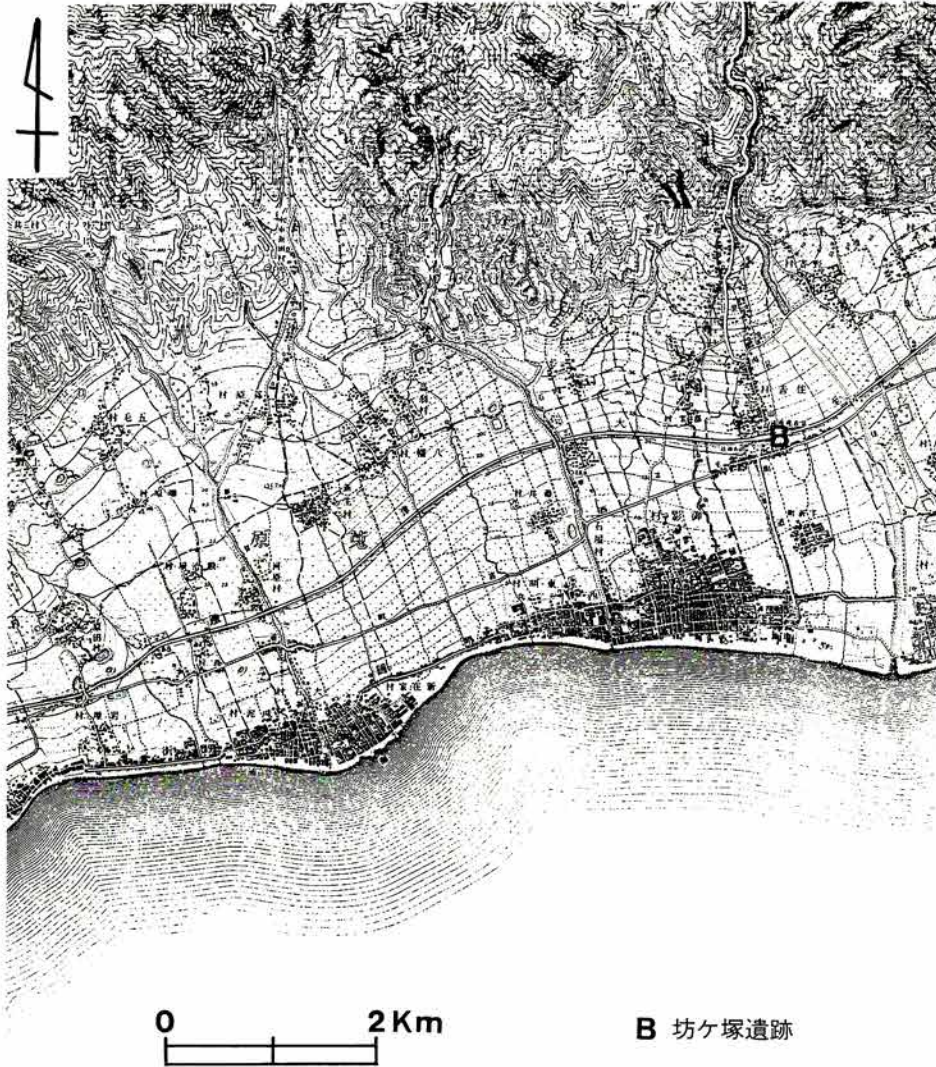


図211 1886年頃の住吉川流域平野（六甲山・神戸図幅）

るものではない。坊ヶ塚遺跡の南東に接した住吉東古墳を神戸市教育委員会が発掘調査した際には、天井川沿い微高地を構成する層から近世の陶磁器が出土しているという（神戸市教育委員会丹治氏康明氏のご教授による）。また、岡山県や滋賀県における調査事例でも、同様な結果が得られており、天井川および天井川沿いの微高地は、中世およびそれ以前には存在していなかった可能性が極めて高い。さらに、現氾濫原面・扇状地帯と分類されているところをみると、後述するように古墳時代後期以前と近世以降には、盛んな土砂の堆積がみとめられるものの、古代～中世の間は堆積がほとんど進展していない。このことは、現氾濫原面・扇状地帯は古代

～中世の間一時的に段丘化していた可能性が考えられる。すなわち、厳密にいうならば、近世以降の土砂堆積が余りに大量であったために埋積されてしまった完新世段丘II面・扇状地帯であるかもしれない。今後の検討が必要である。

さて、扇状地帯を構成する微地形は、網目状の平面パターンを示す多数の旧河道とそれに囲まれた旧中洲あるいは土石流ロープが基本をなす。一般に、扇状地帯というと砂礫層によって構成されていると考えられているが、後にも詳述するように、住吉川流域の扇状地帯の場合、その表層近くは自然堤防帯の特徴を示す砂層やシルトでできている。この細粒物質は、礫層で構成された起伏を埋積するかのようには堆積している。すなわち、厳密にいうと扇状地帯と分類される地形帯は扇状地帯を自然堤防帯が薄く被覆しているのである。ただし、細粒物質の層厚が薄いために、下部に埋積された扇状地帯の特徴が現在の地表面から読み取れると考えられるのである。これと同様な現象は、揖保川流域の扇状地帯でもみとめられている（高橋1985）。揖保川流域においては、扇状地帯から自然堤防帯への環境変化は、早いところで縄文時代後期と縄文時代晩期の間（完新世段丘I面）、遅いところ弥生時代前期末～中期初頭であった（完新世段丘II面）。

坊ヶ塚遺跡では、図212に示したように扇状地帯の旧中洲（土石流ロープ）と旧河道部分が今回発掘調査されたが、旧中洲（土石流ロープ）部分の形成がほぼ終了するのが弥生時代中期頃、そして旧河道部分が自然堤防帯を構成する砂層で埋積されるようになったのが古墳時代後期（6世紀末）と考えられる。この地形帯が扇状地帯であった時には、現在と比較して明瞭な起伏に富んでいた。この様な起伏は、坊ヶ塚遺跡はもちろん、南東に隣接する住吉東古墳、南西に位置する住吉宮町遺跡でも神戸市教育委員会の実施した発掘調査によって確認されている。

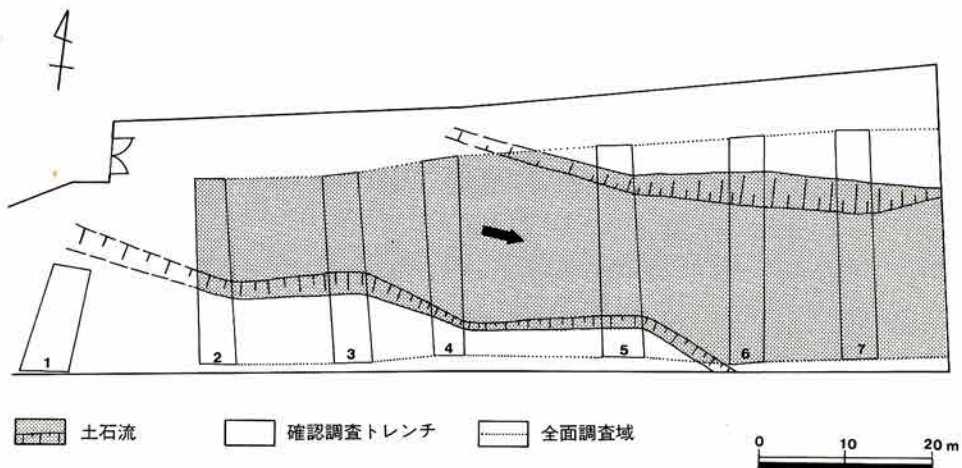


図212 土石流ロープと発掘地点

現在の完新世段丘面と沖積面の土地利用は、微地形には対応していないが、都市化の進展していない1886年(明治19年)頃には、集落は埋没した旧中洲部分と砂堆部分に立地している(図211参照)。扇状地帯の上に自然堤防帯が重複するする以前は、土地利用と微地形とはより密接な関係があった。すなわち、発掘調査の結果によれば、微高地には古墳や方形周溝墓が立地し、微凹地部分には不定形小区画水田が営まれていたのである。

坊ヶ塚遺跡の極微地形分析

坊ヶ塚遺跡の発掘調査は、前述のように旧河道状の微凹地と土石流ロープにまたがって実施された。ここでは、表15・図213・図214に示したように、現在を除き11面の旧地表面が確認できた。

J R住吉駅(旧国鉄)の基礎となっていたアスファルトとコンクリートを取り除くとその下に大量の炭と焼土が確認される。これは1945年(昭和20)3月-8月の空襲によるものであった。その下には被災以前の駅の施設が存在している。

駅舎の下に存在するのは、1938年(昭和13)7月に阪神地域を襲った大水害によって堆積した洪水砂(1b)である。洪水砂の下には、また駅舎が存在する(2a)が、これは1890年(明治22)に東海道線が開通した時を上限とする。

3aおよび4aの旧表土は、条里型土地割に区画された水田に利用されていた。この様子は、1880年(明治22)の仮製1/2万地形図で概観することができる(図211参照)。

5aは比較的平坦な地表面に掘立柱建物のプランを発掘したほぼ全域で検出することができる。この地表面には図215に示したように地震による噴砂がみとめられる。噴砂は、ほぼ東西方向に雁行状に延びており、平安時代末~鎌倉時代の遺構面を切っている。また、一部は断層と

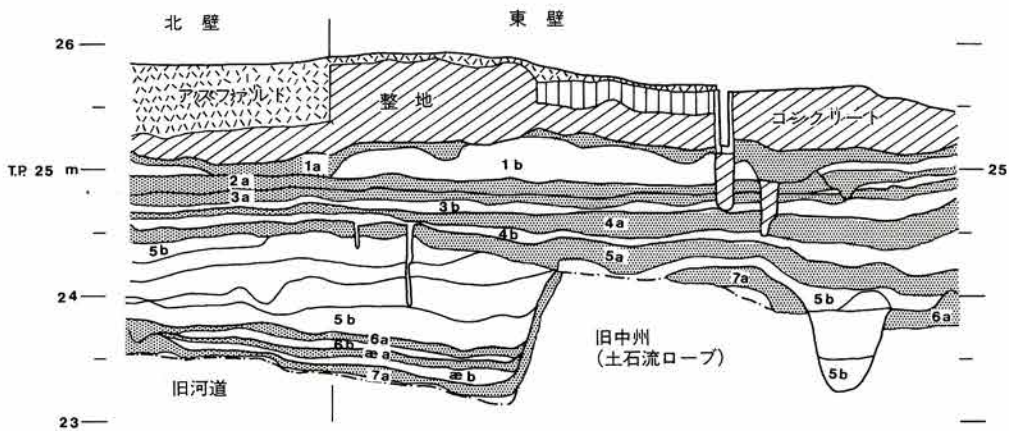


図213 地層断面図

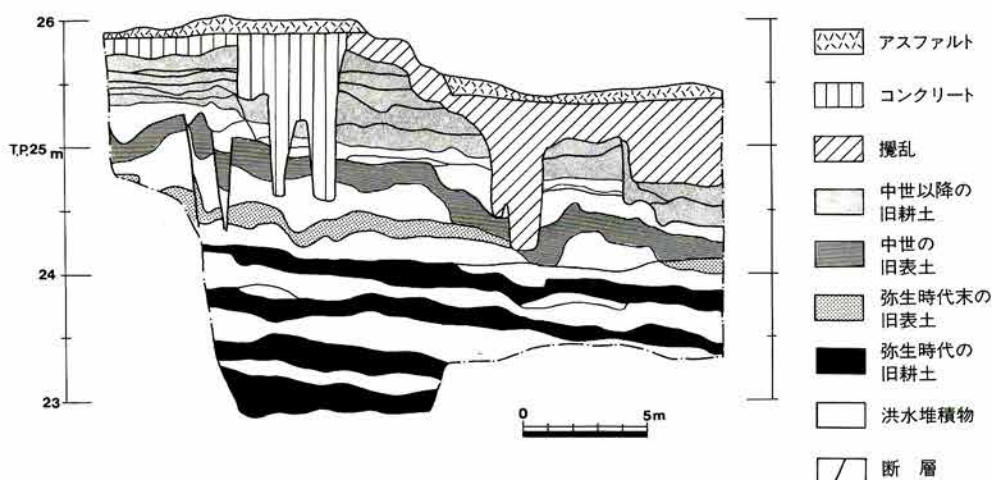


図214 第4トレンチ東壁地質断面図

なっており、図216に示したように、5 aより古い地層を垂直方向に約20 cm変位させている。このように噴砂を生じさせるような地震は、マグニチュード7以上の規模の地震であった可能性が高いと考えられている。同様の現象は、坊ヶ塚遺跡の南東に位置する住吉東古墳を神戸市教育委員会が発掘調査した際にも検出されている。マグニチュード7以上の地震ということになれば、大きな被害が生じた可能性が高く、今後、より厳密な時期の決定を行って行く必要があるだろう。

5 b層は、北北西から南南東へむけて堆積した河川の溢流氾濫堆積物である。坊ヶ塚遺跡およびその周辺ではこの堆積によって扇状地帯から自然堤防帯へと環境が変化した。溢流堆積物は、それまで微凹地となっていた部分に厚く、微高地部分は薄く堆積した。その結果、地表面はかなり平坦になったと見ることができる。

6 a以下は微起伏に富んだ地表面であり、微高地部分には一辺10m程度の浅い溝によって区画された方墳が立地していた。ここでは11基の方墳が確認できるが、主体部は検出できなかった(図215参照)。周濠の中から6世紀前半の遺物が出土する方墳と6世紀後半の遺物の検出できるそれとが識別できる。この微高地は、坊ヶ塚遺跡周辺にもみとめられ、古墳の立地する場所となっている。他方、旧河道部分は溢流氾濫の被害を受けながら、いわゆる不定形小区画水田として利用されていた。微高地部分では一面の地表面しか識別できないが、谷の部分では溢流堆積物を挟んで2面の地表が識別可能である(谷の中だけにみとめられる地層を αa 、 αb とする)。

出土する遺物から弥生時代末～古墳時代初頭に属すると考えられる7 aには、バラエティーに富んだ土地利用の様子がみとめられる。すなわち、微高地部分には3基の方形周溝墓をはじめ土器棺墓や竪穴建物が確認された。これに対して、微凹地部分には上層同様に不定形小区画

表15 坊ヶ塚遺跡の環境変遷

	地 層	土 地 利 用	時 代・そ の 他
	アスファルト	駅	現 代
	コンクリート	駅	現 代 一 部 盛 土
	焼 土	—	昭 和 20 年 空 襲
1 a	旧 表 土	駅	昭 和 13 年 7 月 以 降
1 b	洪水堆積物	—	昭 和 13 年 阪 神 大 水 害
2 a	旧 表 土	駅	明 治 22 年 東 海 道 線 開 通
3 a	旧 表 土	水 田(条 里 型)	近 世 ~ 近 代
3 b	洪水堆積物	—	
4 a	旧 表 土	水 田(条 里 型)	中 世 ~ 近 世
4 b	洪水堆積物	—	
5 a	旧 表 土	掘 立 柱 建 物	中 世
5 b	洪水堆積物	—	北 西 方 向 か ら
6 a	旧 表 土	古 墳 水 田(不定形小区画)	古 墳 時 代 後 期 微高地—墓地 谷—水田
6 b	洪水堆積物	—	
7 a	旧 表 土	竪穴建物・土器棺墓 方形周溝墓・水田	弥生時代末~古墳時代初 微高地—墓地 谷—水田
7 b	洪水堆積物	—	
8 a	旧 耕 土	水 田(不定形小区画)	
8 b	洪水堆積物	—	北 西 方 向 か ら の 土 石 流
8 c	洪水堆積物	—	
9 a	旧 耕 土	水 田(不定形小区画)	
9 b	洪水堆積物	—	
10 a	旧 耕 土	水 田(不定形小区画)	
10 b	洪水堆積物	—	北 東 方 向 か ら の 土 石 流
11 a	旧 表 土	樹 林 地	木 の 根 の 跡
11 b	洪水堆積物	—	
11 c	洪水堆積物	—	土 石 流
11 d	洪水堆積物	—	
11 e	洪水堆積物	—	土 石 流

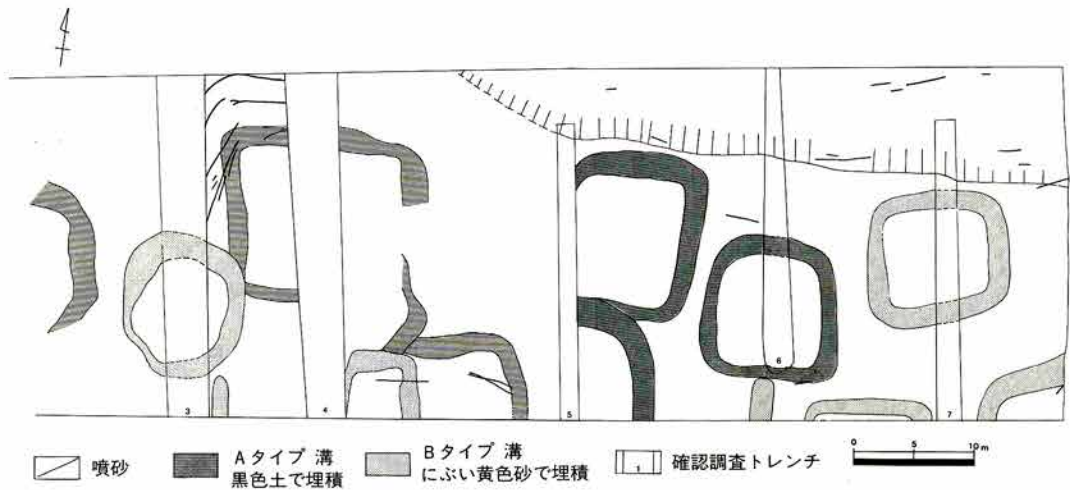


図215 噴砂と墓群

水田が営まれていたようである。

8 a、9 a、10 aはいずれも不定形に小さく区画された水田として利用されていた。これらは、それぞれ激しい洪水によってもたらされた堆積物によって埋積されており、残存状態は良くない（図214参照）。8 b層は坊ヶ塚遺跡を襲った最後の土石流であり、これ以降、坊ヶ塚遺跡は溢流堆積が進行する自然堤防帯へと環境が変化したと考えられる。

11 aには樹木の根と考えられる痕跡が多数みつかっており、この地域が樹林の繁茂する林あるいは森であったと考えられる。11 a以下には土石流の地層が複数存在しているが、途中で旧表土層が確認できていない。これにはふたつの可能性が考えられる。すなわち、土石流が発生し次に土石流が発生するまでの間が短く、土壌化作用によって表土層が形成されなかった場合、そしてもうひとつは、形成された表土層が土石流によって削剥されてしまった場合である。なお、大阪湾・播磨灘沿岸の各地では、水田耕作が開始される以前、樹林地が存在していたことが最近確認され始めている（高橋 1989など）。このことから、少なくとも扇状地帯までは森林となっていたことが判明する。このような森林が存在していた時は、水田として開墾されてから以降と比べると、見晴らしのきかない場所であったと推定できる。水田開発は、オープンな景観への転機でもあった。

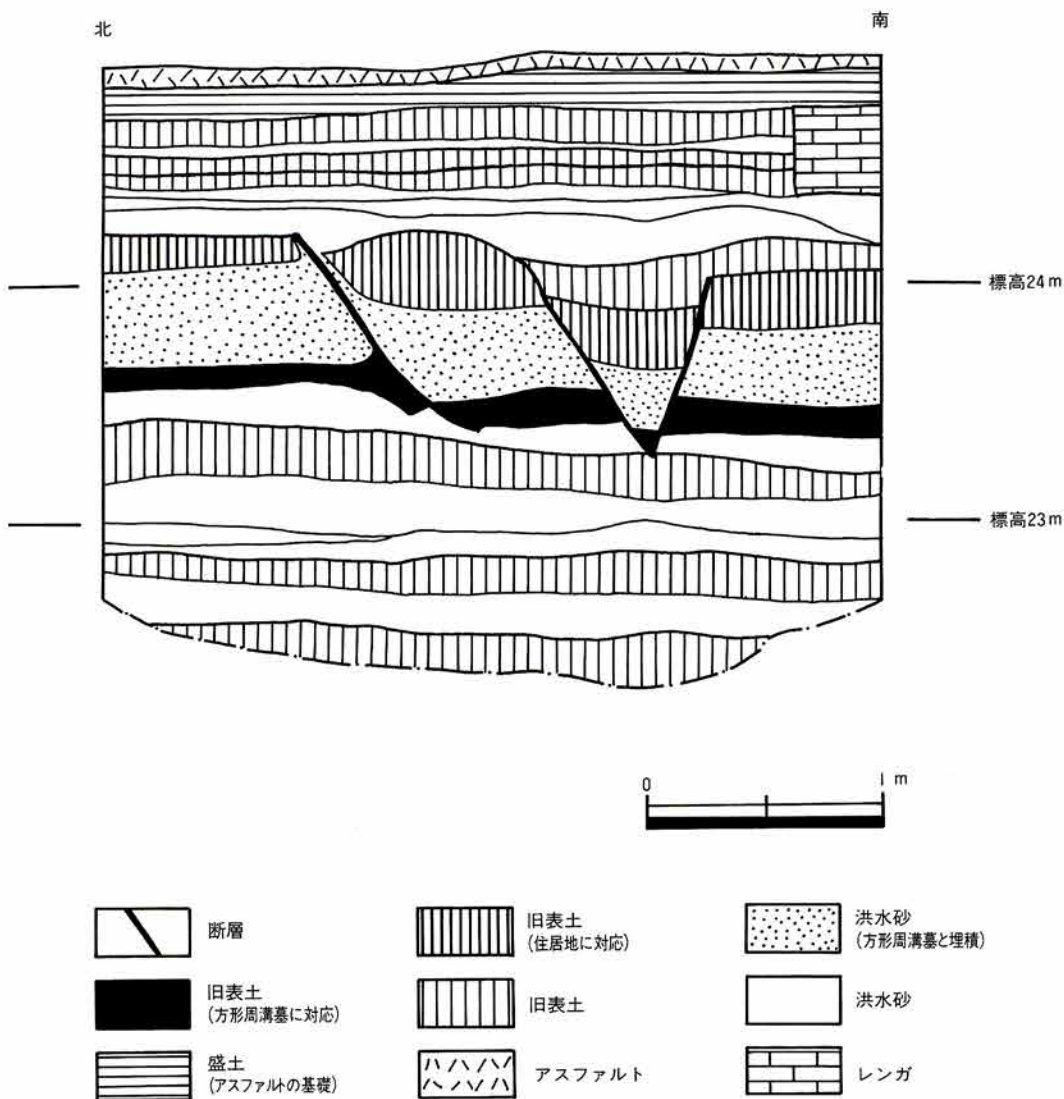


図216 断層（第4トレンチ北端）断面図

おわりに

坊ヶ塚遺跡の地形環境分析を行った結果、以下のことが判明した。

- 1) 坊ヶ塚遺跡は、現氾濫原面（完新世段丘II面）・自然堤防帯（扇状地帯）・埋没土石流ロープから埋没旧河道にかけて立地する。
- 2) 土石流ロープは弥生時代中期頃までに形成され、古墳時代後期～平安時代末・鎌倉時代初頭の間、自然堤防帯を構成する溢流堆積物によって埋積された。
- 3) 土地利用は、＜森林＞→＜不定形小区画水田＞→＜方形周溝墓・竪穴住居＞・（水田）→

<方墳>・(水田)→掘立柱建物→条里型水田→駅へと変化した。ただし<>は土石流
ロープ、()は旧河道部分である。

- 4) 平安時代末～鎌倉時代初頭の地表面には地震断層および噴砂が検出された。
- 5) 1938年(昭和13)の阪神大水害の洪水堆積物が確認できた。
- 6) 昭和20年の空襲による焼土層が明確に確認できる。

坊ヶ塚遺跡の周辺には住吉宮町遺跡、住吉東古墳など性格の類似した遺跡が存在しており、
これらとの関連を今後検討していく必要があると考えられる。

〔参考文献〕

- 高橋 学 (1987) 志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発 兵庫県教育委員会編「淡路・志知川沖田南遺跡」所収
- 高橋 学 (1986) 芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ 兵庫県教育委員会編「北青木遺跡」所収
- 藤田和夫 (1968) 六甲変動、その発生前後 第四紀研究7-4
- 神戸海洋気象台 (1950～1986) 「兵庫県気象月報」
- 神戸市役所 (1939) 「神戸水害史」
- 兵庫県ほか (1954) 「兵庫県災害史」
- 高橋 学 (1985) 災害 相生市史編纂委員会編「相生市史3」所収
- 高橋 学 (1986) 災害年表 相生市史編纂委員会編「相生市史6」所収
- 吉沢 博 (1984) 六甲山の雨と風 田中眞吾編著「神戸の地理」所収
- 高橋 学 (1990) 郡家遺跡―御影中学校地区の地形環境 神戸市教育委員会編「郡家遺跡御影中町地区第3次調査概報」所収
- 前田保夫 (1980) 「縄文の海と森」蒼樹書房
- 市原実・梶山彦太郎 (1986) 「大阪平野の生い立ち」青木書店
- 海上保安庁水路部 (1986) 「瀬戸内海の潮汐」
- 高橋 学 (1987) 芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅱ 兵庫県教育委員会編「小路大町遺跡発掘調査報告書」所収
- 高橋 学 (1985) 丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境 兵庫県教育委員会「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」所収
- 高橋 学 (1989) 石津川・陶器川地域の地形環境Ⅱ 大阪府教育委員会・大阪文化財センター編「小阪遺跡(南その1)」所収

VII. お わ り に

坊ヶ塚遺跡の調査を終えて早くも3年が経とうとしています。最初に現場に立った時、コンクリートの基礎が残りレールの痕跡と赤錆が散乱し、本当に遺跡があるのだろうかと思ったものです。工事関係者の方はなおさらだったと思います。

報告書作成過程でJRに乗り、住吉駅で下車すると住吉駅および周辺は一変して驚きを覚えます。今回調査の対象となった第5次調査地区は住吉駅ステーションビルとして装いを新たに“seer”の名で親しまれています。第7次調査地区の上には新しい駅が出来上がり、さらにその上(2階)には新交通システム(六甲ライナー)が海の手六甲と呼ばれる六甲アイランドへの主要交通となって走っています。第9次調査地区は立体駐車場に第10次調査地区は駅南への階段となっています。

坊ヶ塚遺跡に居住した人々はもちろんのこと調査を担当した私達も驚愕するばかりです。以前、地下道を通して駅前に出たり下り線ホームに行っていた静かな駅も、今は六甲ライナーの駅を付属し快速も停車する駅へと変貌しました。種々雑多な思いはありますが、新しく変化していることは素晴らしいことでしょう。未来に向かっての価値ある転換であったらと思います。大多数の方は、それを諸手を挙げて歓迎するでしょう。しかし、繰り言になりますが、古代人のモニュメントが犠牲になっていることは事実です。諸条件の中で、遺跡が失われることは止めようのないことですが、その存在だけは一人でも多くの方に知って戴きたいと思います。それが、私達調査を担当したものの責任であろうと思われまます。社会教育活動の立場からは一人でも多くの方に伝える義務があらうかと思ひます。そのために、どうしたら良いかと考え、あえて考察を省き平易なものになるように努めたつもりです。でも、ここで終わりの文章を記すまでの過程で読み直してみると、まだまだ難解で不十分なようです。



図217 現地説明会風景

遺跡はもう見る事が出来ません。これが唯一の調査記録です。そのために省略出来ない内容・分析はあり、語尾を変えただけにすぎない箇所も多々あります。もっと内容を咀嚼して一新した方がより良かったのかもしれませんが。現在ではそこまで割り切ることが出来ませんでした。将来は、本来の調査報告書に加えて、そういう趣旨の一般向きのダイジェスト版を作成するのが望ましいのではないのでしょうか。後日に最良の方法となるような方向性を期待して今回はこのようなスタイルとしました。一人でも多くの方に利用されることを望みます。少なくとも『坊ヶ塚遺跡』の名を覚えて戴ければ望外の喜びです。

坊ヶ塚遺跡が持つ問題も多くあります。多くの問題点を内包した遺跡です。その幾つかを上げてみますと、

1. 市街地の遺跡は、今までの常識では予想されないところにも存在します。
2. 弥生時代中期以降現在まで洪水と戦いながら生活を連綿と続けています。
3. 坊ヶ塚遺跡での土地利用は、水田（生産地）—墓地—居住地—墓地—水田と変化しています。
4. 水持ちの悪い、水田に適しているとは思われないところに、弥生時代中期に無理をして不定形の水田を築いています。
5. 弥生時代末には墓を作っています。方形周溝墓と呼ばれるもので、1辺10m余りの方形に溝を巡らし、溝に囲まれた台形部分に木棺などを納める墓です。3基調査しましたが、3基とも埋葬施設は残っていませんでした。
6. 東灘区の遺跡で弥生時代末の墓は、深江北町遺跡・郡家遺跡で見つかっています。どちらも円形周溝墓です。また、大阪湾周辺は円形周溝墓の多い地域です。坊ヶ塚遺跡は方形周溝墓ばかりと特徴的です。埋葬者の性格が異なっていたのでしょうか。
7. 古墳時代前期には居住地と墓地の両方に使われています。わずかな時間差があるのかも知れません。
8. 生活には竪穴住居を使用していました。調査したのは、6世紀初頭の古墳（SX02）の下層で確認した1棟だけですが、同様に後世の古墳などで破壊されたのかもしれない。調査した1棟（SB03）は方形のプランで2本柱の構造ではないかと推定しています。
9. 墓は3基調査しており、木棺墓・土壙・土器棺墓と異なる葬法の墓です。
10. 古墳は11基調査しました。大きくは3時期に分けられます。出土遺物のない古墳もありますが、それは切り合い関係や埋土から考えました。
11. 古い段階の古墳は、5世紀末～6世紀初頭の築造です。SX01・02・03・06・07・08・11・13の8基がこの時期の古墳です。東側の古墳は整然と築かれています。
12. 次の段階は、6世紀中葉の築造でSX12・14の2基が相当します。
13. 最後の段階は、6世紀後半でSX09が該当します。

14. 古墳はすべて埋葬施設は確認できませんでした。後の時代の洪水などによって流されてしまったようです。
15. 古墳墳丘内では埋葬施設は確認できませんでしたが、周溝内で埋葬施設を確認しました。
16. SX09・12と新しい時期の2基からで、SX09では河原石を使用した石棺墓で、SX12では同様の石棺墓と石蓋土墳墓です。
17. SX09の石棺墓(ST01)とSX12の石蓋土墳墓(ST03)では骨が遺存していました。ST01では上腕骨と大腿骨が残っていました。ST03では歯と大腿骨が残っていました。
18. 岡山理科大学 池田次郎教授に鑑定戴いた結果、骨は残存状況が悪いことから不明で、ST03の歯についてのみ5～7才の子供であろうとの鑑定結果を戴きました。表面がほとんど磨滅していないことが大きな理由のようです。鑑定可能な歯は2本だけで、下顎骨の左側第1大臼歯と下顎骨の右側第2大臼歯でした。
19. SX01・SX07の古墳の周溝からまとまって遺物が副葬されていました。その状況は当時の供献形態を知る好資料と言えます。当時のお墓の前でのマツリの状態が想像されます。
20. それら遺物の中の須恵器は胎土分析の結果、大阪府堺市一帯に築かれた陶邑窯跡群で焼かれたものが運びこまれているようです。
21. SX02では須恵器・土師器とともに製塩土器・鉄製ヤスが出土しています。2点ともに出土例の少ないものです。
22. ヤスは4点に分かれて出土しましたが、出土例や民俗例から考えて本来1セットになるものと想定されます。兵庫県内でははじめての出土例です。
23. 製塩土器は胎土分析の結果で明らかなように摂津産土器のテーターの枠外です。どこから運ばれてきたのか興味があります。
24. SX11は葺石と呼ぶ古墳の外部施設を持っています。墳丘に河原石を葺いたものです。今回調査を行ったなかでの盟主墳と考えられる中心的な古墳です。
25. 調査した古墳のなかには整然と重複することなく築かれているものと、重複して切り合い関係のある古墳があります。その違いは何か、今後の検討課題です。
26. 古墳は6世紀のSX09で坊ヶ塚遺跡では終わりになります。一般的にはこの時期が古墳築造のピークになります。古墳を築く行為が最高潮に達した時に消滅する理由は何なのでしょう。鴨子ヶ原古墳群・野寄古墳群などに墓域を移動したのでしょうか。
27. 今のところ東灘区の横穴式石室の検討はほとんど行われていません。野寄古墳群のような新たな古墳の確認もありました。今後、坊ヶ塚遺跡の古墳とともに検討されることでしょう。
28. 微高地上に古墳を築いていたころ、谷部は水田として利用されていたようです。

29. その後は、洪水に何度となく見舞われながらも水田が経営されていたようです。3面以上は確認されますが、時期は確定できませんでした。
30. 平安時代末～鎌倉時代に再び居住を始めます。掘立柱建物で2棟調査しています。ピットは広い範囲で検出していることから、遺跡全域で生活していたものと思われます。
31. その間の遺構は水田以外は確認していませんが、奈良時代の土師器などが出土しています。住吉宮町遺跡群の調査では遺構が確認されていることから、今回調査したところで遺構は見つかっていないだけかもしれません。
32. 平安時代末～鎌倉時代の遺構面で、地震の痕跡を確認しました。ほぼ全域にわたって噴砂を検出しています。方向もほぼ同じ方向で地震によって生じたものではないかと考えられます。寒川 旭氏によると慶長元（1596）年の伏見地震の可能性が高いそうです。
33. その後も水田の痕跡が数面認められます。
34. 第5次調査では明瞭ではありませんでしたが、第7次調査では駅となる前の畑を確認しています。
35. 昭和18年の阪神大水害の洪水層を確認しました。
36. 調査段階でも残っていますように住吉駅（貨物）の基礎を確認しました。今のコンクリートに比べるとより硬いものです。
などが挙げられます。

弥生時代中期から現代に至るまで土地は利用され続けてきました。そのうちの多くは洪水に見舞われていたことがわかりました。洪水の年代が明確なのは昭和18年の水害ですが、何時の時代も坊ヶ塚遺跡の生活を営んだ人々は自然との戦いが大きなウェートを占めていたものと思われます。

私たち担当者にとっては土地利用という観点から調査を行えるようになりました。それは、学習の場としての坊ヶ塚遺跡あつてのことだと思えます。

今まで考古学的な予備調査では坊ヶ塚遺跡の確認は不可能でした。まったく予想もしないところに遺跡が眠っていることも十分に考えられるようになりました。市街地の調査は条件・方法などのことから困難なことが多いようですが、その反面我々に教えてくれることも多いようです。これからも細かい調査はもちろんのこと、それに対応できる文化財行政と柔軟な視点が必要かと思えます。

このような体裁にすることに疑問もありましたが、調査段階で見学に訪れた方にヒントを得てこのスタイルに固執しました。2度行いました現地説明会には合計1000人を越える方々の参加を得まして、遺跡は担当者だけのものではないと痛感しました。遠路お越し戴いた方も多数いました。説明会以外にも何度となく足を運んで戴いた方もおられます。そ

れらの方々には有形無形の協力を得たこととなります。その気持ちを継続するインパクトを与えて戴いた現地説明会に参集戴いた方々に感謝致します。

今後とも、市街地の調査は増加するものと思われます。調査条件などは、いままでの通例の調査に比べると格段と悪いものです。しかし、その中で大きな新しい成果を導き出せた時の喜びは一入のものがあります。坊ヶ塚遺跡がまさしくそうでした。報告の中で明らかに出来なかったことなどが、より鮮明になることを期待するとともに坊ヶ塚遺跡の存在を知って戴くことを願うものです。

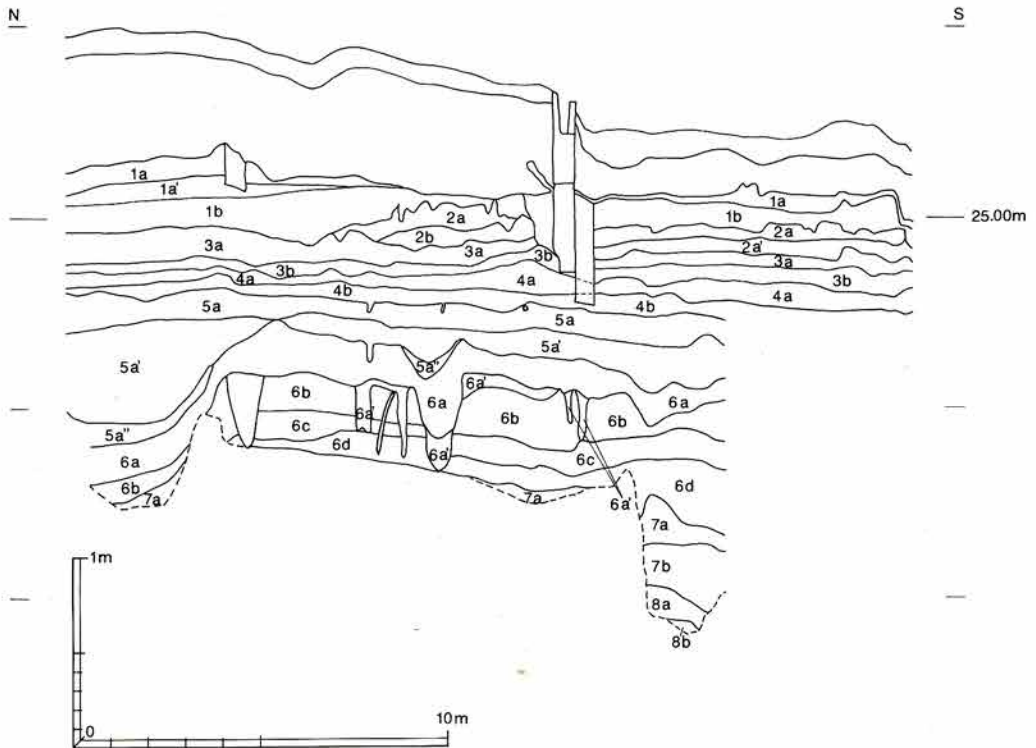
調査に際しまして多数の方々に協力を賜り教示を得ましたことを感謝致します。特に下記の方々には多大な教示・協力を得ました。明記して謝意を表し、本報告の結びと致します。

(五十音順・敬称略)

浅岡俊夫・池田次郎・奥田哲通・現地説明会参加の方々・寒川 旭・高橋 学
丹治康明・西岡誠司・丸山 潔・三辻利一・森 眞由美・森岡秀人・安田博幸

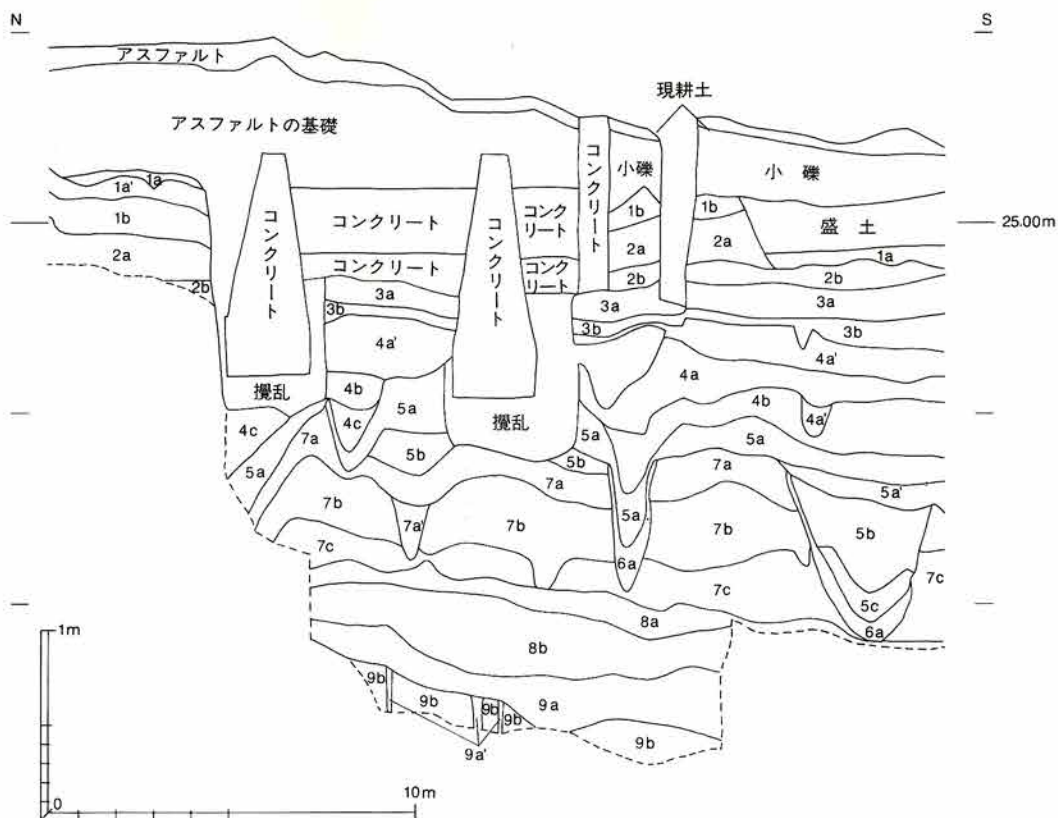


図218 完成した住吉駅ビル



6 トレンチ東壁土層断面図

1 a	7.5Y7/1	旧表土	灰色	細礫まじりシルト質細砂
1 a'	7.5Y7/1	旧表土状	灰色	細礫まじりシルト質細砂
1 b	2.5Y8/3		浅黄	粗砂～中砂
2 a	7.5Y6/3	旧表土	灰色	細礫まじりシルト質細砂
2 b (a')	7.5Y7/1	旧表土状	灰色	細礫まじりシルト質細砂
3 a	7.5Y6/1	旧表土	灰色	細礫～細砂
3 (a')	10YR7/2	旧表土状	にぶい黄橙	Fe ₂ O ₃ 細礫～細砂
4 a	2.5Y7/1	旧表土	灰色	Fe ₂ O ₃ 細礫～細砂
4 b	10YR7/8		黄橙	細礫まじりシルト質細砂
5 a	10YR5/2	旧表土	灰黄褐	細礫まじりシルト質細砂
5 a'	10YR8/2	旧表土		細礫～細砂
5 a''	10YR5/2	旧表土	灰黄褐	細礫～細砂
6 a	10YR1.7/1	旧表土	黒	細礫まじりシルト質細砂(備考S X-04埋土)
6 a'	10YR2/2	旧表土	黒褐	細礫
6 b	2.5Y7/3		浅黄	小礫まじり細砂
6 c	2.5Y7/3		浅黄	小礫まじり小礫多い
6 d	2.5Y7/3		浅黄	粗砂～中砂
7 a	2.5Y4/1	旧表土	黄灰	細礫～中砂
7 b	2.5Y7/3		浅黄	細礫～中砂
8 a	2.5Y4/1	旧表土	浅黄	細礫～中砂
8 b	2.5Y6/2		灰黄	細礫～中砂



7 トレンチ東壁土層断面図

1 a	2.5Y6/1	旧表土	黄灰 細礫まじりシルト質細砂
1 a'	2.5Y7/2	旧表土状	灰黄 細礫～細砂
1 b	10YR6/3		にふい黄橙 細礫～細砂
2 a	7.5Y6/1	旧表土	灰色 細礫まじりシルト質細砂
2 b	10YR6/4		にふい黄橙 細礫まじりシルト質細砂
3 a	2.5Y6/1	旧表土	黄灰 細礫まじりシルト質細砂
3 b	10YR6/3		にふい黄橙
4 a	10YR4/2	旧表土?	灰黄褐 (Mn) Key 細礫～細砂
4 a'	7.5Y5/4		にふい褐 (Fe ₂ O ₃) 細礫～極粗砂
4 b	2.5Y7/3		浅黄 細礫～細砂
5 a	10YR1.7/1	旧表土	細礫まじりシルト質細砂
5 a'	10YR4/2	旧表土	細礫～中砂
5 b	2.5Y7/3		浅黄 細礫～中砂
5 c	2.5Y6/3		にふい黄 Key 粗砂まじり極細砂
6 a	2.5Y5/2	旧表土状	暗灰黄 細礫～粗砂
7 a	10YR5/2	旧表土	灰黄褐
7 a'	10YR 5 /2	旧表土状	灰黄褐 極粗砂～中砂
7 b	2.5Y6/3		にふい黄 細礫まじり極粗砂～中砂
7 c	2.5Y6/3		にふい黄 粗砂～中砂
8 a	10YR4/2	旧表土	水田灰 黄褐 粗砂～中砂
8 b	10YR7/6		垂円マトリックス 巨礫粗砂～細砂
9 a	10YR4/2	旧表土	灰黄褐 極粗砂～細砂
9 b	10YR6/3		にふい黄橙 粗砂～細砂(花こう岩の)アルコース質
9 a'	10YR3/2	旧表土	黒褐 粗砂～細砂

兵庫県文化財調査報告 第81冊

1990年3月30日

坊ヶ塚遺跡

(住吉宮町遺跡群II)

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL (078) 341-7711

印刷 丸山印刷株式会社
〒676 高砂市米田町神爪57-1
TEL (0794) 32-1511
